
たった一つの冴えない仕事

悠理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一つの冴えない仕事

【Nコード】

N9381L

【作者名】

悠理

【あらすじ】

万屋という名目で何でも屋を営む美弦紀紫音は、ある日、些細なことから自分たちの世界とはまた違った、別の世界へと叩き落とされる。

そこで出会った一人の少女、リイナ・グレーティア・セツティ。

紫音は元の世界へ戻る方法を探すため、彼女と共に旅に出ることを決意する。

次第に見えてくる二つの世界を繋ぐ謎。元の世界へ戻るため、小さな希望を胸に掲げ、少年は歩き出す。

信念とは何なのか、たった一つの想いを貫き通す物語。

プロローグ（前書き）

この物語は異世界召喚系ファンタジーです。

作者はこういうのを書くのが初めてです。おそろく変なところは大量に出てくると思いますが、そこは割合してやっつけてください。。。ちなみに多少過激な表現が含まれると思いますので、R - 15 指定となっています。まあ、別に好きなら15歳以下でも大丈夫だと思うけどねっ！（おい

ではではどうぞ。

プロローグ

——西オーストラリア州。

そこにはパースという都市がある。

西海岸最大都市のパース市は、今も尚オーストラリア軍の重要な拠点としてそこに位置している。と同時に、スカイラインと呼ばれる海岸沿いに作られた数多くの高層ビルが有名で、キングスパーク丘から撮れる絶好の光景は感無量の一言。海外からの観光客もそれなりに良い方であった。

が、

そんな有名な都市だからこそ、裏の部分では人々の深い闇が暗躍しているものである。

パース市街のヘイ通り商店街。

そこから続く建物と建物の隙間に作られた小さな空間——いや、正確には何らかの工場の跡地、廃工場とでも言うべき場所で『それは執り行われていた。』

周囲にいくつもの積み上げられた赤黒いコンテナがある中、真っ白な貨物車を背に中年の男、エイルマー・コクソンは『取引相手』である目の前の男に語りかけた。

「……合言葉は？」

自分でも滑稽なものだと思うが、何らかの取引をするにつれ『合言葉』とはかなり大事なものである。仮に相手の素性が何らかのスパイだったりしたら、取引を吹かつけた側は即お尋ね物になってし

まう。

目の前の黒いフードを被った……青年？　だろうか。背丈的にまだ学生でも通じそうな彼は、なにやらボソボソを口を動かす。エイルマーはそれを上手く聞き取り、正しい合言葉だと認識すると軽く頷いた。

「あんたで間違いないみたいだな。初見じゃまだ幼さが見えたから怪しく思ったが……」

「……人を見かけで判断するのは『奴隷売者』として軽率ですよ。それより、例のブツは？」

最初の台詞が少し感に触ったが、ここで取り乱しては折角の取引が台無しになってしまう。

エイルマーは軽くフードの男を手招きすると、貨物車の後ろまで先導する。鍵はかけていないその扉に手をかけ、開け放った。

もし仮に、だ。

この場に何の罪も背負っていない純粹極まりない一般人がいたら、絶句した事であろう。

貨物車の中にあつたのは——いや、居たのは、20代前半の女子供。

どの少女達も手足が縛られており、今まで何をされてきたのかは言うまでもない——全身糸が切れたようにピクリとも動いていなかった。

もちろん、死んではいない。

ただ単に気絶しているだけだ。今まで何人、何十人も男達から買い回され続け、何度も何度も何度も、『肉便器』として使われたその疲労から。

だがそんな光景エイルマーは見慣れている。というかその受け渡しを仕事としているのがエイルマーだ。当たり前前の事である。

彼は目の前の男に対して言う。

「あんたの希望通り有り余っているもの全て運んできた。詳しくは分かんが処女も何人が混ざっているかもしれない。文句はないな？」

コクリ、と男が頷くのを確認してエイルマーは続ける。

「全部で67000ドル。これでもまけた方だ。ちゃんと金はあるんだろうな」

怪訝な声を出して尋ねる。

男は再び頷くと、さっきから右手に提げていた銀色のアタッシュケース、それを差し出してくる。かなり分厚い。よくこれを片手で持っていたらな、と感心しつつ、エイルマーは抱えるようにそれを受け取った。

ケースを開放し中身にぎっしりと詰まっている100ドル紙幣を束ごとに数える最中、ふと男がこんな事を聞いてくる。

「……ちなみに、分かれば良いですが今回は一人当たりいくらほどで？」

女一人ごとの値段という事だろうか。

そう解釈し、彼は札束を数えながら答える。

「そうだな……、まけにまけているから元の値段なぞ細かく覚えていないが、確か一人につき6000ドル前後だった気がする。これでも他の商人と比べたら俺のところは安い方だ。……まあ、俺からしてみれば人間の価値はその程度ってことだがな」

「そうですか。それは丁度良かった」

「？ 何を言つて——、……おい」

手元にある札束を数えている手が不意に止まり、エイルマーは話を中断させる。

明らかに馬鹿すぎる違和感に気付いてしまった。

「どういう事だ、全部で8000ドルほどしかねえぞ。まさかこれで全部買えるとか思ってたんじゃないだろうな？」

もしそうなのだとしたらこの男はよほどの馬鹿に違いない。仮に取引初心者だとしても、こんな間違い普通ならするはずないという

のに。

だが、相反したことに男は首振って呟いた。

「別に、全て買うつもりではありませんよ。今回は一人だけ買い取りに来ました」

つまりこの数十人の女の中から一人を選んで買おうと言うことらしい。

別にこういう買い取り方は珍しいものではない。口だけの説明だけでは物足りなく、実際に自分の目で見て品物を決めるという輩もそう少なくはないのだ。

……まあ、正直エイルマーからしてみれば同じ『荷物』を何度も往復して運ばなければならない事になるので、あまり好きではないのだが。

しかしこれでも相手は客、金を得るためにそこは我慢するしかない。

「それならそうと早く決めてくれ。俺も暇じゃないんだ」

「いや、それならもう決まってますよ」

「ほう？ どれだ」

男に背を向け、先に貨物車の中を見るエイルマー。

だが、彼は気付いていなかった。

何よりも、『奴隷売り』をするにして何よりも大事な事を、見落としている事に。

ただ合言葉が正しかった、たったそれだけで男に危害がないという結論を下してしまったその判断こそが――、

間違いだった事に。

ガンッ！ という強烈な衝撃が伝わってきたのはその直後。

顔の側面に何者かの蹴りが着弾し、エイルマーの体を軽々と真横へ吹っ飛ばした。

地面を転がり、コンテナに背を打ち付ける事でようやく止まる。

続いて襲ってくる猛烈な眩暈と激痛。何が起きたのか全く理解できず、それでも視線を元いた場所へ向けると、

そこには蹴りを放った余韻にしたっている黒コートの男がいた。彼は地面にうつ伏せで倒れるエイルマーを一瞥すると、

「さっきあなたは言いましたね。『俺からしてみれば人間の価値など6000ドル前後』だと」

男の黒コートが脱ぎ棄てられる。

そして覗かされたのは、黒髪黒目、ブレーザー型の学生服を着込む『男子高校生』。

どう考えても客には見えない、ただの『学生』でしかなかった。

「つまりあなた自身も『その程度』でしかないってことだ。8000ドル出す、釣りはいらぬ。あなたは俺が買い取ります」

そして、と少年は一息。

「つまりあなたの命をどうしようが、俺の勝手という訳だ」

そこまで言われて、ようやくエイルマーは状況を理解する事が出来た。

この男は元々女なんて買う気などなかったのだ。そしてさっきの言動からして、全てが罠。つまり、

「き、さま……！ スパイか何かか！」

裏で取引し金を稼ぐ者たちを肅清する、何者か。

エイルマーは最初からこの男の手の内で転がされていたのだ。買い取り依頼を受け、合言葉を決めたその瞬間から、何もかも。

反射的に彼は拳銃を取り出していた。

見つかったからには黙ってもらわなければならない。例え殺したとしても、黙るならそれでいい。『奴隷売者』とはそうやって生きていくのだから。

銃口を少年へと突き付け、狙いを定める。拳銃の中に忍ぶ弾丸が少年を貫きまいと怪しい光を放つ。そしてトリガーに人差指を引く

掛け、叩き引く。

——はずだった。

辺りに轟いたの激しい銃声ではなかった。代わりに響くは、ダン！ という何かを蹴りあげる音。

気付いたその時、エイルマーの手に拳銃は握られていなかった。代わりに彼の目の前まで一瞬で近寄ってきていた少年が一人。

少年が蹴り上げたのだ。

エイルマーが拳銃のトリガーを引くよりも早く、恐ろしいほどのスピードで距離を詰め、右足を振り上げることによって。

ひっ！？ と、エイルマーの喉が引きつる。

今この時、彼自身を襲ったのは紛れもない『恐怖』でしかなかった。

今まで何度かこのようにスパイが訪れてくる事は確かにあった。

しかしその度に、エイルマーは己の愛銃で奴らを仕留めてきたのだ。有無を言わず、その脳天に弾丸をぶち込んで。

しかし今回のこれは何だと言うのだ。

明らかに相手が悪すぎる。普通ならあり得ないような、狂人的すぎるスピードと一撃の破壊力。どう考えても人間とは思えない目の前の『少年』。

これが恐怖だと言うのか。絶対的な、抗いようのない恐怖。

コンテナに背中を預け、引き攣った顔でふとエイルマーは口に出していた。

「て、てめえ……一体、何なんだよ……」

少年はそんな彼を一瞥。

そして、

「ばんや万屋」

その一言が返ってくると同時。

首筋に強烈なチョップをもらい、エイルマーの意識は深い闇の中へと堕ちて行った。

美弦紀紫音みこるぎしおんが自由の身になったのは、パースでの人売取引を潰してから丸2日たった頃だった。

『万屋』と呼ばれる何でも屋を経営している紫音でも体と心は未だただの男子高校生。流石に徹夜でこれだけ動きまわるのには、いくら体を鍛え上げているといえど、多少の無理があつたかもしれない。

なんとって日本とオーストラリアの国境を2回ほど越えているのだ。

事の発展はある依頼主の主婦だった。自分の娘がもう5日ほど家に帰ってこない、いくら年頃とは言えおかしすぎる、捜してほしい、という依頼内容。

紫音も最初はただの迷子か、それとも恋人との駆け落ちなどと軽く考えていたが、娘の歳はもう16歳だと言うので迷子説はあり得ない。その子の学校の友達や教師などに聞いて回って恋人なるものがない事も判明し、駆け落ちも否定できてしまう。

さすがに紫音も怪しく思い、万屋としてのコネを最大限に活用して調べたところ、最終的に辿り着いたのが『人売取引』だったのだ。どうやら日本人の若い女性ばかりを捕まえて取引に使うというあくどい変態商人が事の発展らしく、そこから流れに流れオーストラリアのパースまで流れついていた。

ここまで来るとただの人捜し分の報酬では足りないくらいの仕事なのだが、美弦紀紫音の半分は優しさで出来ている。あえて親御さんにはこの事を黙って、彼はパースへと向かい、事前にしかけていた罠で商人を捕縛、娘さんのついでに他の捕まっていた女子供達も助け日本へと帰還した。

が、もちろんそこで自由が手に入る訳でもなく、捕まっていた子

達の本来居るべき場所を調べ、軽く20人はいた子達を日本全国駆け回って送り届け、さらに最後に寄った依頼主の娘さん家では、紫苑が帰ろうとすると娘さんが紫音の服の袖をなかなか離してくれなかったのだ。そのままなぜか晩御飯をいただき、夜の11時、ようやく帰り道を歩く事が出来たのである。

高校入学と同時に万屋の仕事を初めて軽く2年。

ここまでの大冒険を繰り広げたのは、西アフリカ辺りであった戦争で、どっかの国の捕虜となっていた多くの一般人達を助けに行つた時以来である。確かあの時は体のあちこちに銃弾をもらつて息絶え絶えだった気がする。まあ、今となつては良い思い出だ。

時間が時間のせい、人通りがない住宅街をとぼとぼ歩きながら紫音は大きく背筋を伸ばす。ピキピキ、と肩辺りから音が鳴つた。

（うー……なんかこう、久々に体動かした気分だなあ。たまには軽く運動しておかないとマズイかも）

いくら万屋の仕事で忙しいとは言え、たまには自主トレぐらいはした方が良くないのかもしれない。今回の仕事で痛いほど痛感させられてしまった。

……というか、こんな現状を美弦紀家の父などに見られてしまつては大変な事になりそうだ。フルボッコのレベルではない。

何だか恐ろしいほどの寒気に襲われ、明日からはランニングくらいしようかな、と思い直す紫音である。

美弦紀家には代々とある武術が伝わっている。

『美弦紀流』やら『殺法』、他にも『肉体改造』など不吉な呼び方が色々あるが、実際どうなのかは紫音自身もよく分かっていない。まあ、別に名前なんてどうでもいい。問題なのは中身なのだ。

莫大なエネルギーに耐えうるための土台となる体づくりから始まり、蹴りを中心とする立ちまわり。昔から、美弦紀家に生まれる者は性別問わず厳しい修行を受け続けなければならない。その武術を、生涯を超えても受け継がせるために。

もちろんながら紫音もその修業を受けてきた子孫の一人だ。

今ではその若さながら美弦紀家の当主にまで上り詰めている。本来ならば姉である美弦紀彼方かなたがその役を請け負うはずなのだが……大好きだった姉は、忌々しい過去とともに約一年前、突如その姿を消した。そんな姉の代わりに、紫音が当主を務めているのである。

(……、)

何となく。

何となく紫音は、自分の右手甲に視線を落とした。

そこには異様な物がある。

甲の中心——、そこに鉄でできた銀色の半球がくっついているのである。

いや、正確には。

このような形をした特殊な『釘』が、突き刺さっているのだ。

これは美弦紀家の修行で一人前と認められた者のみが植えつけられる小さな証。そして同時に、莫大なエネルギーを抑え込むための一種の『封印』。

おそらく1年前に姿を消した姉も、自分と同じものを右手の甲に植えつけているのだろう。

自分と姉を繋ぐ、唯一の証。

いつかまた会える、そう信じて、紫音は今まで生きてきたに等しい。

なんとって孤独の地獄に溺れていた自分を救いだしてくれたのは紛れもない——、

(……、やめよう)

そこまで考えて紫音は自ら思考を切断。今泥沼の過去を思い出したからといって何かが変わる訳ではない。

どことなく重たいため息をついて、紫音は再び前に向き直った。そろそろ紫音が一人暮らししている、家賃が激安のボロアパートが見えてくる頃だ。

最低限の物だけを詰めている軽い学生鞆を適当にぶらつかせながら、コンクリートとマンホールを踏みしめ丁路地を曲がる。あとは

ここを真っ直ぐ進めば、2日ぶりの愛しい自宅が右手に見えてくるだろう。

(……ん?)

と、そこまで来て思わず紫音はその歩みを止めていた。

早く帰りたいのは山々なんだが、それよりも気が向いてしまう、奇妙なものを見つけてしまったからだ。

それは紫音から約3メートル前方の地面。

(な、なんだあれ……)

率直に言ってしまうば、穴、だろうか。

いや、本当にただの穴なのかも怪しい。

ひたすら黒く、ただ黒く、どこまでも深く続いているような真っ黒な『穴』が、そこに鎮座しているのだ。

少し近寄って観察してみる限り、半径1メートルほどの、人一人は通れそう……もとい、落とせそうな大きさの穴。不思議な事にドリルかなんかで掘りまくったような形跡は辺りに見当たらず、すっぽりと、まるで別次元のモノかのように紫音の目の前に君臨している。

(い、いくらなんでも怪しすぎる。というかこれ、どこまで続いているんだ)

試しにちよつとだけ顔を覗かせてみるが、覗いた先は本当に真っ暗闇で、何があるのかさえ分からない。正直気味が悪い。

美弦紀紫音はこれでも非現実やオカルトチックな事に関しては、詳しい訳ではないが心の中では認めている。なんたつて『美弦紀流』の修行により得られたこの体こそ、すでに非現実に踏み込んでいるようなものだから。

しかし、目の前の穴はいくらなんでもあからさますぎると思う。体の次に頭までおかしくなったか、と自分の肉体を氣遣ってしまうほどだ。

どうしよう。

この穴は紫音にどうしろと言うのだろうか。

ゴクリと唾を飲み込んで、紫音は辺りに視線を巡らせる。握りこぶしサイズの手ごろな石を見つけると、試しに穴の中へと放り投げてみた。

……、
(き、聞こえない……)

何が聞こえないかって、着地音だ。

さっき投げた石は、小石ながらもそれなりのサイズではあったし、紫音も結構力を入れてぶん投げたはずだ。

しかしどういふ事だろう。それでもまったく音が聞こえてこないという事は、それだけとんでもない深さという事が、はたまた、まだ暗闇の中を落ち続けているという事が……

なんだか怖い、とても怖い。

全身を突きぬけるような寒気に襲われて、紫音は即急にこの場から立ち去ろうと立ち上がった。ああいうのには関わらないのが一番である。日ごろから色んな問題に巻き込まれているというのに、これ以上面倒事は増やしたくない。触らぬ穴に祟りなし。

何か別の事を考えようと頭を回転させ、スルースキル全開で歩き出そうと一歩を踏み出す。

——その瞬間だった。

ガシッ、と右足に違和感。

何かに掴まれている、そう感じて足元に視線を巡らせて……
…絶句した。

黒い霧……だろうか。先程の極まりなく怪しく穴から、触手のように黒いもやもやが伸び進み、紫音の右足を包み込んでいるのである。

(な、なにこれ……、のわっ!?)

ガクン！ と。

紫音の体重が一気に後ろへと傾く。
いや。

正確には、黒い霧が紫音の脚を引っ張って……、

（つて、呑気に考えてる暇じゃ……ッ！？）

鍛え上げられた反射神経ですぐさま前掲視線を保ち、体重をなんとか前方へと掛ける。さらに捕まっていない左足に限界までの力を注いで地面と固定。拮抗状態を作りあげる。

が、

（こ、こいつ、重い……！）

右足を引っ張ってくる黒い霧の力は想像をはるかに上回っていた。美弦紀の修行でとんでもない力を有してる紫音でさえ、その体が地道に後ろへと引きずられていくほど。

これはまずい。

かなりまずい。

大事なことなので2回言いました！

（ぬ、ううう！？ こ、このままじゃ、あの中に引きずり込まれる……！）

右足に纏わりつく霧の原点は明らかにあの黒い穴だ。

もしこのまま続けて穴の中へと引きずり込まれると……、その先は想像もしたくない。

正直非現実やオカルトがどうか、穴の正体は何なのかとか、そんな事どうでもいい。今優先すべきは安全の確保である。

（ぐっ、この……！ こ、こうなったら、『釘』を抜いて全力出しか……！）

『アレ』をすると正直その後がしんどいのだが、今の状況じゃ致し方あるまい。

右手に刺さる釘を抜こうと左手を伸ばし、その冷たい半球に人差し指が触れる……その刹那。

左足にも何だか覚えのある違和感。

ふと見降ろすと、そこには新たに出現した霧が左足を包み込んでいた。

「……………ッ！！？！？」

気付いた時には、すでに何もかも遅かった。

踏ん張りの軸にしていた左足も猛烈な力で引つ張られ、力の源を失った紫音は顔をコンクリートの地面に強打。「ふぎゃ！？」という間抜けな叫び声を残しながら、彼の体は一気に穴の中へと引きずり込まれていく。

が、まだ負ける訳にはいかない。美弦紀家当主として負けは許せない。

イタチの最後っ屁の如く、右手を思い切り伸ばすと、黒い穴の縁に指を掛ける。続いて左手も。体のほぼ全身がもうすでに暗闇の中だが、ようは落ちなければそれで良いのである。

しかし、そんな抗いさえもこの穴は切り伏せた。

それは目にもとまらぬ出来事。

いきなり、掴んでいた穴の縁がなくなったのである。

いや、

（穴の拡大……！？）

しかも軽く半径2メートル分は巨大化しやがった。

もちろん、今更手を伸ばしたところで届く訳もなく、

「うわあああああああああああッ！？」

あ、俺死んだ。

未来への儚い希望を失いつつ、悲しい絶叫を響かせながら、少年の体は暗闇の深く深くへと堕ちていく。

その先に何が待つのかも分からず、滑稽に。

第1話：堕ちた万屋の少年

「——あああああああああああああああああああああああああッ!？」

それは数瞬のできごとだった。

いや、実際にはもつと長い間こうしていたのかもしれないが、途中気を失って死体の如く暗闇を堕ちていた紫音には、あまり長い時間ではなかった。

しかし、目を覚ましたその時、目の前に広がっていたのは暗闇の『出口』。

ああ、出口あったんだ、と微かな安堵を覚えると同時、ぽっかり空いた穴から覗いているモノをみて思考が凍りつく。

地面。

どこかは知らないが浅黄色をした石畳の地面。

まずいと思った。なんたってこの勢いである。どれほどの長さがあったのかは不明だが、あまりの風の抵抗でまともに下を向けないほどである。耳なんかにはブボボボボッ!! という断続的な音が響き己の体がとんでもないスピードで降下している事は何となくわかった。

もしこんなスピードで地面に叩きつけられたら。

骨折どころの話ではない。全身の肉が破裂して骨が粉碎、赤い血液が大量にぶちまけられ、体中の臓器がピンク色の糸を引きながら辺りに撒き散らされる事は間違いない。もしそんな光景を誰かに見られたら、そいつはおそらく一生の人間恐怖症になってしまうだろう。

（し、死ぬ……ッ!?）

脳内の危険信号が爆発せんばかりに点灯する。

一瞬にして穴の外へと放り出された紫音は、とっさの判断、とある受け身技を思い出した。

美弦紀流七点重法受け身。

……という名のよく分からない受け身技で、着地の瞬間アクロバティックな回転をしながら、両手、両足、両わき腹、背中 of 全部で七点に、伝わってくる衝撃を分割、緩和するという、美弦紀流の修行でもっとも最初に覚えなければならない技術だ。昔家の屋根から何度も叩き落とされた記憶がある。

あれしかない。

そう思った紫音は、一瞬の状況判断により七点重法受け身を決行。頭が地面に着弾するよりも早く両手を地面に付き、前周りの応用で体を前方に回転、と同時に、背中が地面に触れた瞬間側転の要領で真横に転がりつつ両わき腹で衝撃を緩和、そのまま流れるような動きで両足着地。

……するはずだった。

両手から先に地面に付き、前周りをしたのは良かったがそのまま背中を地面に強打。頭のからの着地は免れたが、

「げファッ!？」

あまりの勢いにその場で体がバウンドし、ゴロゴロと3メートルほど転がってようやく停止。一瞬の空白の後、続いて襲ってくる激しい眩暈とおぞましいほどの吐き気。手足は痙攣を起こしてまったく動こうとせず、視界には断続的なノイズが走り抜け、紫音の意識を奪おうとする。

確実に死んでた。

もし美弦紀家で鍛えていなかったら確実に死んでいたに違いない。その分まだ幸運か、と思いつつ、感覚の自由が戻ってきたと同時に視界に広がる青空を見て、ようやく自分が生きている事を実感する。全身の激痛はなかなか引いてくれないが、それだけでも紫音自身を

安心させることができた。

（何とか、生き、てる……？）

何度も言うが、本当に死ぬかと思った。

あの黒い穴に落ちた時点で思わず失神してしまっただぐらいなのに、目を覚ましたらこの仕打ち。つい想像してしまっただ人肉シイク状態にはならなくて済んだが、それでも未だ体を自由に動かすことさえままならない激痛と感覚麻痺。

生きているのが奇跡に等しかった。

だが、どうしても体の痛みは引いてくれず、なかなか自由に動かせない。唯一動くと言えば指先と首くらい。七点重法受け身（失敗作）で何とか死守した頭周辺はどうやら無事っぽかった。

（い、ててて……、ここ、どこだ……？）

とりあえず状況を把握するために首を動かして視線を移す。いつまでも青空ばかり見てたところで何も始まらない。

が、見て後悔する。

そこに広がっていたのは明らかに切羽詰まる状況だった。

目の前に佇むは何十人もものむさい男達。そして紫音の丁度背後辺りに立っている同い年ぐらいの女の子。

誰もが目を見開き、ボー然とした様子でこちらを見ている。

いや、それだけならばまだ良いのだ。突然ただの男子高校生が上から降ってきたのである、驚くのも当たり前前だ。

しかし問題はそこではない。男達の格好である。

どういつもこいつも、鎧……だろうか。光が反射して銀光りするこついで西洋風の鎧を身につけ、騎士という印象に物凄く合っている直径1.5メートルほどの片手剣を携えている。目を凝らしてよく見ているが、たぶん、ほん、も、の……、

（って、んな訳あるか！ お、俺は認めないぞ。よく状況が把握できないけど、これはたぶんドッキリだ。どこかのかくどい奴が仕掛

けたドツキりに決まってる！)

必死に思考回路を巡らせて自分なりの結論に至ってみる。絶対に違うような気もするがそこは気にしないのが男というモノだ。

冷や汗がダラダラ流れる紫音を余所に、ようやく正気に戻ったのか。むさい男達のリーダー格っぽい、赤いトサカのついている兜をかぶった中年のおっさんが唐突に口を開いた。

「貴様、何者だ。どこから湧いて出てきた？」

そう言いながら片手に持つ剣先をこちらに突き付けてくる。

怪しく光る刀身。それを見て、紫音の体からさらに大量の冷や汗が流れ始めた。

(お、おおおそろしい、今時のドツキりってこんなにヤバイものなんだろうか……姉ちゃん、助けてください……)

大好きな姉がこの場に登場して蹴散らしてくれる事をなんとなく想像しつつ、もちろんそんな事起きる訳がなくて。今の腰ぬけ紫音にはガタガタ震える事しかできない。

それが気に食わなかったのか、中年のおっさんはさらに眉を吊り上げ、怒気の掛った声で、

「おい、どうした。何とか言わんか！ それとも貴様、その女の護衛か何かか？」

ひい！？ と思わず紫音は後ずさり。そういやいつの間にか体の自由が戻っていたが、今はそれどころではない。何とかこの状況を打破しなければ。

「え、ええと！ ボクの名前はみちゆる、ゲフンゲフン、美弦紀紫音！ 16歳の男子高校生！ 好きなものはアサリ入りのお味噌汁とお姉ちゃん、嫌いなものは親父の靴下ですハイ！」

あまりのテンパリ加減になぜか自己紹介を始めるおバカな少年だった。

紫音の意味不明発言に怪訝な表情を見せる男だったが、すぐに気を引き締めると後ろに控える男達に指示を飛ばす。

「……まあいい、邪魔者は邪魔者だ。女ごとひっ捕らえておけ」

男達の動きは迅速だった。

命令と同時に、まるでそう言われるのが分かっていたかのような滑らかさでこちらに近づき、紫音を捕らえようと腕を伸ばしてくる。どうやら紫音を捕らえようとの事らしいが、初見の人にまったく事情を聞かずそれは無いと思う。何なの？ アホなの？ 死ぬの？（こ、このコスプレ変態男が！）

おそらく逃げた方が良いのだろう。

未だこの場所がどこなのか把握できないが、見知らぬ土地でいきなり変なカルト集団に捕まってはどのような事もない。

そう思い、身を翻して逃げようとしたその時だった。

ダッ、と紫音の真横に躍り出てくる一つの影。

それは右手を一気に振りかざすと、突き出す。と同時に、そこから現れた『何か』が男達の集団に直撃。

瞬間。

ボウ！！ と、爆裂な炎とともに男達が炎上する。「うわあああ！？」とか変な叫び声が聞こえてくるが、そんな事どうでもよかった。

（て、手から炎出した！？）

慌てて真横に出てきた影に視線を向けると、そこには先程まで紫音の背後にいた女の子が佇んでいた。

腰下まで伸びる綺麗な茶髪のロングヘアに大きく開いたライトブルーの瞳。白とオレンジを基調としたミニスカートとノースリーブの服がとても似合っている、紫音と同じ年ぐらいの女の子。

彼女は訳が分からず目を回している紫音を一瞥すると、手ごろな場所にあった小道を見つけるとそこへと走り出す。その際肩越しにこちらに視線を飛ばすと叫んできた。

「君！ こっち！」

どうやら神様は、まだ紫音を見捨ててはいないらしい。

目の前の男達と言い、あの女の子と言い、手から出した炎と言い、今いるこの場所と言い、未だ意味不明な点が多いが、どれも整理す

るのは後だ。

すぐるような思いで、とりあえず紫音は女の子の背を追って走り出した。

それから軽く、800メートルは走り続けただろうか。

茶髪の女の子の背を追って道行く道を走りまくった紫音は、女の子がようやく足を止めたのを見て自分自身も足の回転を中止した。

何となく辺りを見渡すと、そこは建物と建物の隙間にできた小さな空間であった。万屋として様々な経験を積んできた紫音なら何となく分かるが、こういう場所は身を隠すのには最適である。その反面、待ち伏せなどをされていた場合逃げ道がなくなってしまうデメリットもあるが。

それにしても奇妙なものだ。

走っている最中もこうやって何度か辺りを見渡しはしたが、どこをどう観察しても辺り全体違和感だらけなのである。

例えば視界に嫌でも映る大量の建物。

家なのか、それとも何らかのお店なのかは知らないが、こんなレングカ木かも分からないような材質で出来た建物は今まで一度も見事がない。

何度も言うが美弦紀紫音は万屋である。仕事によっては海外へ赴くことだって何度もあった。全世界を廻りに廻ったと言っても過言ではない。そんな紫音ですら、こんな建物の作りは見た事も聞いた事もないのである。違和感を感じずにはいらなかった。

ほんと何だと言うのだ、この状況は。

ここに立ち息をしているだけで、不気味な気持ちに心が押しつぶされそうになってしまう。

はああ、と思わず今日何度目かも分からない溜息を零す紫音。こちら丸二日徹夜で働いていた身だと言うのに、こんな仕打ち正直勘弁してほしかった。

もうやだ、早く帰りたいよお姉ちゃん。

「ねえ君」

……と、内心全力で涙ぐんでいた紫音の耳にそんな声が届く。

振り向くと、ついさっきまで紫音の前を先導していた茶髪の女の子がこちらに向き直っているとこだった。

その可愛いライトブルーの瞳がじつとこちらを見つめてくる。一瞬ときめいた自分が悔しい。

「さっきはありがとう。君が割って入ってくれなかったらあのまま捕まっちゃうところだったよ」

とか言いながら軽く微笑み掛けてくる女の子。脳殺を誘っているかのようなそれは明らかに紫音のヲトコ心を買いてくる一撃だ。

が、一つ分かる事。

（何か勘違いしてない……？）

そんな彼の思考に気付かず、少女は続ける。

「まあ、登場の仕方は少し間抜けではあったけど……何とかなったし、それは気にしないって事で。それに君、結構良い体してるんじゃないの？ あれだけ走って息切れ一つしないなんて凄いいじゃない」
（やっぱ勘違いしてるよね！？　なんか物凄く勘違いされてるって絶対！）

よくは分からないが、なんかこの女の子は自分が紫音に助けられたと思ってるらしい。

だが実際、助けられたのは自分の方が気がしてならない。大体紫音がした行動なんて地面に落下して変な受け身を取って失敗して気が遠くなって自己紹介したぐらいである。決して、この子を助けようなんて思考は欠片も存在していなかった。

こんな誤解は早く解かなければ。

善良少年である紫音からしてみれば心苦しいこと極まりなかった。

「い、いや別に、そういう訳じゃなくて……その、偶然というか何
と言うか……」

こういう時活舌がよかつたらなあ、と心底思う。一度仕事モード
に入ってしまったらそれも解決なのだが、生憎と今はそんな気分では
ない。というかこの意味不明な現状に対しそんな気分転化は不可
能だ。

多少テンぱりぎみにアタフタと話す紫音に対し、クエッションマ
ークの疑問符が浮かんできそうな表情を浮かべる茶髪の少女。ええ
い、なぜ通じんのだこの思い。

「??? ……まあ、いいわ。それより君、よくあの間に割って入
れたわね。そんな目立つ格好しながら根性あるじゃない」

「? ……なんか問題でもあんの?」

つい自分が聞きたい事も忘れてまともに会話してしまった。

が、それを聞いた目の前の少女は、「はあ?」と信じ難いものを
見るような目でこつちを睨んでくる。何なんだ一体。

「あー……もしかして君、どっか田舎の出身? それなら仕方ない
とは思うけど」

「日本」

「にほん? 聞いた事ないわね……」

日本を聞いた事がないだと? ジャパニーズだよジャパニーズ。
何ですかあなたは、馬鹿ですか。

……と内心愚痴りまくるが、もちろん口には出せない訳で。少女
は「ま、田舎者なら仕方ないか」とか何とか呟いている。他人に田
舎者と呼ばれるのがここまでイラッとするものだとはい、お姉ちゃん、
紫音新しい発見です。

「あのね? 私はまあ、色々あつて今お尋ね者なんだけど……私を
追っていたあいつらは『王国騎士』って言って、国の保有する軍み
たいなものなの。そこまで分かる?」

実際いきなり謎名詞が出てきて分からないのだが、とりあえず黙
って頷くと、少女は人差し指を立てて続ける。

「王国騎士は国の保有する軍、つまり国王の手駒。……君は今、そんな国に追われてる私をあの騎士どもから助けたけど、それがどういう事に繋がるかちゃんと理解してる？」

いや、全然。

「向こうからしてみれば自分達が正義で私が悪党。そんな悪党の味方をした君は一体彼らからしてどういう風に映るのか……」

……………、おい。

何となくその先が予想できてしまい、紫音の脳内がフリーズした。色々、よく分からないことは多いが、とりあえずあのむさいオッサン達が凄い地位の人間だという事は分かる。

そして場の成り行きで紫音が彼らに敵対してしまった（ように見えてしまった）という事は、

「ま、君も今から立派なお尋ね者ってわけね」

「おいしいいいい！　なんでだよ、なんでそうなっちゃうの！　俺ここに来てからまだ30分も経ってないのに！　なんでいきなり察に追われなきゃならないの！」

必死の形相で少女の肩に掴みかかる紫音。

目の前の少女が何だか困った顔でいるが、そんな事どうでもいい。今の紫音にはホントにどうでもいい事だ。とりあえず自分の身が危険だという事のみが、彼の脳内80%を占めている。

「あ、安心して。別にまだ確定した訳じゃないから。王国騎士のやつらに本気で追われるようになるには、もっと刺激のあることしないと駄目だし」

「……………そ、そうなの？」

「そうそう。手段は問わず、とにかく攻撃するとかね。だから君はまだ安全だと思うよ」

つまり、職務執行妨害を極度に行わない限りは大丈夫という事なのだろうか。

（それならまあ、まだよかったんだ……………）

ほっ、と安堵の息を吐きつつ胸を撫で下ろす。

見知らぬ土地に投げ飛ばされた挙句、開始10分ほどいきなり犯罪者に成り下がるとか冗談では済まないレベルだ。どこの犯罪者予備軍だよと突っ込みたくなる現状にならなくて本当に良かった。うん。一瞬本気で焦ったからね、うん。

(つて、当面の問題を忘れるところだった)

一度首を横に振って頭の思考をリセットすると、とりあえず今ある情報を整理し始める。

まず現在地について。これは確実だろうが、まず日本ではないだろう。少女の服装や周辺の建物を見ても何となく分かる。紫音のよく知るあの日本ではない事は確かだ。

そしてさっきのむさい男達。この少女は『王国騎士』だとか言っていたが、はて、今の時代そんな名前の軍あっただろうか。というか銃火器がマイナーとなるこのご時世、未だ鎧と剣の組み合わせで街の警邏に出る軍なんて聞いた事も見た事もない。

結論、謎だらけだ。

だが諦めてはならない。情報収集は自分で言うのもなんだが得意な方だ。今あるこの一片だけで、何とか情報をかき集めなければ。

もちろん聞きだすべきは目の前の茶髪少女。だって知り合いの子だけでもん。

「あ、ねえ。ちょっと変な事聞いて良いかな？」

「？」

口を開こうとして、言い留まる。開口一番「ここ、どこ？」はさすがに違和感あり過ぎだろう。

少しだけ考えた挙句、再び少女に向き直ると、

「さっき言ってた王国騎士……だっけ？ あいつらつて、どこの国の軍なの？ あっ、ほら、俺田舎者だからその辺分からなくて」

少女からして紫音は田舎者に映っているようなので、その考えを逆手に取った遠回しな聞き方である。

多少ばかり怪訝な表情を浮かべる女の子だが、案外あっさりと答えてくれた。

「どこって……この王都『アルスウェル』の騎士団よ。小さい街とかが持つ騎士団と違って、王都の騎士団はデカイから結構有名なんだけど……でもどうして？」

さも当然のように言ってくるので返答に困ってしまうが、「いや別に」とか言いながら適当に受け流しておく。

（『アルスウェル』ね……）

少しだけ脳内の検索に掛けてみるが、残念ながら思い当たる節はまったく見つからない。大体、そんな特徴的な名前を持つ国を聞いたら記憶の片隅にでも残っているはずなのだが、それでも分からないのだからたぶん初見なのだろう。

（というか、王都、なんて言う国なんだから相当デカイ国なんだろうけど……、おかしいな、そういう国は仕事でほとんど言った事があるのに）

と、そこまで考えて紫音の頭に引つ掛かるモノがあった。

（……って、おいおい、待てよ。まず根本的なところから考えろ。そもそも騎士つてのは中世の時代にはほとんどいなくなったようなもんだろ？ 今の時代もその精神を受け継いでる人はいるっちゃいるけど、その多くが食文化的な意味で受け継いでる。有名なマルタ騎士団でさえ、独立国家で国際医療に貢献してるだけだ）

今の時代、中世からの伝統を受け継いでいる国は確かにある。が、しかし、そのほぼ全てが食文化的な意味合いでの受け継ぎだ。例えばフランスのボルタン騎士団なんかは、ボルドーワインという有名なワインの伝統を守り続けている。

（なのに、なんで今の時代になって、『未だ鎧と剣を掲げた王につかえる騎士』として国に貢献している？ なんて、警察じゃないんだ？）

傍らの少女は黙りこくってる紫音を不思議そうに見つめてくるが、それに構ってる暇などない。

たった一つの疑問が少しずつ、その正体を現していく。

（そもそもなんで『王』なんだよ？ どうして総理大臣じゃないん

だ？ 普通に考えて今の時代あり得ないだろ、そんなの)

もう少しだ、もう少しで答えが見えてくる。

紫音は再び少女に向き直る。

「もう一つ質問いいかな？」

「？ 別にいいけど……？」

「……警察とか、ポリスって、聞いたことある？」

少女の表情に怪訝な様子が刺した。はて、その怪訝は一体どこから来ている怪訝なのか。

少しだけ考えるそぶりを見せた少女は、

「ない……と思う。そのケーサツって、なに、食べ物か何か？」

決定打が打たれた。

生憎、少女が嘘を吐いている様子もない。嘘を吐いている人間は顔を見れば判断できる。この子はただ、自分にとつての常識を喋っているのみにすぎない。

そして導き出されるたった一つの答え。

(あー……くそ、もうこれしか考えられない。常識外れにも程があるけど、ここまで来るとそういう展開を信じるしか道がないじゃないか)

警察が騎士。総理大臣が国王。拳銃が剣と盾。謎の国名。

それら全てが合致する答え……いやむしろ、そんな情報が嫌でも全て当てはまってしまう、一種の甦生術とも言えるアホらしい答え。(こういうのって、実際に目で見て確認が取れない限り信じないたちなんだけど……実際に目で見て確認が取れちゃってるからなあ) 何となく、空を見上げる。

真っ白な雲がもんもんと浮かんているその青空は、見た目は同じながらも、やはり『違う』のかもしれない。

(異世界、またはパラレルワールドの類なのかな、これ)

第1話：堕ちた万屋の少年（後書き）

とりあえず紫音は極度のシスコンって事で

第2話：逃走

ガシャガシャ、という音が耳に届いてきたのは、それからすぐのことだった。

（なんだ……？）

辿り着いた自分なりの答えにうんざりしながら黙り込んでいた紫音は、その規則的な音に思わず顔を上げる。

何か重たい荷物でも運ぶ荷車でも近くを通っているのだろうか。

と思ったが、そんな考えはすぐに打ち消される。手前にいた茶髪の少女が、チツ、と忌々しそくに舌打ちをしたからだ。

「あいつら、よほど私に執着があるようね。もう近くまでにじり寄せられてたか……」

「あ、あいつら……？」

訳が分からず聞き返すと、少女は小道の奥に視線を置いたまま答えてくる。

「王国騎士の奴らよ」彼女は面倒くさそうに、「たぶんさっきの奴らと同じ団体ね。この短時間で増援なんか呼べるわけないし、何が何でも私を捕まえたいらしいわ」

元の世界の警察と同じで、騎士団の方々たちはかなり執着深いのだろう。捕まえるか、それこそまったく分からないぐらい姿をくませない限りはいつまで経っても追ってくるに違いない。

……と、そこで一つ疑問に思う事が浮かんでしまった。

「そっぴや、なんで君追われてんの？ さっきの話聞く限り、騎士の奴らに攻撃するとか、よほどひどい事しないとマークはされない

らしいし。なんかやばい事でもやつちゃった？」

これはおそらく当然ながら出てくる疑問だ。自分がどうのこうのの前に、目の前の女の子がなぜ国王の手先である騎士団に追われているのか、それが不思議でならなかった。

対し、少女は意表を突かれたように「うっ」を顔をゆがませる。

あれは明らかにやましい事がある顔だ。万引きをしようと思論んだが、店の人に捕まって親御さんと呼ばれた時の悪ガキみたいな顔である。

「ま、まあ私にも色々あるのよ。あ、あはは、色々とね、あははははー」

「……、」

「ちょ、何よその本物の犯罪者を見たときみたいな目は！　べ、別に私悪い事なんてしてないから。ちょっと他の要件で追われてるだけなのよ！」

うがーっ！　と叫びながら詰め寄ってくる少女。

詮索の得意な紫音からしてみれば怪しんでくださいと言っているようなものだが、

（……まあ、聞かれたくないなら詮索はなしにしよう）

未だ半信半疑ではあるがこの異世界らしきところに落とされて数十分、不幸中の幸いながらもこうやって知り合いができたのだ。そんな貴重すぎる人脈をなくすわけにはいけないので、無駄な言い争いは避けたいところである。

紫音の関心のなさそうな態度に安心したのか、ゴホンと少女は一度咳払いをすると、

「と、とにかく、ここに長居するのは危険よ。君はすぐ大通りに出て人の波の中に紛れるのよ」

「え、じゃあ君は……」

聞き返す紫音に、少女はつまらなそうに手をひらひらさせると、少し呆れた風に小道の方を指差した。

「私はこっちの道でくねくね逃げるから。一応君には助けられてる

しね、あなたが安全な道を使って逃げるの」

わかった？ という風に促してくる少女に対し、それを聞いた紫音はどうも複雑な心境でならなかった。

そもそも、何らかの形で追っかけっこをする場合、人気の少ない小さな裏道を使って逃げるのと、人が多い広々とした道を逃げるのでは、後者の方が断然逃げ切れる確率は高いのだ。裏道は確かに細い道が多く見つかりにくい、一度見つかったしまえば袋のねずみ行き止まりに追い詰められたり、挟み撃ちを食らったりで結局逆効果なのである。しかし、その分大通りだと、挟み撃ちなど典型的な罠を回避しやすく、何より人の波がある。そこに隠れてしまえばそう易々と見つかる事はない。

少女はそれを分かっている、紫音に安全な道を行かせようとしているのだろう。敵の追っては全てこちらで引き寄せ、自分を助けてくれた（と思っている）紫音を逃がすために。

それは考えれば考えるほど危険な策だった。確かに紫音は物凄く安全な道を通る事になるが、その分この少女は危険極まりない道を通る事になってしまう。

そんな事は美弦紀家の者として断じて許せない。

この子とはまだ出会って一時間もない仲だが、貴重な情報をくれた善良な一般市民であり、なにより奇跡ながらも構築することができた人脈がある。そう易々と離れる訳にはいかない。

「それは……駄目だ」必死に言い訳を考えつつ、「そもそも、俺と君じゃあいつらにマークされてるレベルが違う。俺はまだ見逃してくれるレベルだけど、君はそうじゃないんだろう？ それなら、どう考えても危険な君こそ安全な道を通って逃げるべきだよ」

紫音の言葉が予想外すぎたのか、少女は僅かに両目を見開いてこっちを見てくる。

それを無視しつつ、紫音は続ける。

「そ、それに、元々俺は君を助けるためにあそこに飛び込んだんじゃないんだ。ただちよつと屋根から足を踏み外して、それで……」

と、とにかく、君が危険な橋を渡る必要なんてない。むしろ君こそ安全に逃げるべきだよ」

我ながらナイスな口周り。それになかなかカッコイイ事言ったと思う。フツ、決まった……、と心の中で調子に乗ってみる。

だがしかし、

「君……相当馬鹿だね」

返ってきたのは鋭い一撃。

ぐふつ、と内心よろける紫音に対し、少女は呆れたように言葉を突き付ける。

「君自分で言ってたけど、確かに私と君じゃ危険度のレベルが違う。つまりあいつらは、私がどこへ逃げたってこの『私』を優先して追ってくる訳でしょ？ 仮に君が裏道の方へ逃げたって」

「な、なら二人で表の方に逃げれば良いんじゃない……」

「それじゃ駄目なの」返ってくる即答。「ううん、正確には私が『そっち』へ逃げる事が駄目なの。……前に一度あつただけだね、私があのもさい騎士団の奴らをくつつけて表の方逃げると、ほんとあいつら酷いのよ。一般市民の事なんかまったく考えず、ただ私を捕まえるために武器を振り回して……」

何となく、想像できた。できてしまった。

民衆に紛れて逃げる少女を追い、邪魔になる一般市民をその剣を振り回してなぎ払っていく、騎士道精神なんてくそくらえな王国騎士団の姿が。

彼女はおそらく、それを一度体験してしまってるのだ。だから怖いのだろう。安全なところへ逃げるという行為そのものが、彼女にしてみれば『危険』だという事を。

「だから……駄目。あなたの気持は嬉しいけど、その通りに行ったら私じゃなくて『周りに』大きな被害が出ちゃう。私個人の問題に、他の誰かを巻き込むのはできるだけ避けたいから」

「で、でも……」

紫音は何か言おうと口を開くが、それを遮るように少女は身を翻

し小道の方へと歩き出してしまふ。

その肩越しに言葉が届く。

「ほら、ボウツとしてないで君も早く逃げる。敵は近いんだから、捕まったらアウトよ」

そして少女は、一度だけこちらに振り向き、軽く微笑みかけてきた。一体どこから来ているのかも分からない、小さな小さな笑み。彼女は「じゃっ」とか言いながら片手をあげると、

「さよなら」

その一言を背に、紫音が止める間もなく一気に駆け出していった。道を折れ曲がったのか、すぐにその背中は見えなくなる。

「……、」

思わず呆然と立ち続ける紫音。

それから片手で頭を掻くと、盛大に溜息をぶちまけてやった。

（なんてゆーか、こう、何なんだろうなあ……）

少女の言葉を思い出す。

明らかに自分は、表通りへ逃げて姿を眩ませた方が良いのは明白だった。今選べる選択肢の中でそれおそらくもっとも最良の選択に間違いない。

だが、

（つたく、さよなら言う前に名前くらい教えてほしいもんだよ……こちとら、知り合い居ないからあんたに助け求めようと模索してたつてのに……）

不意に、少女が最後に見せた小さな微笑みが脳裏に浮かんだ。その瞬間。

美弦紀紫音の中で、一つのスイッチが切り替わる。

（そんな顔見せられたら、万屋としてほっとけないんだよ。アホ）
ダッ、と。

紫音は駆け出す。もちろん、少女が向かったのと同じ方向へ。

「大体こちら、表通りがどの道と繋がってるかも分かってないんだっつー！」

悲しすぎる愚痴を零しつつ、紫音は少女を追って小道の中へと突入する。

だがお生憎様、道どころか方角すらも分かっていないのが現状である。ただ本能と勘のみで、無茶苦茶に突き進む。

曲がっては突き進み、曲がっては突き進み……。

ただそれを繰り返している内に、目に映る風景に変化が現れた。

王国騎士団。

その兵2人ほどが、何かを追いかけるように紫音の前方を走っている。ありがたい事に紫音の存在には気付いていない。

(……、)

しばし考えた据え、

「大の大人が群がって女の子を追いかけるのは感心しないんだよ！」
叫びながら、一気に走るスピードを加速させると、膝を折り曲げ軽く飛び上がる。

どこぞのライダーキックを思わせる格好で一人の背中に強烈なドロップキックをお見舞いすると、それと同時に、横に突き出していた左腕でもう一人の男の後ろ首に勢いを乗算してエルボーをかましてやった。

ドゴッ！ という強烈な打撃音が辺りに響く。

予想外の不意打ちに得体のしれない方向へ吹っ飛んだ騎士団の男達は、ガラガラ鎧を鳴らしながら転がり続け、止まった頃には完全に気絶していた。

走る足の回転を止めず男達が動かないのを目視で確認すると、そのまま前方を見据える。

そして見つけた。

挟み込むように両脇の道からから迫ってくる騎士団の奴らから、どっちへ逃げようか戸惑いつつある茶髪少女の姿を。

鎧をつけている男達より断然走るのが早い紫音は一気に少女へと

近づくと、素早くその細い右腕を握る。

「こつちだ！」

叫びつつ、少女がまだ確認していなかったもう一つの小道へと一気に走り出した。

もちろんながら腕を掴む少女からの叫び声も届いてくる訳で、

「ちょ、君なんでこつち来たの！？ 表通りの方逃げろって言ったじゃない！」

「生憎方向音痴でね！ 気がついたらこつち来てたの！」

「君ごんだけ頭悪い田舎者なのよ！」

「悪かったね！」

軽く罵声の応酬をしつつ、二人は小道を走り抜ける。

それにしても複雑な道だ。行く道行く道Ｔ字路や十字路ばかりで、変なりアル迷路かと勘違いしてしまうほどである。少女の方まで道が分からなくなり迷子になってしまわないか心配だ。

だがまあ、今更そんな事考えてる暇もない。とりあえず今は騎士団の連中から逃げるのが先である。

「ッ、前！」

背後の少女が叫ぶ。

それとほぼ同時のタイミングで、前方の曲がり道から数人の兵士たちが駆け込んできた。後ろへ戻る訳にはいかない。別の追手が来ている。

運良くも今いる場所が十字路だったので、すぐさま右へと進行を折る。何だこのリアル鬼ごっこ、と思いつつも余計な考えを振り払うように二人して小さな小道を突っ走る。

が、

「ええい、またか！」

再び前方から敵兵。

すぐさま手ごころな場所にあつた道へと折り曲がるが、そこまで来てようやく紫音の脳内に違和感が感じられた。

（……おかしい、本気で追ってきているにしては少し勢いが足りない

い)

人間こんな全力全開の鬼ごっこをしていれば、普通もつと勢いが出てくるものである。

例えばあの手に持っている剣。物騒な話だが、あれをぶん投げてきたっておかしくはないのだ。

しかし、それにしても男達はやたら冷静ではないだろうか。まるでそう――、

(どこかに誘い込まれてるような……)

そこまで考えた時には、すでに遅かった。

気付いた時、紫音と少女は建物の隙間にできた小さな空間に出ていた。同じ場所ではないが、形的にさっき休みを入れていたあの場所と少し似ている。

だが、そんな事どうでもいい。

「はめられた……」

傍らの少女が忌々しげにつぶやく。

そう、はめられた。

正確には行き止まりへと追い詰められたのだ。

事前に作戦でも立てていたのか、迷路のような小道をゴキブリのように逃げ回る二人を、騎士団の男達は一個ずつ別れ道を潰していき、最終的にここへと誘い出すよう算段していたのだろう。

(ああ、くそ。なんかもう色々面倒だぞ)

戻る事も出来ず別の道へ逃げる事が出来ず、思わず立ち止まってしまふ二人を余所にガシャガシャガシャ！！と音を立てて小さな空間に一気に流れ込んでくる大量の男達。ざっと見た感じ軽く20人ちよっとはいるだろう。太陽の光でキラキラ輝く大量の剣が実に怪しく、あれ一本で肉切り包丁以上の切れ味を持っていると考えると冷や汗まで流れてきた。

何となく傍らの少女に呟く。

「(ご、ごめん……)」

「(別に君のせいじゃないよ)」

そうは言う少女だが、彼女の顔を見れば分かる。軽い微笑みの裏には、明らかに『不安』の表情が浮かび上がっていた。彼女もどう今の状況を打破するべきか必死に頭を回転させているのだろう。

ああ、どうしようお姉ちゃん。紫音とっても命の危険に晒されている気がします。

「（？　なんか言っただ？）」

「（いや何も）」

いかんいかん、心の声が漏れてしまった。これからは自重せねば。しばらく男達と拮抗状態にあったが、やがて変化が現れる。20人ちよつとの騎士たちを掻きわけて、一人の男が前に出てきたのだ。リーダー格のアイツである。赤いトサカの付いた兜が印象的な、今ある小隊の隊長なのだろう。

彼は実に偉そうに腕組みをすると、フン、と軽く鼻で笑った。

「手こずらせおって、このハエ共が。ようやく追い詰めたぞ」

その細い眼光が隣の少女をマジマジと睨み付ける。そんな少女も少女で男を睨み返しているが、どうも気押されがち。それもそうだ。子供と大人では、その眼光が放つ鋭さが手に取るように分かってしまう。人生の経験の差がどうしても出てきてしまうのだ。

「女、大人しく捕まれば無用な手出しはせん。こちらとて騎士の身分、己の剣をそう易々と血に染めたくはない」

そんな彼女を捕まえるために一般市民を傷つけたお前が何を言う。少女も同じ事を思ったのだろう、隊長の男を睨む瞳がより鋭くなっていた。

「――嫌だ、と言っただら？」

挑発的な少女の言葉に、男はフツと笑い、
「体裁で捕縛するのみだ」

より一層その剣幕が強まり、腰に下げる鞘から一振りの剣を引き抜いた。怪しく光る銀光。すぐにでも切り裂いたものの血を吸わんとする不気味な刀身。

それに対し、少女はその右手を少し上に持ち上げるだけだった。

明らかに丸腰で危険な体勢だと紫音は思う。

だが、

ゴウ！ と、次の瞬間その右手が燃え上がった。比喻でも何でもなく、ただ単に燃え上がった。

手首から先の右手を包み込むように燃え上がる紅蓮の炎。その異様な光景を前に目を見張る紫音だが、

（そついやこれ、逃げる前も……）

紫音自身が黒い穴から落下し、自己紹介した直後、真横に飛び出して彼女が右腕を突きだした途端男達が炎上した光景を思い出す。

手品か、マジックか、それとも非現実的な常識外れの違う『何か』なのか。

いずれにせよただの万屋でしかない紫音からしてみれば恐ろしい光景極まりなかった。

「フン、威勢だけは良いハエが」

右手に紅蓮の炎を繰り出す少女をさも当然のように眺める隊長の男は、剣を構えることなく余裕の態度で言葉を紡ぐ。

「見た限りなかなか良質な晶術を使うようだが、所詮貴様は一人だろう？ 隣の男は逃げるしか脳のない豚のようだからな。たかが一人で、この人数相手に何ができる？」

少女の表情が苦虫でも噛殺さんばかりに歪む。おそらく、実際そうなのだろう。不思議な術を使えるとしても、たった一人でこの人数相手に何とかできるとは考えにくいのだ。

「さあ、どうするハエ？ それでも馬鹿正直に掛ってくるなら、我々王国騎士団は相手になるぞ」

明らかに人を馬鹿にするような態度と言い言動と言い。流石の温厚な紫音でさえも、少しばかり苛立ちを覚えているぐらいだ。

だが傍らの少女はもう限界だった。

軽くその右足を踏み出し、男を睨みつけると、
「やってみなきゃ……分かんないでしょうが！」

絶叫と同時に、その右腕が一気に振り下ろされ、手の動きに連動す

るようにして纏わりついていた紅蓮の炎が男の顔面目掛けて発射される。

恐ろしいほどのスピード。そして近くを飛び去っただけで伝わってくる熱気。直撃したらただでは済まない事が分かる。

が。
その炎弾が男の顔面に直撃するよりも早く、あの間に別の兵士が盾を構えて割り込んできた。

ドゴオン！ と。結果、炎弾は盾のど真ん中に着弾し半径2メートルほどの巨大な爆発を撒き散らす。が、しかし、それが隊長の男まで届く事は決してない。

そして返ってくるのは小さな掛け声。

「やれ」

動きは早かった。

その瞬間、盾で炎弾を防いだ兵の男がその体勢のまま猛烈なスピードで直進し、少女が何か反応を起こす前に強烈なタックルをお見舞いする。勢いはそれだけでは止まらず、『炎弾によって熱された』盾とすぐ背後にあった壁で少女の小さな体をプレスし始めた。

「あ……っ……！？」

彼女の表情が苦痛にゆがむ。痛々しいほどに。

しかも男達の動きはそれだけでは止まらない。

盾によって少女の動きを封じている内に他二人の兵士が両サイドから詰め寄り、片腕ずつをしっかりと抑え込む。さらに盾の男がようやく離れて解放したかと思うと、腕を固定していた二人が少女を壁から突き離し、その隙間にさらにもう一人。頭を抑え込むようにして、後頭部を片手で掴むと地面に叩きつけた。

ガン！ と衝撃音が耳に届く。女性に向かってなんという卑劣な行為か。

「うぐっ……！」

後頭部を掴む男はそのまま片足を少女の背中に乗せると、そこで完全に動きは封じられた。

右手に一人左手に一人、そして頭と胴体に一人、計3人もの男により、少女は完全に組み伏せられる格好となってしまった。

彼女はなんとか抜けだそうと身をよじるも、その度に背中の中の男が踏む力を強めて黙らせる。見てるだけで分かる。あれは個人の力だけでは確実に脱出不可能な組み伏せ方だ。

そこに隊長格の男が3歩ほど歩み寄る。動きを封じられ無様な格好となる少女を見下ろすその瞳には、明らかに人を馬鹿にするような残虐な炎が揺らめいていた。

「所詮はこの程度。いくら有能な晶術を使えど、人数という最大の壁には抗う事も出来ん」

男の紡ぐ言葉は、正論だった。

いかに強力な武装をしていても、たった一人では限界というものがあるのだ。例えばそう、RPG7などという強力なロケットランチャーを持っていたとしても、たった一人では戦争に勝つことはできない。それと同じだ。今の現状に例えるなら、彼女がいくらすごい隠し玉を持っていたとしても、それには『限界』があり、たった一人ではどうする事も出来ない。本来、その『どうする事も出来ない部分』を補うのが、『仲間』というものなのだから。

男はマジマジと少女の体を見回すと、ある一点で視線を止めた。

そこは右腕。彼女が炎を作り出していた、右腕。

「……どうだ、ハエ？ まだ大人しくなる気がないのならあ、晶術の紋が印されたその自慢の右腕、切り落としてやろうか？」

「ッ！？」

それを聞いた途端、少女の表情に初めて焦りの感情が生まれたのを、紫音は見逃していなかった。

隊長の男もそれを確認したのだろう、実に楽しそうに右手に持つその剣を頭上に振り上げると、狙いを定める。右腕を固定していた男は、隊長が少しでも狙いを定めやすくするため、手首だけを掴んで動きを封じる。

たたっ切るつもりなのだ。

少女が持つ、その綺麗な細腕を。

「こ、の……ゲスが……！」

ひれ伏す少女が痛みに耐えながらも吐露する言葉を、しかし男は無視するだけだった。

そして振り下ろされる剣戟。

狙い定かに真っ向から振り下ろされたその刃は、少女の二の腕の丁度真ん中に食い込み、切断。白い腕は路上を跳ねるように吹っ飛び、びくびく痙攣するように震えながら、その断切面から大量の鮮血を噴き出す。少女の悲鳴が、辺り一面へと響き渡る――、

——そうになると、誰もが思っていた。

たった一人を除いては。

「……貴様、どういっつもりだ？」

隊長の男が怒気を効かせて呟く。

そんな男の振り下ろされるはずだった右腕を掴み、止めている美弦紀紫音は、はああ、と面倒くさそうに溜息を零した。

「……あのさ、正直ここであんた達にこの子を連れて行かされるのは物凄く困るんだよね。いろいろ情報が不足してるから、唯一知り合いのこの子がいなくなっちゃ俺飢えて死んじゃうのよ」

なんとって丸二日徹夜してるし、という愚痴はまあ飲み込んでおく。それをこの場で吐いたところでどうにもならない。

隊長の顔面が鬼のように変貌していく。おお、こわいこわい。

「豚、お前はまだ我々王国騎士団に対しそこまでの妨害行為は行っていない。そこでじつとして、あとで身元さえ調べさせれば無理に捕まえる必要もなかった。それを分かっている貴様は、自分の首を絞めているのだろうな？」

逃げている最中2人ほど背後から気絶させたのは内緒である。

紫音はつまらなそうに息を吐くと、

「ああー……まあね、確かにここでもこういう事しちゃあ後々大変だ

ろっし、あんたの言う通り自分の首を絞めているようなもんだよ、これ。……けどさ、」

瞬間、紫音の眼光が男の顔面を貫いた。

もし鏡で自分の顔を見ていたら、紫音自身ですら凍りついていた事だろう。その獰猛な眼差しに。

「女の子の綺麗な腕をぶった切るとか、個人的にとっても許せないんだよコレが!!」

論点間違ってる？ 知らん。

意味不明な咆哮とほぼ同時、紫音は一瞬にして男の懐へと踏み込むと、腰をひねり、目視で着弾点を定め、すでに握り締めていた拳を手前に引き絞る。

刹那。

銃弾の如く繰り出されたその右拳が、男のど真ん中へと一直線に沈み込む。鎧など無意味に等しい。ガギッゴン!! というтонでもない轟音とともにその鋼鉄の装甲を押しつぶし、捻りあげ、突き抜ける。むき出しになった腹筋へと拳が突き刺さり、肋骨を粉碎。あとは勢いに任せ、男の体を全力で突き飛ばした。

ボオン、と風を突きぬけて吹っ飛び、壁に激突。力なく転がる隊長からは、悲鳴一つ聞こえなかった。白い泡をぶくぶくしてる姿が実に間抜けである。

フッ、天の裁きよ、と調子に乗り始める紫音を余所に、すぐに状況を理解した他の騎士達が「隊長!」やら「貴様なんてことを!」とか各々叫び声を発しながら全力で切りかかってくる。

しかし、

「——ッ!」

その場で一気に体を捻ると、一瞬の片足立ち。直後、コマのように回転しながら紫音の片足から強烈な回転蹴りが炸裂する。それはすぐ背後にいる女の子を抑え込んでいた男達の顔面に順番に直撃し

ていくと、まとめて真横に吹っ飛ばす。兜など関係ない。全て粉碎する。

さらに手前から近寄ってきていた男の斬撃を軽く体をよじって回避すると、そのまま流れるような動きで片足を思いつきり真上へ振り上げる。もちろん、そこには男の股間がある訳で――、

「――」
騎士悶絶。

白目をむいて額に青筋を立てまくってる男の顔面を殴って今度こそ意識を奪うと、その襟首を掴んで真横から近寄ってきた集団にぶん投げた。銀色の剣やら盾やらを撒き散らしながら数人の兵士達が派手に倒転していく。

背後の少女が驚きに目を見張っている事は、いちいち振り向かなくても何となく分かる気がした。大体そうなのである、紫音のあり得ないほどの身体能力を見た人間の反応は。まあ、美弦紀流を修行し始めて、万屋として働き始めてから何度もあることなのでもう慣れたが。

「き、君、一体……」

「そこでじつとしてて。すぐ終わらせるから」

少女の言葉を遮って会話を即中断させると、紫音は前方を見据える。まだ数人、気の飛んでいない奴らが残っていた。

最初は異世界の騎士ということで黙って事の様子を眺めていた。なんたって相手の力は未知数、敵の力量も分からずに突っ込むのはただの自殺行為ではない。

だが、一人の騎士が盾で少女にタックルをしたその時、紫音はすぐに安心だと感じた。なんたってあのタックル。あれだけ決まっているタックルなのに相手の骨を砕く事すらできないタックルだったのだ。その程度のパワーしか出せない集団という事は、やはりまだまだという事なのだ。

美弦紀流として肉体を殺すような修行をしてきた紫音だからこそ言える。

異世界の騎士といえど、所詮はこの程度。
ただ単なる一方的な戦いが幕を上げ――、

気付いた時、すでに幕は閉じていた。

第2話：逃走（後書き）

やっぱり戦闘シーンは書いてて楽しいです）。

第3話：疑問と解決

『王都・アルスウエル』。

それがこのやたらデカイ街の正式名所らしい。

らしい、というのはもちろん紫音がこの街の——いや、正確にはこの世界の住人ではなく、知りえる知識もまったく持ち合わせていないからだ。まあ、正直今いるこの世界が異世界と決まった訳ではないが、今の段階ではそう考えるしか判断材料が見つからない。仕方ない事だ。

ちなみに今現在紫音がいるのは、街の一角にある基本的な飲食店。あの後全ての王国騎士団の兵士たちを気絶させた紫音は、ああやっちゃったな、という喪失感に囚われつつも有無を言わずあの女の子に手を引つ張られて、どこへ行くのかと思いきやここまで連行された訳だ。なんか本人曰く『助けてくれたお礼』として飯を奢ってくれるらしい。徹夜続きで断食気味だった紫音からしてみればなかなかありがたい事ではあった。

しかも面白い事に、出てくる料理はすべて見た事のないものばかりである。やたら分厚い肉の欠片にどす黒いソースがかかって香ばしい匂いを漂わせる肉料理から、見た事のない野菜ばかりが使われているヘルシーなサラダまで、それは色様々。見てても、もちろん食べても、経験のない感触に舌を躍らせた。

「——ちよつと遅れたけど、私はリイナ・グレーティア・セツティ。リイナでいいよ。あなたは？」

今までの空腹に相まってひたすらナイフとフォークを振り回して

いた紫音は、リイナと名乗った少女の言葉に頭を上げる。とりあえず礼儀という事で、ナイフフォークは皿の上に置く。

「えっと、美弦紀紫音。紫音が名前ね」

「ミツルギ……シオン？ 変な名前ね」

失敬な。

「大体何よ、名前が下に来るなんて聞いたことないわ。ミドルネームもないし。普通ならシオン・ミツルギなんじゃないの？」

「俺の育った所ではこれが普通なのっ」

とは言われても納得がいかないのか、目の前の少女は困ったような表情で首を傾げている。まったく、日本人の名前を舐めないでほしい。

むしろ紫音からしてみればミドルネームなどの存在が謎だというのに、その辺の意思が食い違ってしまうのはやはり育ちの違いのせいか。

それよりも、と紫音は再びナイフとフォークを手に取りながら視線だけで少女の姿を盗み見た。

リイナ・グレーティア・セッティと名乗ったその女の子は、改めて観察してみるとなかなか美人であった。細い手足に、白い肌。そのままでもシャンプーのCMに出れそうなほどキメ細かい薄茶色をしたロングヘア。そんな前髪からのぞくライトブルーの瞳は大きく開かれ何とも可愛らしく、彼女の印象に上手いぐらい当てはまっている。彼女が全身から出す雰囲気とその着込む服装と面白いぐらいベストマッチし、胸部のふくらみは多少残念なものながらも、引き締まったその服がより一層可憐に見せていた。歳はさすがの紫音も聞けないが、たぶん紫音と同じ年の17歳。またはその一つ下ぐらいだろうか。

まさか生きている間に姉の美弦紀彼方以外でここまでの美人と出会えるとは、なんだか今まで生きていてよかったと痛感する瞬間だった。

と、そんな紫音の思考を余所に、リイナは料理が並べられたテー

ブルに肘を突きながら可愛らしく微笑んだ。

「にしても、礼を言うわ。さっきは本当にありがと。あなたがいなかったら私、今頃あの変態共に連行されていたよ」

「あ、いや。別にいいけどさ……」

苦笑いで返しつつ、しかし紫音の内心、彼女を助けた時の記憶はあまり良いものとは言えないでいた。

確かに目の前の少女を助ける事ができて多少嬉しい気持ちもあるにはあるが、問題はそこではない。何だかんだ言ってリイナは騎士団の連中に追われており、紫音のあの時の行動はその騎士団に敵対したと言っても良い。つまり紫音自身はとんでもないほどの職務執行妨害を行った訳であり、これからは彼自身も立派なお尋ね者に成り下がってしまったという事なのだ。

（ああ……分かってた、分かってんだけどさあ……。うう、見知らぬ土地でいきなり指名手配犯だなんて。とほほ）

正直言つと笑えなかった。

大体、紫音が何をしたというのだ。徹夜続きで体力がやばいというのになぜか黒い穴に叩き落とされ、落下の衝撃で意識が遠のいた拳句変なカルト集団と鬼ごっこ、最終的には女の子を守っただけで指名手配犯。

冗談にも程がある。思い出しただけでも自分の不幸っぷりに吐き気を催すぐらいだ。リイナはそんな紫音の葛藤をなんとなく察しているのか、微妙に困った表情で視線を彷徨わせていた。

「そ、それにしてもシオン君、だっけ？ 君、ほんと強いんだね。

あの人数相手にたった一人で勝っちゃうなんて」

なんとという粉骨碎身の話題変更。

しかしまあ、紫音だっていつまでも『過ぎてしまった事』を考えていたところでどうにもならないのは分かっているので、ありがたく乗らせてもらう。

「……まあ、嫌ってぐらい修行したからね」

「へえ、修行かあ。それじゃあなに、その体のどこから出てくるか

も分からないようなあれは、体術系の晶術か何かの？」

そこで謎名詞をさも常識かのように使われても困るんですが。

……という言葉なんて言える訳もないのだが、もちろん答えに詰まってしまう美弦紀紫音である。その謎すぎる単語は彼女達からしてみれば当たり前なのかもしれないが、残念ながら紫音は彼女らの常識と違う常識を持っている。なんとたって住んでいた世界が違うのだ、仕方ない事ではあるが。

(……って、これじゃまるで俺がすでにここが異世界だって認めたみたいじゃないか)

と言ってもまあ、包容力のある紫音はこういうオカルト関連の話題を大体は信じるたちの人間だ。見て聞いて感じて、そこまでの情報が揃っていればすでにそれで信じる価値には値するのである。実際のところ『人間の本能』として否定したい気持ちはまだ少し……いや、かなり残ってはいるが、ここに来てから一時間前後。建物やら騎士団やら料理やら、見た事のないものばかりを発見している事を振り返ると、それはもう『信じる』というより『認めなければならぬ』状況でしかなかった。

(むしろこれだけの現実を前に冷静に肝の据わってる自分が怖い……。っと、話がずれたな)

まあなんにせよ、解決すべきは今この状況だ。

少女の放つ謎名詞にせよ、この世界の詳細にせよ、色々あったがこうやって情報を手に入れる場を設けたのだ。ここは当たって砕ける、怪しまれる事前提で話を進めるしかない。

しばし言葉を選んだ紫音は、思い切って口を開いた。

「えっと……うん。ショウジュツって、なに？」

その瞬間世界が止まったのは気のせいではないだろう。

「……は？」

「いやだから、ショウジュツって……」

「え？」

「え？」

「え??」

「え??」

流石に無理がありすぎたか、いきなりリイナの表情には怪訝な様子が浮かび上がっていた。だが退く訳にはいかない。ここは一人の万屋として、根気強く聞くしかない。うん、そうだ。そういう事にしておこう。うん。決して今後からは変人扱いされないためにこの子を情報収集の生贄として使おうとか思っていないから、うん。

無限に思えるほどの沈黙の後、耐えきれなくなったようにリイナは重いため息を放ってきた。呆れるなら俺をこんな状況に陥れた神様に呆れてくれ。

「君…… 晶術も知らないって、一体どんな環境で育ってきたのよ……」

「いつ死んでも分からないような環境」

はあ? と表情をゆがませるリイナ。

だがあながち間違っていないのだから仕方ない。

「…… まあ、いいわ。君自分で自分の事、田舎者って言ったしね。」

…… いやでも、いくら田舎者でも晶術ぐらい知ってても、

「い、いいから。ほらほら、常識に欠けているおバカさんに説明するつもりで、ほら!」

またまた疑問に突っかかりそうになったリイナの言葉を遮って、無理矢理に紫音は先を促した。このままではいつまだ経っても聞き出せない。

そのリイナはまだ納得のいかないところが山ほどあるのか、何かを聞いたそうに眉間にしわを寄せているが、観念したのだろう。面倒くさそうに再びため息を零すと、こちらに向き直ってきた。

「え、つと…… じゃあ君、『魔力』って分かる?」

「分かりません」もちろん即答である。

しかしそんな紫音の回答は予想していたのか、今度は呆れる様子もなく少女は口を開く。

「じゃあまずその『魔力』から説明する。…… 君の常識を信じても

う一度質問するけど、流石に『火力』とか『風力』とか、そういうエネルギーぐらいは分かるよね？」

「原子力とか太陽光とかと同じ、あれ？」

「???? …… まあ、その様子じゃ分かってそうだからいいや」

最初にちよつと不思議そうな顔になったのは、紫音の発した単語について知識を持っていなかったからか。なるほど、異世界だと『原子力エネルギー』だの『太陽光エネルギー』だの、難しい方面の事柄についてはまったく無知なのか。

おそらく彼女の言う『火力エネルギー』を『熱エネルギー』と置き換えるだけで、まったく分からなくなってしまうのだろう。こう科学的な方向だと、圧倒的に紫音達の世界の方が有能なのだと分かった。

「えつとね、簡単にぶつちやけちやうと、その『魔力』ってのはそれらと同じ類のものなの。火力、風力、あとは運動とか。それらと同じ意味合いで、『魔力』もそこにあるって事」

「……簡単に申すと？」

「『魔力エネルギー』」

なんとなく、なんとなくだが、紫音にも分かる気がした。

『魔力』ってのは、自分達の世界でいう熱やら電気などの一般的なエネルギー、慣性の法則とかで有名な力学的エネルギーなど、そういうのと同じ類のモノとしてこの世界では扱われているのだ。一体それがどういう効力を齎すもののかは分からないが、とにかく紫音からしてみれば『常識外れ』にもほどがあつた。

大体、魔力なんて名前なんだからどうせRPGのゲームでありがちなマジックポイント通称MPと同じようなものに違いない。そんな馬鹿げたエネルギーが当たり前の常識として振舞われているのだ、謎でしかなかった。

「今じゃ魔力は、この全世界を支えているようなものだよ。数十年前まではその使い方すら分からなかったんだけど、魔力を使った『晶術』が生まれた途端、一気に世界の常識が変わった……って、

聞いてる？」

ちよつとした異世界クオリティに関心していた紫音は、リイナの問いかけにはつと我に帰る。

「ああ、ごめんごめん」気を取り直して再び尋ねる。「で、その『晶術』ってのは結局なんなの？」

「……あー、えつと、つまりよ。簡単に言えば魔力を媒体にして発生させれる、『異能の力』……って感じかな。ほら、さっきも言っただでしょ？ 晶術が生まれた途端、世界の常識が変わったって」

正直なところ異世界への関心にふけていた紫音は、耳に入っただけかな？ 程度にしか覚えていないのだが、ここは素直にうなずいておく。

「火を起こすために、木材同士を擦る必要がなくなった。風を起こすのも、いちいち風が吹くのを待つ必要がなくなった。水がほしかったりしても、雨が降るのを待ったり井戸まで汲みに行く必要がなくなった。……つまりは、そういう事。今まで出来なかった、難しかった事が、晶術一つで全て解決できるようになったのよ」

それら全てを頭の中に呑み込んで、まず思っただのは『非現実』の一言だった。

おそらくその晶術とは、ゲームによくある魔法やら魔術やらと、ほぼ同じようなものなのだ。常識を真正面から破り、非常識を常識に変えてしまうのと同じ事。不可能を、可能にしているのだ。

「ええと、つまりあれか？ 魔力ってのは元々とんでもないほど万能なエネルギーで、それを上手い事駆使しているのが晶術……って事？」

紫音の簡単に纏め上げた結論に、リイナは軽く頷く。

それから彼女は「これ見て」と自分の右手を差し出してくると、何をするのかと思いきや、手首から指先までを覆っているカフス的な何かを捲りあげた。

「うわ、なんだこれ」

露わになったリイナの右手甲には、黒色の線で何だか奇怪な紋が

浮かび上がっていた。どちらかというと刺青にも見えなくはないが、たぶん違う。何となく、これはそんなチャチなものとはまったく違う気がした。

「これは『晶術紋』って言うてね」リイナは左手の指で紋をなぞりながら、「もともと魔力はマテリアっていう小さな結晶の固形体なんだけど、それを肌の中に埋め込むと自然と浮かび上がってくるものの。晶術を使うためには魔力が必要、だからこうやって自分の『中』に魔力結晶^{マテリア}を埋め込んで、人々は晶術を使ってるのよ」

「ふーん……。じゃああの時、君が手から炎出して攻撃してたのも、晶術？」

「そ。あれは火を作り出して、そこに攻撃性の成分を練り込んだ『炎の形状をした魔力』。人それぞれだけど、ああやって殺傷力のあえる使い方も晶術にはあるの」

恐るべし、まこと恐るべし異世界クオリティ。

まさか自分がこんなRPGみたいな世界に来てしまうなんて……。今でも、紫音の中は半信半疑だった。

（でも、あれだよな。本やゲームの中だけにあった魔法やら騎士やらがあつたりするこんな馬鹿げた世界に落とされると、そこまで嫌な気分じゃない……。いや、それは俺だけか）

仮に紫音ではなく、もっと別の人がここに落とされたらどうだろう。大切な家族や友人、恋人など、それらの人々ともう一生会えないかもしれない。そこまで考えて、普通の人ならば一体どこまで正気を保てるのか。

しかし紫音はそうではない。元の世界には大切なものなど、何一つ残っていない。唯一大切だった姉、美弦紀彼方も、一年前に姿を消した。紫音にとってあの世界に残っているものなど、忌まわしき過去しか……。、

（……ええい、だからこれがいけないんだよ美弦紀紫音）

無意識のうちに陥っていた鬱モードから、なんとか這い出て気を取り直す。

情報は少しずつ揃ってきた。今現在位置する街・アルスウェル。ここが王都だということ。さらに王国騎士団とかいうカルト集団も在住している。そしてなにより魔力やら晶術の存在。

流石に事細かな世界観まではまったく分かっていないが、それはまだ良いだろう。この世界の経済を知ったところで、元の世界に戻る方法が分かるとは到底思えない。

（なんていうか、原因不明の怪奇現象とか分かればいいんだけど……どうせないよなあ）

都市伝説的な噂の一つや二つ手に入ればなかなか良いのだが、生憎とこの世界には晶術とかいうチートがある。都市伝説だの怪奇現象だの、すべて『晶術を使った誰かの仕業』と考えてしまえば、何もかも万事解決。噂そのものがないに違いない。

とりあえず元の世界へ帰る方法を見つけるのが第一の目的ではあるのだが、いきなり手づまりだった。あしからず。

「それにしてもさあ」

紫音の内心葛藤など露知らず、目の前の少女は呆れた様子で口を開いてきた。

「我慢に我慢を積み重ねてぶつちやけ聞いちゃうけど、君って結局どこの出身な訳？」

「う……」

「魔力を知らない晶術も知らない、見た事もない変な服着てるわ、今自分がある街の名前さえも分かってない。正直怪しすぎよ、君」

勘の鋭すぎるリイナ言葉に思わず冷や汗が流れてくる紫音。別に自分が異世界から来たと言えはいいいだけの話かもしれないが、

『君とは違う、また別の世界から来たのSA』

なんて言ってしまったら、その瞬間から紫音は変態電波男のレッテルを貼り付けられてしまう。それだけはやめてほしい。いくら他人とは言え、この女の子とはそれなりに関係が築き上げられているのだ。今更そんな事を言ってドン引きでもされてしまったら、福井の東尋坊から身を投げ出したって構わない。

黙りこくってる紫音をますます怪しく感じたのか、段々リイナの表情が険しくなっていく。これはまずい。どうにかしないとでもど
うする。どうするんだ美弦紀紫音！

必死に頭を回転させ、フルスピードで思考を巡らせた紫音の出した結論は――、

「ひ、東の方にあるジャッポーネ」

最悪な事に日本をイタリア語で読んだだけだった。

（終わったあああああああああ！　ありもしない土地から来たとか、別の世界から来たのとほとんど同じようなものじゃん！　お姉ちゃんごめんなさい、紫音は今日から電波男です！）

いざという時にテンパってしまう自分を呪う。もう駄目だ。今から飛び降り自殺してこようそうしよう。

だが、

「えっ……ジャッポーネって、あの世間から切り離されてるっていう、小さな島の事？」

……………はい？

「確かウィングベルの港から一隻だけ船を行き来させてるって聞いた事はあるけど……そっか、ウィングベルからならもう一隻船を乗り換えて、プロフの港までいけばあとは馬車を使ってこの街まで2日ほど。確かに難しい道じゃないわね……」

何となくだが分かった事。

（ちよっと待て、それはなに、あるの？　ジャッポーネあるの！？　速攻で考えた言い訳なのに、ジャッポーネあるの！？）

恐ろしい事に紫音の適当な言い訳は現実にあることらしい。恐るべしジャッポーネ、俺らにできない事を平然とやってのける。

リイナは再び紫音の方に向き直ると、

「やっぱりジャッポーネに住んでる人達って、世間と切り離されてる分そういう知識には疎いものなの？　みんな君みたいな変わった格好してるの？」

彼女の綺麗なライトブルーの瞳をちらつと盗み見みると、そこ

に浮かんでいたのは純粹にただ質問を投げかけてるだけの様子が、
なんとなく窺えた。確実に紫音の言葉を信じているらしい。

しかしここまで進んでしまったのだ。今更引き返すわけにもい
かない紫音は再び頭を回転させると、

「べ、別にみんながみんなって訳じゃないんだ。俺はちょっと特殊
な環境で修行をしてたから色々と常識に欠けてるし、この服も俺特
注のやつでさつ。ほ、他の人達はそこまで変わった生活はしてない
よ」

語尾に誰にも聞こえない程度に、たぶん、と付け加えたのは内緒
である。適当に言ってみた街の名前がまさかのまさか、実在してい
たのである。余計な事を言ったらそこの住人さん達に失礼だと思っ
たからだ。

目の前の少女はというと、普通に感心した様子で頷いている。ご
めん、リイナちゃん。

しかしここで話を切ってしまったてはまた怪しまれる可能性もある。
紫音はさらに続けた。

「今こうやって外に出てるのも、実は修行の一環でさ。親父が『こ
れからは世の中を学べ』って言うてきて、それが原因でこうやって
一人旅を続けてるんだよ」

ほー、なるほどねー、と感心した様子を見せてくるリイナ。マジ
ごめん。ホントごめん。

知識の持たない子に間違っていると分かっていて間違った知識を
教え込ませるのがここまで苦痛な事だとは、今まで考えもしていな
かった紫音である。

だが、まあ、何とか乗り切ったので良しとしよう。ジャッポーネ
とやらの住人とリイナには悪いが、まあ仕方がないのだ。うん、仕
方がない仕方がない。

「……さて、と。それじゃあ私はそろそろ失礼するね」

リイナはそんな事を言いながら席を立ち上がる。思わず紫音は声
をかけていた。

「もう行くの？」

少女はそれに、軽く苦笑いを浮かべるだけだった。

「私これでも、結構顔の知れ渡ってるお尋ね者だからね、のんびりはしてられないよ。そろそろこの街も出ようかと思ってたところだし」

言うとしイナは、懷に片手を突っ込むと何かを掴んで引き抜く。

それは数枚の紙幣みたいな紙だった。彼女はそれをテーブルの上に乗せると、

「お金は置いとくから好きなだけ食べときなさい。あ、気にしないでいいから。私を助けてくれたお礼として、軽く受け取っというて」

「で、でも」

「いいから。じゃ、私は行くね」

リイナの言葉はそれだけだった。軽く手を振ると、店の出口の方へ歩き出してしまふ。

なぜか孤独感に苛まれてしまふ紫音である。もしかするとこの一時間ちよつとで、あのリイナという少女に依存していた自分がいたのかもしれない。

しばし考えた紫音は、席を立ちあがる。その場を動かず、出口に消えていく少女の後ろ姿に叫びかけた。

「ありがとう！」

周りの他の客から多少の視線を貰うが、まあ気にしない。

びくつと震えたリイナは、一度だけこちらに振り返った。そして苦笑いを浮かべると、もう一度手を振って——今度こそ、店を出て行った。その時の顔はなんだか、どっちが助けたか分からないじゃない、と言っている気がしたのは、おそらく紫音だけだろう。

軽く息をついて席に座り直すと、紫音はなんとなく天井を見上げた。そこには蛍光灯も電球もない、無骨な木目が広がっている。

これからはもう一人だ。食料を手に入れるのも、どこかへ行くのも、元の世界へ帰る方法を探すのも、一人。そういう状況は万屋の経験で多少は慣れているが、地図もない完全な未知の土地だと、さ

すがにあまり意味はない気がする。

だが、どうにかしなければならぬ。ただどうする事も出来ず過ぎゆく時間をただ過ごすよりかは、動いた方が安心することもあるだろう。

少しだけ気合いを込め、再び前へと向き直る。とりあえずテーブルの上にある料理をすべて片付けたら、再び情報収集へ戻るとしよう。もう会う事もないだろう少女からは一般的な情報を手に入れた。ここからが踏ん張りどきに違いない。

と、そこで気付く。

思わず紫音は、テーブルの上に載っている数枚の紙幣へと視線を移した。

（あの……、お金の単位分からないんですけど）
問題が一つ増えてしまった。

第3話：疑問と解決（後書き）

たぶん更新は土日中心になると思います、はい。

第4話：くだらん進歩と企む思考

紫音がお店から出ても空はまだ青空だった。

日本はすでに深夜ぐらいだというのに、この正反对員合。まったく寝ていない紫音からしてみればいい迷惑だった。

ちなみにお店でのお会計時、ウェイトレス姿の金髪巨乳でダイナマイトな女性店員さんに「合計3400ウイズになりますー」とか言われた時は正直焦ったが（お金の単位が分からないため）、とりあえずリイナからもらったお金を全て差し出したところ、ニコニコ笑顔で対応してくれながらお釣りとして3枚の紙幣と数枚の銀色コインが返ってきた。よく分からなかったが、何とかだったので安心である。

外の世界を見渡しながら、紫音は大きく体を伸ばした。

（あー……これからどうしようかなあ……。帰る方法探すつたって簡単に見つかるわけないし。というかそんな事を道行く人偶から隅まで聞いていたらただの変質者だよ……）

万屋としての経験上だが、未知の空間で未知の問題に対する情報を集めるときは、むやみやたらと聞いて回るより最初は個人での情報収集の方が効率が良い。周りの人間から話を聞いて回るのは、自分の存在が『そこ』に定着し、周りからの存在感が高まってきた時が丁度いいのだ。そうした方が周囲の人間に違和感を与えず、なにより動きやすい。

例えば学校への入学当初を思い描くといい。入学したての新入生が訳のわからない事をあれやこれやと周りに聞いて回るよりかは、

時間がたち、人脈が広まってきた頃に聞いて回った方が確実に手取り早く物事を進められるだろう。つまりはそういう事だ。

今の紫音もまさにその状況である。右を見ても左を見てもそこにあるのは未知の世界。ここで何も考えず思いつくままに行動するのは明らかに危険だと分かった。

（にしても……、）

なんとなく、周りの風景に視線を奪われる。

リイナに連れられて先の飲食店に入るときは色々慌てていたのでゆっくりしている時間もなかったが、いざこうやってじっくり観察してみると色々な発見が目についた。

全体的な街並みとしては、『西洋』という言葉そのまま具現化したような雰囲気である。ただし科学技術には疎いであろうこの世界、目立つほどの巨大な建物は一切見当たらず、どれも茶色や浅黄色をしたレンガなどで出来た建物ばかりだ。さっきまでいた飲食店も、思い返せばほぼ全てが木製でできていたに等しい。

不思議なのはもちろん町並みだけではない。簡単に言えば個人営業、だろうか。道端に寄せられるようにして荷車やテントを背に、野菜や雑貨を売っている多くの人々。道行く人を客として招きいれようと彼らの甲高い声が幾重にも重なって響いていた。

なんというか、日本では絶対にありえないような光景だった。王都、だという事もあるのだろうが、それでもこの賑やかっぷりは紫音みたいな人間からすると異様な光景でしかなかった。

（はぁ……確かにまあ、異世界らしいっちゃらしいけど。ここまで常識外れだと呆れてくるよ……）

しかしこれも仕方のない事。なにはともあれここで情報を集め、元の世界に帰る方法を探すしかないのだ。

とりあえずポケットに手をつ突っ込みつつ、歩き出す。今更気付いたが、持っていた学生鞆が手元がない。黒い穴に落ちるとき、邪魔だったからその辺に投げてしまった記憶が僅かながら残っていた。せめて携帯でもあれば暇つぶしにでもいいのだが、紫音はいつも携

帯を鞆の中に入れていた主義者だ。残念ながら手元にはなにもなかった。唯一あるとすればポケットティッシュぐらいである。

どうせ携帯あっても圏外なんだろうけど、と適当につらつら考える美弦紀紫音であった。

「へい、その兄ちゃん！」

と、ふらふらしていた紫音の耳に野太い声が届く。最初は自分に向けられたものだと思わず歩き去ろうとしたが、何となく声のした方に振り向くと、荷車を背にこっちに向かって豪快に笑っているおっさんが一人。ああ、俺なのね。

別にこれといって細かい目的がある訳ではないので、とりあえず紫音は歩み寄った。

頭に白いバンダナを巻く白ひげのおっさんはそれを見るとさらに豪快な笑い声を上げる。

「なっはっはっは！ 兄ちゃんなかなか変わった格好してるな。旅の途中か何かかい？」

「は、はあ」

適当に相槌を打っておくが……、どんだけテンションの高いオヤジなんだ。よく初見に人に対してここまで笑える。

「ほう、旅の途中か。どうだい兄ちゃん、ウチのモン買っていかなえか」

と言つてオヤジが荷車の中を見せてくる。覗いてみると、思わず眉をしかめた。

大量に詰められていたのは、丁度人の顔ぐらいのサイズをした木彫りの板……というか、お面だろう。キツネやらライオンやら豚やら鳥やら、歪な雰囲気を出すお面が大量に鎮座していた。というかちよつと顔を近づけるだけで木の匂いが凄い。

「これは？」

覗きながら尋ねると、オヤジは少しキョトンとしたあと、すぐにながはつは、と笑いを零す。一体何なんだアンタ。

「旅人つてこたあ知らなくてもおかしくねえか」オヤジは実に愉快

そうに、「兄ちゃんよ、『面踊りの祭り』って聞いた事ねえか？」

もちろんある訳ない。黙って首を振ると、彼は楽しそうに続ける。「『面踊りの祭り』ってのはな、年に一度だけある親睦の式のことさ。なんでも王都の人々の親睦を深めるために数十年前できた祭りらしいが、意外に反響が良いらしくてよ。今じゃこの時期になると街はお祭り騒ぎだ」

「具体的に何をする祭りなんですか？」

紫音の問いに、オヤジは一つだけお面を掴むと、

「簡単な事さ。街の大広場があるだろ？ あこで木材を燃やしまくって巨大な炎を作ると、みんなこのお面を被って適当に踊るんだ。たったそれだけの事だが、毎日働きっぱなしで疲れてるやつがこの街はほとんど。良い気晴らしなんだよ」

「へえ……」

つまり、キャンプファイヤーみたいなものだろうか。

確かにキャンプファイヤーは友情の火に誓いを立てるという意味がある。この世界ではそのことを親睦の式と呼び、アルスウェルではそれを使った『面踊りの祭り』があるのだろう。

「で、その開催が丁度今日の夜からだ。ほら、周りを見てみな。オレ以外にも面を売ってるやつらが仰山いるだろう？」

言われた通り周りを見渡すと、うん、確かに。並ぶ屋台の5つに1つは必ず面を売っている。どの店も個性豊かで、見てて飽きないぐらい色んなデザインがあった。こうして見ると街がやたら賑やかなのも、この祭りのせいなのかもしれない。

「どうだ兄ちゃん、旅のついでに祭りに出てみねえか？ 面さえ被ってれば何の心配もないぜ」

「いやでも、俺踊りとかできないし……」

「はっはっは！ なあに、面踊りの祭りって言っても必ず踊らなきゃならねえ訳じゃない。面被って、傍観してるだけでも楽しめると思うぜ？」

そこまで言いくるめられ、うーん、と少し考える紫音。

まあ確かに、見るだけなら悪くはないかもしれない。多少心配な部分はあるが、オヤジの言い方からするとお祭りには大量の街人が集まるのだらう。もしかすると何か情報が掴めるかもしれない。

そして何より、こつちの世界に来て未だロクな事がない気がする。気分転換にでも傍観するぐらいなら……、

それに少しだけ、異世界の伝統というやつにも興味を持たされるところがあつた。

「……そうですね、お面一つ買います」

「お、話が分かるねえ兄ちゃん。一つ200ウイズだぜ」

それを聞いた途端、ぴたつと紫音の動きが止まる。理由は簡単だ。お金の単位が未だ分かっていない。

しかし怪しまれるのもそれはそれで酷だ。とりあえず上着のポケットに突っ込んでいた紙幣と銀貨を取り出すと、それをまじまじと睨み付ける。

そして気付いた。

（ん、WIZ……？）

よく見ると紙幣には1000WIZやら3000WIZ、銀貨には100WIZと記されている。速攻で頭を回転させた紫音は、拳動不審ながらも銀貨を2枚、オヤジに渡してみた。

「まいど！」

（……よしッ！）

どうやら正解だったらしい。

どうもこの世界のお金の単位はなかなか簡単なのだらう。他にも種類があるのかもしれないが、今紫音の手持ちでは3000、1000、100WIZの三種類。お店で払った3400ウイズと言いつこのお面と言いつ、おそらく細かい数字での販売などはされていないのだ。むしろ日本より簡単だこれは。

ようやく一つ問題が片付いた事に歓喜する紫音。お金の使い勝手が分かれば、行動範囲はそれなりに増してくるのだ。

「おじさん……ありがとうございます」

「??? おお、祭り楽しめよ」

向こうは意味が分かっていないようだが、紫音からしてみれば大きな進歩である。もしこのオヤジが声をかけてくれなかったら、これに気付くのはまだまだ先になってしまったことだろう。

心の中で謎の感謝を全力投球で向けながら、犬っぽい顔面をしたお面を一つ受け取ると紫音はその場を離れた。

お面を片手に歩きながら、つらつらと紫音は考える。

お金の単位が分かったからには、彼の行動範囲はかなり増えたと言っている。確かに元の世界へ戻るための情報収集は大事だが、それ以前に食料の確保や生活の必需品など、必要最低限手に入れないものがないものがある。目的を遂行する前にはまず準備、つまりそういう事だ。

何より食料の確保はかなり大事だと思う万屋の少年である。人間いくら鍛えていたとしても食欲には抗う術がない。今はついさつき盛大に食べたばかりなのでそこまで大事には思えないが、あくまでもそれは今の自分の状況からする一時的な思い込みだ。のちの事を考えて、食料だけは必要最低限入手しておくべきだろう。

（と言っても、見る限り野菜とか肉とか、食材の状態でしか売られてないよな……）

調味料さえ一緒に買えば料理ぐらいできるだろうが、残念ながらそれをするにはある程度の設備が整ったキッチンが必要である。自炊する、という選択肢はこの時点で潰れるのだ。

かと言って見渡す限り、料理されたモノがそのまま売っている店などまったく見当たらない。まあ確かに、プラスチックの箱に詰められた弁当やフィルムに覆われたおにぎりなどが売っていたらそれはそれで異世界に対するレットルがべりべりと剥がされ、新たな色に塗り替えられてしまうのだが、そうは分かっているても落胆するほかならなかった。

コンビニみたいなの一件ぐらいあってもいいのに、と軽く愚痴を零す紫音である。

（まさか普通の飲食店でお持ち帰りなんか出来る訳ないしなー……。つつかあったとしても保存が効かないよね、絶対）

できればパン屋的なノリの店があれば速攻で飛びつくのだが、お生憎様未だ一軒も見つからない。どうやらこの世界、紫音に対し喧嘩を売っているらしい。

それにだ。問題なのは食料だけではない。

一体どこで寝ろというのだ。まさか路上だなんてやめてほしい。いくら見知らぬ土地とは言え、早速ストリートチルドレンな家なし子は勘弁してほしかった。

それにこれでも紫音は王国騎士団とやらの追われている（かもしれない）身。何の警戒もせず路上で爆睡するのはあまりにも危険すぎた。

（寝る場所を確保できて、尚且つ食料も手に入りそうな場所……）
こういう場合RPGのゲームだとどこへ行くのか、少しだけ考えてみる。

HPMP共に危険な状況で、とにかく回復したい。警戒を怠れば周りの敵に首を取られる。こういう場合、一般的な考えを持つプレイヤーならば……、

「——宿、さがそう」

とりあえず目的を定めた美弦紀紫音は、宿屋を探してふらふらと歩き続けた。

王都・アルスウェル。

皆に囲まれたその街の中心には、国王の根城ともいえる巨大な城郭がそびえ立っている。出入り口であろう巨大な門の前には、両サイドを挟むように二人の兵士が佇んでおり、他の建物とは比べ物にならないほどの背丈と、存在感が、そこからは満ち溢れ出していた。そしてそんな城郭の傍らには、寄り添うようにしてとある小さな教会が建っている。

またの名を『ジャスティア教会』。正義を象徴とする建物。

だが、教会と言っておきながらそこには別に変な宗教団体が居座っていたり、カルト集団がわいわい談笑で盛り上がっている訳でもない。事実、そこを根城としているのは、己たちこそ本当の正義と謳っている王都唯一の武力団体。

『王国騎士団』だ。

中を覗けば確かに建物の作りは教会であろう。それこそ礼拝堂なんかは、黒服シスターが動き回ってないと逆に違和感が出てしまうぐらいの素晴らしい聖堂っぷりだ。

しかし現実、そこを徘徊しているのは銀色の鎧を身にまとった数人の兵士。シスターなど影も形もありやしない。しかも礼拝堂以外にある大量の個室なんかは全て改造され、兵士たちの個人部屋として機能していた。数少ない大きな目の部屋なんかは食堂や会議室などに改造されてしまっている。

恐ろしい事にそのジャスティア教会は、完全に王国騎士団の防衛拠点として利用されているのだ。

そしてそんな教会のとある一部屋、『団長室』と呼ばれている一室。

名前通りそこは騎士団のリーダーである、リーダーの為の部屋だ。紫音のもといった世界で例えるなら、校長室などと同じような扱いかもしれない。とにかく、偉い人の部屋。

そんな団長室の中、高そうな椅子に腰かける中年の男が一人。

王都アルスウェル王国騎士団所属騎士団団長、ルパート・アルビ

ン・ノリス。

それが彼の騎士団としての立ち位置と、自らが掲げる名前であった。

引きしまった顔立ちは実年齢が嘘と思えてしまうぐらい美しいもので、女性のような白い肌は実に彼の雰囲気にとンタクトしていた。しかし金色の色素を持つ眼光は鋭く、それだけでも虫一匹殺してしまいそうなほど。男性にしてはやたら長いストレートの銀髪は後頭部で一つに纏められ、すぐ背後の窓から注ぐ静かな風にゆらめいていた。

王国騎士団団長という名目の元、団長のみが着る事の許される赤い装束を身にまとった彼は、もちろん騎士団の中でもトップに立つ存在。と同時に、『真の騎士』とも称えられる至高の風格。血筋や家柄に頼らず、ただ実力のみでこの地位まで上り詰めたその功績は、誰からも称賛され、数多くの人々から憧れの意を買っていた。まさに、国王の右腕と呼ぶに相応しい存在なのである。

そんな天才級の実績を持つルパート・アルビン・ノリスなのだが、彼は今頭を抱えなくなるような悩みに直面していた。それこそ騎士団総動員とある山脈の風龍を討伐しに行った時ほどではないが、それでも悩まざるおえない問題である。

(……そろそろか)

ルパートが本能と勘のみでそう思った瞬間、コンコン、と木製のドアが軽くノックされた。客ではない。おそらく一個小隊からの報告だ。ルパートはただ一声、「入れ」と言うと、ゆっくりとドアが開放される。

そこから入ってきたのは、ルパートより少し年上の、2番隊隊長イーノス・ジェノーム・ラッシュ。少し年上、と言ってもルパートの見た目年齢がかなり若いので、実際他人から見たらそうでもないが。

銀の鎧を身にまとい、赤いトサカの付いた兜を脇で抱えると、彼は一礼。その時、僅かながら彼の体がふらついたのをルパートは見

逃さなかった。絶大なダメージでも受けたか、それとも今まで気絶していて、目覚めたばかりなのか……。

よく見ると、イーノスが身につける鎧の中心——丁度腹筋辺りの部分に、人の拳程度の風穴がぽっかりと開いていた。それこそ鈍器類の武装で無理矢理こじ開けられたような、奇妙な穴である。それを視線に捉えながら、ルパートは言った。

「任務の方はどうなった？」

冷たい言い方だが、これも団長としての務め。騎士たるもの、自らの傷痕は自分自身で何とかするものだ。他人に心配されるものではない。

イーノスは再び一礼すると、「報告します」という前置き。言葉通り報告し始める。

「今回も、例の女の捕縛には失敗しました。何とか一歩手前まで追いつめる事は出来ましたが……」

「——が？」

「……すんでのところで第三者からの介入があり、逃走を許してしまいました。誠に申し訳ありません」

最後の文章で、ピクリとルパートのこめかみが震えた。

第三者からの介入——つまり邪魔者が入った、という事なのだろう。

しかし本来、そのような状況に陥る事は滅多にない。王国騎士団は全世界でもトップに躍り出るほどの巨大な軍、敵に回せばたじや済まないことぐらい誰でも知っている常識のようなものだ。だといつにも関わらず、わざわざ騎士団の邪魔をするような行為に出るものは、ごく僅かのトチ狂った人間ぐらいしかいないのである。

つまりこれは非常にイレギュラーな状態と言う訳だ。小隊が不意を突かれて目標を逃がされてしまうのは、確かに仕方のないことではある。だが——、

「……損害は？」

ルパートの質問に、二番隊隊長であるイーノスが僅かに動揺した

のは気のせいではないだろう。

しかし団長には逆らえない。質問は絶対に答えるという意味表示。彼は一度咳払いをすると、

「死傷者0名、負傷者2名、軽傷者16名、未だ意識を取り戻していない者が2名の合計20名です」

思わず、いや、ほぼ必然的に、ルパートは沈黙せざるおえなかった。

あり得ないのである。イーノスが口に出した数値は、本来ありえないような数なのだ。

邪魔者が入ったのは分かる。不意打ちが合ったであろうことも分かる。そのせいで目標を逃がしてしまった事も分かる。

だが。

それにしても損害が大き過ぎではないか？

邪魔者からの一撃で部隊が怯み、それで逃げる隙を与えてしまった事は確かだろう。イーノスの目を見れば分かる。彼は嘘を吐いていない。というより、嘘を吐く理由が分からない。

しかしいくら不意打ちだったとはいえ、これは奇妙すぎないか。

例え一般兵士といえど、王国騎士団の兵達は誰もが洗練された訓練を受けてきた者達。そこらの盗賊や派閥とは違う、猛者達の集まりだ。それをたかが不意打ちで、いくら油断していたとしても、たったその程度で、20名全員に被害を与えれるとは一体何だというのだ。仮にその立ち位置がルパートだったとしても、『邪魔者』と同じ程度の被害を与える事ができるとは到底思えなかった。

「……その邪魔者は、集団か？」

「いえ、見た限り奴一人でした。奇妙な格好をしていましたし、どうやら『目標』とも接点がないようで。おそらく旅の者か何かではないでしょうか」

「ふむ……」

おそらく大魔導師か、それともかなり腕の立つギルドの人間か。しかしどちらにせよ、違和感がある事に変わりはない。大魔導師

はそもそも聖職と呼ばれるほどの存在で、騎士団に追われるような人間に手を貸すとは到底思えない。ギルドも似たようなものだ。一般人の仕事は受けても、決して犯罪者のようなお尋ね者からの仕事は門前払い確定なのである。

では一体誰が。

誰が彼らの間に割って入り、目標を逃がしたのか。

ルパートの剣幕が、段々と鋭くなっていった。

「……まあ、よい。今回は想定外の事態だ。ペナルティはなしにしよう。それよりもできるだけ早く部隊の回復を急げ。今夜になると面踊りの祭りで街の警邏が難しくなる。その間に街の外へでも逃げられたら元もこうもない」

「ですが団長。奴の攻撃を正面からもらった私だか言えますが、あの男はかなりの腕前です。おそらく体術系の強力な晶術でも使うのでしょう。……もしもまだ、あの男が目標に張りついている状態ならば、捕縛は難しいかと……」

「だからこそその王国騎士団だ」

イーノスの言葉を遮って、ルパートは言い放った。

「仮にその男がかなりの猛者といえど、王国騎士団総動員で掛れば手足も出んだろう。時代は個々の実力ではない。圧倒的な数と戦力だ。目標がまだこの街にいる内は袋小路、全軍で叩けば何も問題ない」

「全軍……ですか？」

「念には念を、だ。イーノス、貴様の隊はいくら不意の攻撃だったとはいえ、正面からやりあって全滅したのだろう？ 目標やその男が逃げたという事は、その男もどうせ無傷だろう？ 良くて軽傷だろう？ たかが小隊が2つ3つ群れたところで何の意味もない。そうだろう？」

イーノスからの返事はなく、彼はただ無言でうなずいただけだった。つまり間違っではない、邪魔者の介入者はおそらく無傷か軽傷。それが証明された今、全軍でも出さない限り『安心』できるレベル

まで心を保つ事が出来なかった。

さらにルパートは続ける。

「それに、あの女を捕まえろと我々に頼んできたのは一体誰か、貴様も分かっているだろう？ 時間がかかれば掛るほど、世間から見ただ我々の評価が刻一刻と下がるようなものだ。ましてや失敗など話にならない」

今騎士団に狙われる指名手配の中で、目標——リィナ・グレーティア・セツティは最上級の重要手配犯だ。なぜ彼女を捕まえないければならないのか、それはルパートですら分かっていない。しかし、これを依頼してきた主が主。出来るだけ迅速に、素早く、あの女を捕まえないければならないのだ。

「いいか？ これは時間との勝負だ。いざとなったら私も出る。イーノス、お前は他の隊の連中にも今話した事を伝えてこい」

最後に、「以上だ」と付け加えて、ルパートは完全に話を切った。他に言う事はない。時間が無駄にならないよう、必要最低限の会話こそがこのルールだ。

イーノスは「はっ」と返事をする、一礼。すぐさまドアまで歩み寄り、団長室から姿を消していった。

その背中を見送りながら、ルパートは思う。

今夜の面踊りの祭り。本来なら兵の警邏が薄くなるその時間帯に、目標は街の外へ逃げようと目論むであろう。

つまりその時こそがチャンスだ。

街の外へ逃がしてしまつたら捕まえるのがより一層難しくなる。

この街にいる内に、必ず捕縛する。

虚空を見つめるルパートの眼光に、怪しい光が宿った。

「は、8000ウイズウ!？」

ここは街の一角にある、まあごく一般的な宿屋。

そのカウンターの前で、紫音は頭を抱えながら絶叫と言うか悲鳴を放った。

「はい、申し訳ありませんお客様」

そう言つてスーパーニコニコ営業スマイルで対応してくる女性店員さんが今は憎くて仕方がなかった。

お金の単位が分かり舞い上がった紫音はあれから30分ほど歩き、ようやくこの宿屋を見つける事が出来たのだが……おそろべし現実。どうやらRPGなどのゲームと違って、リアルな異世界では3日ほど泊まるだけでも相当な金額を要するらしい。それがついさっき叫んだ8000ウイズという単位なのだが、もちろんそんな大金紫音は持っていない。リイナから貰ったお金でも5000ちよつと。正直無謀だった。

「く、くそ……なんだよ8000つて……。今時のRPGでも150ゴールドとか300ガルドとかそんなんがメジャーなもんだろう。異世界なら異世界らしく、始まりの村的なノリで100円で泊まらせるよクソー!」

小声で超愚痴りまくる紫音だが、店員さんの反応はまったく変わらない。まさしく天下無双の笑顔、紫音からしてみれば死神スマイルにしか見えない恐怖の笑顔だ。

それこそ、さっきから何を言つても「はい、申し訳ありませんお客様」である。こんなところだけRPGらしい素振りしやがって。

ほんとこの店員……いや世界は、俺の事が憎いらしい。

だが諦めの悪いところは姉譲りの紫音である。

「そ、そうだ。別に3日まるまる泊めてほしい訳じゃないんだ。2日……いや今日だけで良い。そういうので手を打ってもらえれば嬉

しいんだけどなー……………だめ？」

「はい、申し訳ありませんお客様」

……」

いいよもういいよ……………、と半泣き状態でカウンターを背に歩き出す悲しい少年が一人。こうなったらもつと話の分かる店員さんがいる宿屋を探すしかない。生憎、このNPC染みた金髪ウェーブお姉さんとはまともに会話できる自信がなかった。

（はああ……………また歩かなきゃならんのか……………、さすがにそろそろ疲れてきた……………）

紫音にも限界はある。こうずっと立ちっぱなしだと、体育祭とかで校長先生の長ったらしいお話を聞いているのと同じ気分になってしまふ。

しかしまあ、現状どうする事も出来ない。重たい足取りのまま、

紫音は宿屋の外へ出る

——その時だった。

ワアアアアアアア！！と。

突如外から響いてくる歓声。

いきなりの爆音に思わず震えた紫音だが、すぐに平静を取り戻すと

（な、なんだ……………？）

慌ててドアを開け、外へと身を乗り出す。

そして目を見張った。

そこには大勢の大観衆。大人から子供まで、多くの人々が何かを囲むようにして湧きだっていたのだ。

（なんだよこれ……………。確かに宿屋入る時から少し人は集まってたけどさ……………）

どうやら紫音がNPC金髪ウェーブと戦闘を繰り広げている内にこれだけの人が集まったのだらう。

イベントか何かなのか。何となく興味を惹かれた紫音は、群れた人々の中に単身突っ込むと、華麗な動きでひよいひよい移動しながら一番先頭に躍り出る。隣の男性がちよつと驚いた表情になっている。ソーリーソーリー。

前方に視線を移し、思わず眉をひそめた。

人々の巨大な輪の中心にいたのは、2人の男。どちらも巨漢で筋肉全開だ。しかし片方は地面につつぶし、目を回している。一体何があつたというのだろう。

適当に隣の男性に聴いてみた。

「これ、何なんですか？」

そついうと男性は一瞬怪訝な様子になり、紫音の姿恰好を見ると口を開く。

「なんだい君、旅の者かい？」

「……まあそんな感じです」

「そつか、なら仕方ないか」

適当に頷く男。

今思つた事だが、どうやらこの世界、旅の者だと名乗ればある程度常識から逸していても話が通用するらしい。うん、これは良い。これからはこれを上手く利用して行こう。

「今夜の面踊りの祭りは知っているかい？ あれがあるせいで街の住人みんながいつもよりハメを外してるんだけど、毎度毎度そうなるとうつてどつかの誰かが賭けごとを始めるんだよ」

「賭けごと？」

「そう。自分の腕に自信のある者があやつて人前で戦つて、勝つた方が負けた側のお金と、自分が賭けた金額分相手に賭けてた観客からもらえるのさ。もちろん余つた分は買った側の観客がもらえる」

「え、お金貰えるの？」

「ああそつさ。と言っても俺らみたいに平和な晶術しか使えず、口々に体も鍛えていない奴なんかは観客として少しずつ稼ぐしかないけどよ」

ご親切にも事細かく教えてくれる男性。

だがしかし、その後半の言葉は、紫音の耳には届いても脳にまでは届いていなかった。

（お金が……もらえる……）

ついさっきNPC金髪ウェーブと言葉の応酬をしてからというもの、美弦紀紫音は金に飢える貧乏人状態だ。
もはや選択肢は一つしかない。

（これだ……！）

第5話：万屋と逃亡者の再会（前書き）

期末テストでちよつと更新遅れました。

第5話：万屋と逃亡者の再会

「おらおらア、次はどうだあ!!」

大量の人々で作られる大観衆の中、今まさに木製の巨大な大剣を振りかざして相手を気絶に追いやった巨漢の男が、高らかに叫ぶ。

周りからは「あいつやべえぞ!」とか「もう6人抜きじゃねえか!」という叫び声が飛び交っている。あまりの無双ゲーっぷりからか、観客達の賭け側はすでに傾きつつあった。むしろどちらが勝つかの賭けごとと言うより、今いる男がどれだけの人数を勝ち抜けるか、周りの雰囲気はそういう波へと変貌していた。

わいわいがやがやと、観衆達から様々な声が漏れる。次は一体誰が出るのかと、奴に勝てる奴など今ここにいるのかと、お前出てみるよと仲間をひやかす声なんかもある。次に出る奴はさぞ己の実力に自信があり、それこそまるで覇者のような奴だと、そこにいる誰もが思っていた。

そう。

万屋である美弦紀紫音以外は、誰もが。

「はいはい次俺! 俺が出る!」

元気よく声を張り上げながら、紫音は手をぶんぶん振り回し観衆の中心へと躍り出た。もちろん金欲しさから出てきた行動である。先程の男性の話を聞くに、どうやらこの試合で勝ち続ければ大量の金が入るとか。それこそ10連勝でもすれば一ヶ月宿に泊まっても余りが出てくるほど。まさに今の紫音からしてみれば宝物庫の何物でもなかった。

が、そんな紫音の行動とは裏腹に、静まり返る観衆。まあそれもそうかもしれない。紫音はまだ17歳の高校生で見た目年齢が若く、それこそ子供に部類される存在だ。目立つような筋肉もなく、そんな素朴な少年がいきなり名乗り出たら、思わず黙り込んでしまうのも仕方ないだろう。

トコトコ歩いて巨漢の男の前方に立つと、紫音はポケットに手を突っ込みながら相手の目を見据える。僅かに沈黙が続くが、それを最初に破ったのは今まで連勝中の男だった。

「……おいガキ、いいか？ よく聞け。今俺達がやってるのは、子供がやるような遊びじゃない。もっと苛烈で、お前みたいなガキじゃ想像できないもんだ。その辺ちゃんと理解してんのか？」

もちろん理解している。むしろ紫音はこんな男よりも、残酷で、悲惨で、どうしようもない地獄を見てきた自信がある。いや、確信があった。

「もう一度言う。遊びじゃねえんだ。危ない目に遭いたくなかったら、まだ間に合う。さっさと人混みの中に戻れ。さもないと、」

「俺がお前を叩き潰す、とかそんなん？」

男の台詞を遮って、紫音は言い放った。

そんな彼の顔には笑みが浮かんでいた。それこそ敵を馬鹿にするような……むしろ、今いる相手を敵とすら思っていないような、不敵な笑み。明らかに危険なこの状況で、それほどの表情を作れるのはおそらくごく少数の人間しかないだろう。

「まあ、別にいいけどさ。おじさんの言うとおり戻っても。でも俺、今結構お金に困ってるんだよね。どんな方法を使ってもお金稼がなきゃミラクルな路上生活が始まっちゃうのよ」

紫音はポケットに突っこんでいた手でお金を掴むと、引き抜き、地面に放り投げる。全額掛ける、そういう意思表示であった。

「だからできればおじさんは俺と戦ってほしいのよねー。面倒なのは分かるけどさ、そこは目をつぶってほしい。お願いだよ。……」

「ああ、それとも」

瞬間、ニヤリ、と。

紫音の顔面に浮かんだのは、今までの万屋生活で作りあげてきた最凶最悪の邪悪な笑みだった。

「怖いのか？」

ブチッ、と男のこめかみ辺りからとんでもない音が聞こえたのはたぶん気のせいではないだろう。すでに男の表情から笑みは消え、眉はつり上がり、完全な怒りのよすが読めた。その鋭い眼光から放たれる視線、うん、確かによほど訓練した者の目だった。

だが。

それが紫音にも通じると思ったら大間違いだ。

「小僧……今の言葉、すぐに後悔させてやろう。自分の選択が間違っていた事を、一撃で分からせてやる」

男は紫音同様有り金を全て地面に放り投げると、木製の巨大な剣を目前に構える。紫音みたいな子供から馬鹿にされた事がよほど悔しいのか、猛烈な怒りのオーラがひしひしと伝わってきた。

と同時に、一気に湧き上がる観衆。誰もかれもが巨漢の男に賭けているのは見て取れた。「そんなガキやつちまえ！」「生意気なんだよ三下！」と響く台詞も、すべて紫音にしてみればいいものではなかった。まあ、別にいいけど。

やがて前に出てきたのは、審判であろう髭を生やしたオッサンだ。彼も勝負が見えていて正直面倒くさそうだった。

「準備は良いかい？」

「いつでもいいぞ」

「いいよ」

三者三様の声。

辺りを包み込むのは、一瞬の静寂。紫音と巨漢が真正面から向かい合い、審判のおっさんは黙りながら片手を上に掲げる。周りの観客も釣られるようにして黙り込んだ。

そして――、

「――始めッ!」

審判の腕が振り下ろされる。とほぼ同時、先に動き出したのは巨漢の男の方だった。

その体に見合わないほどのスピードで紫音との距離を詰めると、身の丈はあろう巨大な木製の剣を片手で振り回し、紫音目掛けて一直線に強烈な斬撃が飛来する。右からの横一閃。おそらく遠心力の力も加算されているのだろう。もし真正面から直撃でもしたら、普通の人間ならばただでは済まないことは分かった。

しかしお生憎様、美弦紀紫音は普通の人間ではない。

このような雨粒みたいな一撃、避ける必要性すら感じられない。

ドガッ! と。

何の遮りもなく、空気を食い千切って繰り出された男の一撃は、一寸の狂いもなく紫音の脇腹へと吸い込まれ、腹筋を砕く。それだけには飽き足らず、まるで巨大な肉片に肉切り包丁を思いっきり叩きつけたような一撃だけで、紫音の意識は失われるはずだった。

「なっ……!？」

誰よりも早く、攻撃を仕掛けた張本人である男が異変に気付く。

「あんた見かけによらず、力弱いな」

そんな余裕の声を放ったのは、もちろん紫音だった。

だが、紫音は別に避けた訳ではない。攻撃も防いでいない。ただそこに突っ立って、真正面から男の一撃をもらった。

だが、それだけだ。

紫音からしてみればそれだけでしかない。

この程度でゆらぐほど、美弦紀流は甘いものじゃないのだ。

「どうしたおじさん、一撃で仕留めるんじゃないかった？」

目の前の男は、想定外の状況に困惑しているのだろう。さっきから息を詰まらせて、あり得ないものでも見るかのような目で紫音の

脇腹を見つめている。なんだこの変態め。

だが、向こうがいつまでもそうしているつもりなら、次はこちらの番だ。

「敢えて言おう。『一撃で仕留める』と。」

「――」

数瞬、すでに紫音は動いていた。

コンマ1秒で狙いを定めると、男の顎に視線を据わらせ、拳を握り締める。一気に片足を踏み込んで腰をひねり、拳を振りかぶり――ここまで来て、相手がなにも反応できなかったら、すでにそれはほぼ1000%の確率で直撃すると、紫音の勘が悟っていた。

「ッ！」

刹那の瞬間。

風を切って繰り出される紫音の拳。

上手い事を弧を描いてアッパー気味に突きだされたそれは、未だ驚愕に目を見開いていた男の顎へと、迷いなく突き刺さった。ガゴンッ！ という爆発的な轟音と同時に、自分より数十キロは重いであろう男を軽々と斜め上へ吹き飛ばし、その体が地面に落下した頃、すでに勝負は決していた。

悲鳴一つない。完全に白目向いて気絶している男は、しばらく動くそぶりすらも見せなかった。

想像を遥か上へと行く現実には、思わずと言ったように静寂に包まれる観衆。ピクピク痙攣して動かない男を見据える紫音は、適当に頭を掻きつつ、

「真剣持ってくれば少しは勝算あったかもね、おじさん」

その一言を合図に、ドツと周りの人々が一斉に湧いた。

それこそ今までの沈黙が嘘だったかのような爆音つぶりである。

「うおおおお！？ あの小僧、たった一撃で決めやがったぞ！」

「せっかく3000ウィズも賭けたのに全部小僧側に持ってたかれたじゃねーか！」

「くそ！ 一体どんな晶術使ってたんだ！？」

どいつもこいつも多種様々な声だった。まったく、何が起こるかわからないのが勝負だというのに、そこまで驚かなくても。まあ、紫音のヒョロイ外見だけで判断すると確におかしくはないのだが。しかしこれでも紫音は美弦紀流の殺法を全て熟知し、美弦紀家現役当主だ（さすがに両親には頭が上らないが）。いくら世界が違うとはいえ、こんな公衆の面々で敗北するほどやわな鍛え方をしてきた訳ではない。

「さて、俺は引き継ぎやるけど、次は誰？」

今の戦闘だけで軽く13000ウイズは稼ぎすでにNPC金髪ウエーブをぎやふんと言わせる事は十分に可能なのだが、戦うだけで稼げると分かってしまったのだ。こんなところで自ら引いて折角のチャンスを見逃す訳にはいかない。ここは万屋として心を鬼にすべし、美弦紀紫音。

新たな大物の登場に、我こそはと名乗りを上げる観客達を流し見て、紫音は思った。これなら本日の稼ぎは最高潮だ、と。なんとなくこの人数。一人一人勝ち進んでいけばかなりの大金となるに間違いない事は確かだ。

新たな敵が観客の分から出てきたのを見据えつつ、美弦紀紫音の独壇場が始まった。

「……えっと、あの？ もう一回言ってくれませんか？」

「はい。ついさっき来店したお客様が最後のお部屋をご利用になっ

てしまい、部屋が全て埋まっています。申し訳ありませんが、他の店を当たってくださいますようお願いいたします」

言葉通りだった。

先程までこの店のすぐ外で派手にやらかし、普通に働いても5ヶ月は軽く掛りそうな大金を手に入れた紫音は、例のNPC染みている店員を見返してやろうと舞い戻ってきた訳のだが、物事はそう上手く運ぶものではないらしい。

満員。

つまりはそういう事。

紫音が稼ぎに稼いでいる最中、数名の団体客が来たらしく、余っていた最後の部屋にトドメを刺したのだ。しかも一ヶ月。一日で良いかとケチっていた紫音とは桁違いな長期間。もちろん後から来た紫音にはどうすることもできないのは見えていた。

最悪だった。たった数分遅れただけだというのに、この仕打ちはさすがにないだろう。

(……ふふ。うふふ。あれ、おかしいな。なんだか涙が出てくるよお姉ちゃん)

今度こそこのNPCもどきをぎゃふんと言わせるつもりだったのに、なぜこちらがカウンターを食らわなければならぬのか。明らかに喧嘩を売っている。神様もそうだが、この店員、明らかに紫音に対し喧嘩を売っていた。

しかしここで退いては万屋の名に廃る。最後の希望を込めて、紫音は尋ねた。

「……そうだ。向こうの希望する金額を出すから、代わりに部屋を譲っていただくというのは……だめ？」

「はい、申し訳ありませんお客様」

「そ、そこを何とか……」

「申し訳ありませんお客様」

最後の一言だけ怒気が籠っていたと感じたのは紫音だけだろうか？
思わず冷や汗がダラダラ流れてきた紫音は、はああ、と深い溜息

を一発。

ここまできたらもう諦めるしかないのだろう。そもそも紫音が最初にこの店に赴いていたとはいえ、先にお金を支払ったのは団体客さんの方なのだ。いくら今の紫音が大金を所持していたとしても、順番は順番。覆す事は不可能だ。それこそ紫音がどつかの大貴族なら話は変わるかもしれないが。

（ああ、くそ。また宿屋探しから始めなきゃならんのか……）
考えると思わず気が滅入ってしまう。

今いるこの一軒でさえ見つけるのに30分近くかかったというのに、また同じような事を始めなければならないのだ。それにいくら王都と言っても、一つの街にいくつもいくつも宿屋があるとは考えにくい。多くても3件ぐらいが限度だと思う。そんな現実を考えてしまうと、流石の美弦紀紫音も気が滅入るのは仕方のない事だった。しかしまあ、ここでいじけていたって話は進まない。まるでゾンビのように、よろよろと歩きながら、紫音は外へつながる木製のドアへ歩み寄った。

—— そんな時、女神が舞い降りた。

「あれ、シオン君？」

唐突に、響く声。

しかも紫音の名前が聞こえた気がしたのは、気のせいではないだろう。

だが、それは本来ありえないことだ。美弦紀紫音はことは違う世界の住人。こちらの世界へ来てからまだ間もないというのに、多くの人間に名前が知れ渡っている訳がないのだ。というか知れ渡っていたらただのホラーである。それこそ紫音直々に名前を教えた人物なんて、リイナ・グレーティア・セツティぐらいしか……、

……リイナ？

思い切って声のした方に振り向くと、そこには一人の少女が呆けた表情で佇んでいた。

長く綺麗な茶髪に透き通るようなライトブルーの瞳。白色を基調

とした、オレンジ色のラインが入っているスレンダーな服装。

リイナ・グレーティア・セツティその人だった。

「り、リイナちゃん？」

思わぬ再開に目を見張る紫音とリイナ。

お互い何だかんだ言って騎士団に追われる逃亡者の身である事から、流石にまた会おうとは思っていなかったのだ。ファミレスから軽く1時間弱。ただ赴くままに突き進んでいた紫音からして見れば、ある意味奇跡に等しい現象だった。

僅かに戸惑いながらこちらに歩み寄ってくるリイナに、思わず紫音は聞いていた。

「な、なんでここに？ 街の外に逃げるんじゃないっけ？」

以前の別れ際、確かに彼女はこの街から出ると言っていた。理由はおそらく騎士団からの逃亡だろうが、逃げているならさっさと街から出れば良いものを。ああ言っておきながらまだこの街にとどまっているリイナが不思議でたまらなかった。

「あー……まあ、街の外へは逃げるよ。ただ、それにもタイミングつてのがあるの」

「タイミング？」

「そう、タイミング」リイナはつまらなそうに、「君、分かるかな？ 今夜の面踊りの祭り」

「……あれだろ？ お面被って踊るやつ」

そ、と一文字でリイナは相槌を打つと、

「お祭りって言うだけだから、面踊りの最中は街人達の祭典。そういう日ぐらいいはね、少しでも物騒な感じを出さないために街の警備が完全になくなるのよ」

「そこを狙って外に出るって事？」

「そゆこと。街の門の警備までなくなるんだもの、そんなチャンス逃す訳にはいかないよ」

そうか、確かにそう考えれば未だリイナがこの街にいる理由にも説明がつく。面踊りの祭りの最中街の警備が全てなくなるのだとし

たら、彼女からしてみればここまでの絶好のチャンスはないのだから。

(……いいのう、ハッキリした目的があるって)

微妙に尊敬のまなざしをリイナに向けつつ、思う。

彼女が一体どんな理由で騎士団に追われているのかは分からないが、彼女は何らかの目的のために行動している。例え一人でも迷うことなく、今ある知識と実力を行使して何とか生き抜いているのだ。それに比べて紫音はというと、大雑把な目的しか定められておらず、今どうすればいいのかすら分かっていない。完全に行き当たりばったりで、所持する大金も賭けごとを見つけていなかったらこの手にはなかった。それこそ一度でも躓いたらそのまま地獄の底まで突きとされてもおかしくはないのだ。

明らかに紫音の頭の悪さが理解できた。いくら住む世界が違うとは言え、こうやって比べてしまうとこれからが思いやられてしまう。「……そういうシオン君こそ、ここで何してたの？ 部屋取るんじゃないの？」

そう言いながら少し離れたカウンターに視線を向けるリイナだが、残念ながらその部屋を取れない理由がちゃんとあるのだ。いや、紫音の自業自得ではあるが。

とりあえずファミレスでリイナと別れた時以降の事を簡潔にまとめながら説明し、もちろん宿屋に泊れない理由も説明する。自分で説明しといて何だが、なんだか相当自分が間抜けな気がしてきた。いや、そんなはずはない。悪いのは全部あの女性店員だ。俺は何も悪くないんだ、と何とかポジティブに考えてみるが、どうも意味がないと思うのは紫音の気のせいであってほしい。

全て話し終えるまで、リイナは黙って聞いていてくれた。こんな時、目の前の少女が話の通じる人でよかったと思う。もしこれが姉の美弦紀彼方だったら、あのDSな性格から大爆笑して紫音の陥れたに違いない。

が、

「……………ぷっ」

……前言撤回。

この娘、明らかに笑っていた。本人はおそらく必死に堪えているのだろうが、確実に頬が引きつっている。一瞬でも信じた俺がバカだった。

「ぷ、くく……………お、お金稼いでる最中に部屋埋まって追い返されるとか……………」

「わ、笑うなよ」

「く、あ、あははーっ！」

「笑うなよ！　そうだよ、自分でも間抜けだとは思うよ予約ぐらいしておけばよかったと思うよでももう過ぎた事じゃん覆せないじゃんだから笑わないで俺のガラスのハートが砕け散るーっ！」

頭を抱え、ぐあー！　という感じで絶叫してみる紫音だが、もちろんそんなもので目の前の少女が笑いをこらえてくれるはずもない正直なところ、こんなところでツボに入るのはやめてほしかった。約数分後、ようやく笑いきったのか、リイナが少し落ち着いてきた様子で息を吐いた。つか遅いよ。とつくのとうに俺のハート砕け散ってるよ。

「ふう……………いや、ごめんね。改めて君の頭の悪さを痛感したから、つい」

「……………あい。紫音君はもういっぱいいいっぱいです」

もう本当にありがとうございました。

「で？　シオン君、これからどうするの？　まさか別の宿屋探そうとか、そんなクチ？」

「……………悪いのかよ」

「いや、別に悪くはないけどさ」リイナは視線を虚空へ彷徨わせつつ、「さつきも言ったけど、今日この街でお祭りあるじゃない？

しかも面踊りっていったらそれなりに有名な祭り。他の街や村からも相当な量の観光者とか来るの。そこまで分かる？」

「うん」

紫音の相槌にリイナは頷くと、なぜだか苦笑を浮かべつつ口を開いた。あ、なんか嫌な予感。

「つまりね、それだけ人が多くなれば、同時に宿屋の客もバンバン増える。なんたって、街に来る人達も止まる場所がないんだから」

「……それってさ、つまり」

「うん」彼女の顔面に浮かぶ恐ろしいほどの笑顔。「今更他の宿屋行っても、空き部屋なんてほとんどないと思うよ」

……………。

なぜだろう、紫音の脳内では鐘の音が鳴り響いていた。それこそ彼の行動を虚しく全否定するかのように、何度も何度も何度も。

（あ、あれ？ 目から汗が……）

おそらく顔面崩壊のお知らせ。

一体あの賭けごとでの自分の苦労や、NPC金髪ウェーブとの言葉の応酬はなんだったのか。なんというかもう、ここまで不運だと笑えてくる。もし目の前に神様なんて野郎が現れたら、紫音は一寸の迷いもなく殴りかかっているだろう。

多少なりとも気分転換のつもりで楽しみにしていた面踊りの祭りのせいで、なぜか不幸のどん底へ叩き落とされる美弦紀紫音。多くの人々のせいで宿屋はすべて満席、奇跡的に巡り合った空き部屋も紫音の自業自得で手の内から逃してしまった。つまりこれは、人生初、野宿生活の、はじ、ま、り……。

一言で結論を纏めるとだ。

もう本当にありがとうございま（略）。

（けどまあ、仕方ないわ……。別に野宿して死ぬわけじゃあるまいし、食料だけ確保してなんとかするしか……）

食料については問題はないだろう。確かにコンビニみたいなのころは一ヶ所もないが、いざとなったら食材をそのまま食べばなんとかなる。無論お金は大量にある。入手自体困難ではない事は確かだ。それに、紫音は単身で戦争のど真ん中に乗り込み、一週間生き残った末捕まっていた捕虜たちを助けた事のある一流万屋だ。こうい

うサバイバルにはある程度慣れていた。

が、一番の問題は、元の世界には存在しない騎士、つまり王国騎士団の連中である。リイナの話からして今晚は大丈夫だろうが、それまでやそれからが大変だ。いつも通り爆睡して、次の朝目覚めると牢獄の中、なんてのは正直勘弁してほしい。

しかし、何とかしなければならぬ。ここで何とかできてこそ万屋だ、とこじつけてみる。大体こうなってしまったのも、神様なんていう馬鹿野郎のせいもあるが、半分以上は紫音の自業自得でもある。自らの問題は、自分自身で解決するものだ。

深いため息を吐きながら、身を翻す紫音。とりあえず他の宿屋を捜して、おそらく無駄だろうが部屋が空いていないか聞いてみるつもりだ。それで全て完敗だったら、野宿できそうな丁度いい場所を探すしかないだろう。

「あれ、もしかして君、本気で宿屋探すつもり？」

背後からのリイナの声。

「仕方ないだろ。他にどうすることもできないんだから」

ぶっきらぶうに返す紫音の言葉に、彼女は苦笑するばかりだった。まあ、リイナもなんとなく分かっているのだろう。この先紫音が確実に野宿ルートへ一直線してしまうだろう未来予想図が。

だがそんな時、奇跡が起きた。

「あー……なんなら、私の部屋、入れたげようか？」

ピタリ、と。

店を出て行こうとした紫音の動きが凍る。

「……なんですと？」

「いや、一応私、昨日からこの一部屋取ってあつてさ」リイナはカウンターの金髪店員に軽く視線を送りつつ、「あっちで相部屋登録させ済ませば一部屋に二人泊まることぐらいできるよ。その分狭くはなるけど、野宿よりかは……」

後半の言葉は、すでに聞こえていなかった。

その時紫音の脳内ビジョンでは、目の前の少女が物凄く輝いて見

えた。それこそ天使レベルである。天使のごとき神々しさ！ いやむしろ、紫音をこんな謎な世界へ落とした理不尽な神様なんかよりも数百倍の女神っぷり！ 神様仏様リイナ様！

歓喜に震える紫音は、何とか理性を保ちつつ口を開いていた。

「い、いいの？」

対しリイナはつまらなそうに、

「悪かったらこんなこと言わないよ。私こっぴどくの気にしないし。それに君には結構大きな借り作っちゃってるからね」

「で、でもそれは、ご飯奢ってもらって……」

「あー、まあ、それで君が返してもらった気分なら良いけど。……でも、自分を助けてくれた人が目の前で困っていると、それはそれで放っておけないわよ、個人的に」

悪びれた様子もなく、当然の事かのように言い放つ少女、

なんて良い子なんだ。もう駄目、俺泣いちゃう。だって男の子だもん（意味不明）。

「……で、どうするの？ 別にいいなら無理は言わないけど、どうしても泊る場所がないなら、部屋の半分使っても良いよ？」

答えは決まっていた。即答である。

「……ありがとうございます」

自然と彼女の両手を握り、上下に振る紫音。リイナがちょっと困った顔をしていた気がするが気にしない。とりあえず今は、少女への感謝の気持ちでいっぱいだった。

なんというか、人との再会がここまで嬉しいものだ、初めて知った美弦紀紫音である。

第6話：俺のなんとらテクニック（前書き）

すみません、更新遅れました！
たぶん次も遅くなりそうです。

詳しくは活動報告に書いてありますので、そちらを一回ご覧ください
な。

第6話：俺のなんとらテクニク

リイナの後ろを着いていつて辿り着いたのは、ごく普通の一人部屋だった。

と言つても、一人部屋と思わせる雰囲気が出てるのは片隅に鎮座するシングルベットだけで、部屋自体の大きさはそれなりにスペースがあつた。本来ならここにユニットバス的な要素の個室があつたりするものだが、どうもこちらの世界では風呂と言う概念が微塵もないらしく（リイナ曰く水浴びが主流らしい）。そのためもあつてか、一人部屋にしてはなかなかの大きさだ。二人未満一人以上、と言つたところか。

漂う木材の匂いの中、部屋の中を見渡してもこれといつて珍しいものはない。歯車かなんかで動いているのか、壁につるされた安っぽい時計に、お客用のクローゼット。たぶん中にはハンガー的な何かがいっぱい入ってるに違いない。他あるとすればごくシンプルな木製のテーブルに、ベットの傍らに置かれた……光を灯すためだろうか？ 小さなロウソクの束と、それを立てておけるセットが転がっていた。特に変わったものがない、実に異世界らしい部屋である。それにしても、さすが今夜中には街の外へ逃げると言っていただけの事はある。私物がなにも置いていない。あるとすれば、何が入ってるのかは未知の世界だがやたら大きい鞆ぐらい。先に言つておくが、決してつまらないだなんて思つてない。ええ、思つてないとも。人生初！ 同年代の女の子の部屋へ突入！ だなんていかがわしい考え一切持つてないから。うん、持つてないですとも。

……。

「……やべ、鞆の中気になる。」

「というのもジョークでして！ まさかこのごく健全な一般高校生の、パソコンの検索履歴は今までもこれからもクリーンな紫苑君が、そんなどこぞのあぶない青春真っ盛りな男子高校生みたいな事考える訳ないじゃないですカッ！」

「……シオン君ってさ、何言ってるか知らないけど、独り言激しいよね」

「おっと失礼」

「危ない危ない、姉の時みたくなまた口に出てしまっていたようだ。」

「こんな危ない思考回路がただ漏れになってしまったら開始二秒で変態確定じゃないか美弦紀紫音。」

「少し怪訝な視線で見てるリイナを華麗にスルーしつつ、適当な場所に腰を下ろす。うは、ギシって鳴った。我が家のボロアパートを思い出す。」

「対しリイナは紫音の正面になるように、白いふかふかベットに腰を下ろした。シーツのしわの寄り方を見るに、実に気持ちよさそうだ。あとで隙を見計らってダイブしよう。うんそうしよう。」

「……やばい、リイナに声掛けられてからテンションおかしいぞ俺。自重しないと。」

「……それにしてもさあ、君って相当度胸ある人種よね」

「は？ なんで？」

「確かに幽霊とか妖怪とか、オカルト方面には強いが。」

「なんでって……」リイナは少し呆れた表情で、「君、自分の立場分かってる？」

「俺の立場っていったら……そりやまあ、お尋ね者だよな」

「そ、お尋ね者。というか、私助けるためとはいえ暴力振るっちゃったんだからかなりのレベルね。……そんな、普通なら指名手配でもされて、今頃街の人間全てが敵にまわっちゃうような立場なのよ？」

指名手配、という言葉に思わず冷や汗が流れそうになった。俗に言う、街中に貼り紙がされて、捕まえた方には賞金ナンタラ\$！とかいうアレと同じである。

「そんな危ない状態だったのに……よく賭けごとなんかに参加してお金かき集めて来るわね。今は祭りの前だから騎士団の連中も目立った事はできないから良いけど、私だったらそんな目立つ事絶対にできないよ」

「はは……まあ、いいじゃん。結果オーライだよ、結果オーライ」

「はあ、そんなものかな……」

どうも納得のいかなそうに首をひねっているリイナだが、実際そうなのだから仕方ない。

……それか、もしかすると紫音の方こそが異常なのかもしれない。まったく思考の追いつかないうちに訳のわからないところへ落とされて、気がついたら追われる身。普通の人なら訳のわからない理不尽な現実には、頭を抱えて蹲っているのが正解なのだろうか。

その辺、自意識過剰ではないが、リイナの言うとおり紫音は度胸のありすぎる人間なのかもしれない。長きにわたる美弦紀流の修行と、万屋として生き抜いてきた数年。そして、大好きだった姉との突然の別れ。これだけの事があれば、大概の事には平気で耐えられるのかもしれない。

(……そういや、捕虜助けに戦争のと真ん中へ突っ込んだ時も似たような事考えたっけ)

あの時は結局、一週間ほどの持久戦が続いたが、さすがに紫音も痺れを切らして群がる兵隊の中へ一人立ち向かっていった。銃弾を何発も貰い、それでもようやく辿り着いた捕虜たちの収容所。そこで見た光景は今でも鮮明に覚えている。

散らばる肉片。

転がる眼球。

震える指先。

お互いがお互いを繋ぐ、ピンクや黄色をした糸のような何か。

始めてみた時は、ああ、間に合わなかった捕虜たちだな、と思っ
たが、それだけだった。吐き気を催す訳でもなく、気持ち悪いとも
思わず、ただ平然と一礼し、まだ生き残っていた捕虜たちを助ける
作業に入っていた。

つまりは、そういう事。それまでに『本当の絶望』を知ってしま
っていた紫音にとつては、その程度の光景、何でもなかったのだ。
身ぶるいすることも、悲愴する事も、恐怖することも、できなかつ
た。人間とはここまで強く……いや、弱くなるものだ、今思えば
何となく理解する事が出来た。

「……シオン君？ どうしたの？」

突然黙りだした紫音を不思議に思ったのが、リイナが訪ねてきた。
そこで抜け出す思考の泥沼。自分のこういう考えたらどこまでも考
えてしまう性格にはすでに慣れたものだが。

「いや、何でもないよ」

気を取り直すように、軽く首を振って頬をはたく。今更こんな事
考えたところでどうにかなる訳ではない。

と、そんな風に考えを別の方向へ持つて行こうとした途端、それ
が災いしたのか。

（……風呂、入りたい）

よくよく思えば、ここ数日愛しのボロアパートへ一度も返ってい
ないのだ。つまり寝てもしないし風呂なんざ持ったの他。しかもこ
っちの世界に落とされてからは何度か荒事もあって、それなりに汗
もかいた。この考えは人間として当たり前だと思う。

（だがしかし、なあ……）

さっきも言ったが、この世界には風呂と言う概念が存在しないら
しい。なんとなく会話の流れで水浴び的な要素の物ならあるらしい
が、さて、どうやってそこに辿り着けようか。

しばし考えた紫音は、

「えっと、リイナ。風呂……じゃない、水浴びと違って、どこでで
きんの？ この宿」

我ながらいい感じに聞けたと思う。

リイナは、ああ、と一度相槌を打つと、口を開いた。

「一階だよ。店員さんいるカウンターあるでしょ？ その傍らに男女分けられた扉あるから」

なるほど、把握した。

うんうん頷きつつ、とりあえず頭の中は汗を流したいことではいた。水浴びでも何でもいい。湯船につかれなくてもいいから、とにかくこの汗をなんとかせねば。

そう考えつつ部屋を出て行こうとしたところで、ふとどうでもいい事に気がついた。

（……そういや、リイナに声掛けられた時、あいつあの辺から歩いてきたよな）

あの辺とはつまり、カウンターの傍ら。

（え？ それってつまり、リイナは風呂上がり……）

ババツ！ というんでもない速さでリイナの方に振り返る紫苑。対する彼女は訳が分からずキョトンとしているが、そんな彼女を見ている内に紫音の妄言（ゲフンゲフン）想像力が彼の脳内を一気に駆り立たせる。

（そう、か。そうだったのか。やたらあの白い肌に汚れついてないなーとか少し顔火照ってなくね？ って思ってたけど、そういうことだったのか！ あ、やばい。仲良い女の子が全裸でいる姿想像するとこんなにやばいもんなんだねお姉ちゃん。紫苑新しい発見です。それも風呂って。いや正確には水浴びですが。てゅーか顔火照ってるんだからお湯もあるのか。まあそんな事はどうでもいい。あの白い肌にね、飛び散る水滴が滴りつき、胸は残念なものながらもその流麗な曲線を軽やかにすべり落ちていく様を想像してみる。湧き立つだろ何か湧き立つだろ！ いや別に俺ひんぬーが好きって訳じゃないからね口リコンじゃないからね。むしろどっちかて言うとお姉ちゃんみたいなのの方が好みなんです。……あれ？ じゃあなんでお姉ちゃんのバスタオル姿見ても俺のゾウさんパオーンし

なかつたんだろ。あれ？)

「……だからさ、何言ってるか分かんないけど、人の顔見ながら独り言はやめてほしいんだけど」

「おっと失礼」

どうもこの性格は一度強制しないといけないらしい。

「おお……」

浴室に入って、思わず感嘆の声を漏らしてしまった。

時間が時間なせいで人影は見渡す限り見つからないが、またそれが良い。2LDKの部屋を3つぐらい寄せ集めたような広さで、天井を映すつるつるした地面は隅から隅まで清掃が行きとどいている。そして、そんな空間の3分の一を占めているのは巨大な湯船。というか浴槽。おそらく水浴びなんて言うんだから、あの山住にされている木製のバケツを使ってバシャバシャしろって事なんだろう。

とりま早く汗を流したい。腰に巻き付けた白いタオルをなびかせながら、ピョンピョン跳ねつつ浴槽の近くへ。バケツを一つ拾い上げつつ、ふと思った。

(……浸かっちゃ駄目なのかな)

それである。

仮に紫音がユニットバス主流の外国人ならこれで満足できただろうが、悔しい事に紫音は立派な日本人である。昔からたっぷりのお

湯に体をつからせてきた日本人絶賛満喫中である。自分はまっぴでここ風呂場、しかも目の前に巨大な浴槽。まるで温泉じゃないか。日本人としては、こういう場合入らない訳にはいかない気がしてならない。

（ぬううう……しかし、『水浴び』って言ってるぐらいだしなあ。浸かるのはやっぱり厳禁なのかしら）

事実、うつすらと湯気を浮かばせる水面を凝視しても、人間の垢らしきものがほとんど浮かび上がっていない。まさかついさっき新しいお湯に換えた訳じゃあるまいし、たぶん紫音の予感は的中してるのだろう。

（まったくこれだから異世界人と言うのは……。これの気持ちよさがわかつとらんのか）

ぐちぐち心の中で呟きつつも、まあルールなのだから仕方ない。もう一つ余分にバケツを掴むと、ひっくり返して椅子代わりにしつつ、お湯を汲んで体にぶちまけた。

「——はあ……」

普通に気持ち良かったのがなんか悔しい。

しかしそれも仕方がない。ここ数日、紫音は休む間もなく動き回っていたのだ。久々の休息。いくら美弦紀流で鍛えているとはいえ、限界と言うのもあるのだ。このお湯一杯だけでも、紫音にとってはかなりのスタミナ回復であった。

（うはあ……俺随分疲れてたんだなあ。すっげえ気持ちいいんですけど）

軽くボーっとしてみる。あ、やべ。眠くなってくるぞこれ。勘弁してくれ。俺のお爺ちゃんは風呂場の中で爆睡して、気付いたら溺れて昇天したんだぞ（嘘）。

でも、こうやってボーっとしてると、今までの事をツラツラと思いだしてくる。

もう少して自宅、というところで謎の穴を発見し、中に引きずり込まれた事。

相当勢いよく地面に叩きつけられたのに、なぜか痛かったのはその時だけで骨などにまったく異常がなかった事。

リイナを連れて路地の中を逃げ回った事。

そんな彼女を守って騎士団の連中を吹っ飛ばした事。

お礼とか言ってリイナがごはんを奢ってくれた事。

屋台やってたおじさんからお面を一つ買った事。

NPC金髪ウェーブが非常にうざかった事。

賭けごとに参加して大儲けした事。

そして、再びリイナに助けられてしまった事。

こうやって振り返るだけでも、今日一日でかなり多くの事があった。人生いろいろあるモノだが、いやはや、ここまであり過ぎると困ったものである。

何となく分かる。おそらくこれまでのような事は……いや、今まで以上のことだってあり得る。紫音の度肝を抜かすようなとんでもイベントは幾度となく訪れるのだらう。なんたってここは異世界。今まで当たり前だと思っていた常識が通じない場所なのだ。何が起こったって不思議ではない。

でも、それで諦めては美弦紀の名に廃る。いくら周りが未知の世界だろうが、必ず元の世界へ帰る。それこそが紫音の望む最大の目的なのだ。

異世界トリップ物のマンガでは、よく主人公は謎の学園に落とされて、そのツンデレヒロインと仲良くなつて、実は主人公最強で、気づいたら騎士団の剣術指導官辺りの地位にいて、最後は結局元の世界へは帰らず、異世界に残ってヒロインときやつきゃうふふするというものだ。

紫苑もそういう境遇に陥ってしまえば割りきれたのだが、だが現実、紫音はこの世界では悪者らしいし、最強でもない。剣術指導官なんて夢のまた夢である。そう考えると不安要素が多すぎた。

だが不安要素が多いからこそ、紫音は本来の目的を忘れずにいられるのかもしれない。自分を支えるために。それこそが唯一の支え

かのように。余計な事も起きず、リイナというヒロインらしき人間にはあったが別にフラグも立ててないし、ないより自分が異世界人だという事を教えていない。こうやって秘密を間に置けば、親密な関係になるということはまずないのだ。こうまでしておけば、変な迷いも生じず目的を疎かにすることは決してないだろう。

(……結局何が言いたいんだ俺は)

自分でも考えている事がよく分らない。これも全て長きにわたる疲労のせいかな。うん、そういう事にしておこう。

(ああ、くそ。眠い。別にいいかな、ここで軽く仮眠とつても……) やばい、本気で眠くなってきた。視界が段々ぼやついてくる。

駄目だとは分かっているが、このままでは確実に睡魔の餌食だろう。だが、別にいいかな、という考えが後を追って脳裏をよぎる。別に他の客は誰もいないし、ほんの一時程度なら別にいいかも、と。

瞼が少しずつ、少しずつ下がっていく。

ああ、これはもう駄目だ。寝るしかない。レッツスリープ。ほんの数時間だ。数時間犠牲にして体力が回復するのならば、それは十分すぎる代償だ。

(お姉ちゃん、おやすみなさ——)

……と、思っていた時期が僕にもありました。

ガララ、と開く出入り口のドア。そこから入ってきたのは清掃員らしきガツチリとした男だった。

清掃員、と分かるのはその手に緑色のブラシがついたモップを持っていたからだ。それと青いバケツ。胸の中心辺りまではだけた青白いツナギを着込んでいる辺り間違いないだろう。

顔はまあ、ブサイクでもイケメンでもない中間な感じ。全身の筋肉はなかなか隆起しながらも、無駄がない。多少体つきの良い、中年の男と言った感じだろうか。

思わず振り返った紫音の視線が、真っ向からぶつかる。瞬間、まるでとんでもない物を見つけたかのように中年の男はモップとバケツを地面に落してしまった。なんだろう、俺の顔に何か付いてる？ と不思議に思ったが、そんな考えは男の次の言葉で軽く吹き飛ばす事になってしまった。

「……いや、暑い。今日は暑いねー。その少年、君もそう思わないかい？」

男の豹変ぶりに思わずキョトンとしてしまった紫音だが、万屋モードですぐに平常を取り戻す。

「そ、そうっすね」

「ところで君、名前はなんて言うんだい？」

「え、紫音、です。美弦紀紫音です」

「ふむ、シオン君か。良い名前じゃないか。よし、これからはシーちゃんだ」

「なんで!？」

「クフフ、良いねエ。ますます気に入ったよ」

とか言いながら浴室に完全に入り込み、後ろ手にドアを閉めて、鍵も閉める。

って、あれ？　なんで鍵も閉めるの？　あれ？

「良いね、良いね良いねエ。顔は実に引き締まり、体つきも見た目年齢にしては良いつき方してるじゃないか。昔の俺にそっくりだ。

良いよ、実に良いねエ」

「は、はあ……」

相槌を打ちつつも、紫音の中ではすでにこの男は危険人物に分類されていた。なぜだか分からないがとても危ない気配を持っている。本当になぜかは分からない。しかし危険だ。今まで感じてきた気配とはまた種類が違う、気配。

「はは、そう警戒する事はないさ。別に怪しい人物じゃない。ただ君のその姿勢好を褒め称えているだけさ」

「そ、そりゃどうも……」

と言いつつ一步の後ずさり。

しかし同時に一步近寄ってくるツナギの男。

「フフツ、たまらないねエ。君の出すのその雰囲気と言い、まさに新感覚だ」

ソワリ、と。

とんでもないほどの悪寒が紫音の背筋を走り抜ける。やばいぞ、なんかとてつもなくやばいぞ。

しかもなんだあれは。先程からコメントを控えていたが、丁度男の股間の部分——ツナギの一部がやたら盛り上がっているのは気のせいだろうか？

（だ、大体なんだあの大きさ。俺のじゃ比にならんぞ。エクスカリバーなんて言葉じゃ表現できないってアレ！）

だが男には、そんな紫音の思考など分かるはずもなく。

「という訳で、一発……………」
事態は急変する。

「やらないか？」

刹那、男の姿はそこから消えていた。そして気付いた時、すでに紫音の目の前にいた。

美弦紀流ですら反応を一瞬遅らせてしまようなスピードで。

（は、速ッ……！？）

何の事かも分からず状況に流されるしかなかった紫音は、抗う術もなく男のぶつとい腕によってガツチリホールド。

「うっん、良いねえ。やはり匂いも最高だあ。ほら、俺が最高の気分らせてやるぜ」

ケツに違和感。明らかに触られている。しかもご丁寧に、バスタオルの下に手をすべり込ませてだ。

そこでようやく紫音の思考が元に戻った。一気に冷や汗が流れだしてくる。まずいぞ、何か知らないがこのままじっとしていたら確

実に掘り返される！

「ちょ、待ってください……！？俺別にそっちの気はありませんから！」

「ハハッ、大丈夫さ。最初は嫌でも時期に気持ち良くなるさ」

「そこが問題なんですけど！？て、てゆーかケツから手を離してください、ッ、離せ！」

「気にするな。俺はノンケでも喰っちまう漢だぜ」

「アーツ……！」

（……って、場の雰囲気の流れされてる場合じゃねえ！何だよこの阿。モドキ！やばいぞ、異世界の男にはまじでこういう奴いるのかよ！）

紫音の経験上、現実世界にはホモやゲイがいたとしても、ここまですーぷんな野郎はいなかった。それこそ物語の中だけだと思ってたし、それが当たり前だった。

しかしこれが異世界だということのか。異世界の男にはここまでオーブンな野郎もいるという事か。恐るべし異世界クオリティ。恐るべし異世界のヲトコ！

と、考えている内も、男の大きな手は紫音のケツを全力でまさぐり、そしてやがて、その指が穴に触れ――、

「や、やめろおおおおおおおおおううううあああッ……！」

それを合図にしてたかのように、紫音の中で何かの枷が外れ、意識が一気に消えていくのが分かった。

ただ一つ理解できる事は、意識が遠退く直前、つい全力の力で男の体をぶん投げてしまった事だ。

あれから数分、紫音はふらついた足取りでようやくリィナの部屋に戻る事が出来た。

「あ、おかえり」

「……………」

「？ どうしたの？」

「……………変態に、会った」

「？」

訳のわからなそうな様子で首を傾げるリィナだが、別に分かってもらいたくはない。こんな健全そうな女の子に、男にはああいう人種もいるなんて知識教えてはいけない気がする。それこそクソ。ソテ。ニツクなんてもつての外だ。

……ちなみに言っておくが、別に紫音は掘られてはいない。気がついたら浴室の中一人突っ立っていて、５メートルぐらい離れたところにツナギの男が気絶してぶっ倒れていた。おそらくあまりの衝撃的な出来事に、正気が飛んで完全に本気ではこってしまったのか。なんだか申し訳ないが、あのままじっとしていたら紫音の童貞を見ず知らずの男に奪われるところだったのだ。仕方なかるう。

にしても問題は、疲れが余計に溜まったことだ。確実に三割ぐらい増してやがる。それも全てあの変態野郎のせいだ。まあ、すでに引導をくれてやった後なので別に気にしてはいないが。

（うへえ、なんか一気にだるくなった気がする）

カーペットの上で仰向けにぶっ倒れ、ぼけーとする紫苑。体をこつやって動かさずにいると、全身の疲労が手に取るように理解する事が出来た。

「……シオン君、疲れてるみたいだけど大丈夫？」

こんな時でも心配してくれるリイナちゃんマジ天使。

何となくリイナの方に首を傾けると、紫音の傍らにしゃがみこんでこちらを覗きこんでくる娘が一人。

しかもそれなりに距離が近いので、彼女の整った顔立ちや綺麗なライトブルーの瞳がハッキリと見える訳で、

（やべ、可愛い……）

ついヲトコゴコロがときめいてしまったのは内緒である。

「だ、大丈夫」

実際大丈夫ではないのだが、こんな可愛い子に心配されてしまったのは男のプライドが弱音を吐く事を許してくれない。とりあえず視線だけでも外そうと紫音は少し下へと視線を持ってきつつ、

気付いてしまった。

（……ぶっ）

別に忘れていた訳ではないのだが、リイナの服装は上半身は袖なしのノースリーブで、ちょっとブラウスみたいな雰囲気もある変わった服装だ。そしてそれに合わせたかのように、下はミニスカートっぽくなっているのだが、

そこがミソだった。

白色のニーソックスから根元にかけて伸びる白い肌の絶対領域。

それに挟まれるようにして威風堂々と君臨するのは、男なら誰でも一度は憧れた事のある絶対無敵の奇跡空間。

どうでもいいけど色は純白だ。

（や、やばい。鼻血出る……！）

鼻血というのはいつドバツと出てくるか分からないのが危険なので、とりあえず指で摘む。そして上をむく。あんな夢のような空間、いつまでも凝視してたら昇天してしまう。

「ど、どうしたの？　ほんと大丈夫？」

言いつつさらに顔を覗かせてくるリイナ。

やべえっす。パネエっす。正直勘弁してほしいっす。

「だ、大丈夫ですよー？ ほ、ほら、紫苑君は今日もテンションマックス！ だけど毎日遊びすぎたせいで疲労が溜まっているのかな！ テヘッ」

女性経験にはかなり疎い紫音にとって、こういうイベントはただの拷問でしかない。思わずテンパって口調がおかしくなってしまう。「疲労そんなに溜まってるの？ 休んだ方が良いんじゃない？」

「そ、そうかしら」
適当に返しつつさり気無く視線を外す。向こうはどうも思っていないらしいが、ここまで顔が近いと正直死にそうなぐらい恥ずかしい純情少年な美弦紀紫音である。

リイナは白いふかふかベットを指さしながら言った。

「ベット貸してあげるし、一度休んだら？ 私がこの部屋出るときに起こしてあげるから」

「い、いいの？」

「別に構わないよ。別に私、眠くないし」

またも彼女の優しさに涙腺が緩む。まったく、なんて優しい娘なんだこいつは。恋人一人いないのが不思議なくらいである。

とにかく今の紫音にその申し出を断る理由はない。溜まりまくった疲労を少しでも回復するために、なにより現段階の拷問から抜け出すためにも今はこれを受けるのが正しいのだろう。

「……じゃあ、お言葉に甘えるよ」

のっそりと体を起こし、ベットまで歩み寄った紫音は勢いよくダイブ。思ってた通りベットは柔らかく、紫音の体がすっぽりと中に沈み込んだ。久々のふかふか感に、自分でも驚くぐらいのスピードで眠気が襲ってくる。

背後でリイナがカーベットのの上に座り込むのが、布擦れの音で何となく分かった。

しばしの沈黙。

外からは喧騒が聞こえてくるが、この空間だけは小さな沈黙。もうちょいで意識なくなるかも、というところで、つい紫音は口

を開いていた。自分でも分からないくらい、あっさりと。

「リイナちゃん」

「ん？」

「……なんで、君みたいな優しい子が、追われてるの？」

帰ってきた答えは——もちろんなかった。

まあ、それもそうだ。いくら逃亡者同士で仲良くなったからって、お互いのプライベートな事情をペラペラ話せるほど深い関係ではない。実質紫苑だって、数多くの嘘や隠し事を彼女にはついているのだから。

だから、言及はしない。向こうが嫌なら無理に聞きだす必要性も感じられない。複雑な事に、これが人間関係というもののなだから。
（おやすみ……）

言葉はないけど、心の中で小さく挨拶。

紫音の意識が完全に暗闇に堕ちて行ったのは、それからすぐの事だった。

第7話：冴えない孤独感

死んだ。

みんな死んだ。大勢死んだ。

確かに繋いでいたはずの母の手はもう感じられない。父親はどこへ行ったのかも分からない。感覚がおかしい。何もない。何も感じられない。暗くて、どこまでも深く、怖い。ただ単に怖い。何も感じられないのがこんなにも怖い。恐怖。瞼を開けても閉じててもそこは真っ暗。目がズキズキする。頭がズキズキする。体中がぬめぬめして、気持ち悪い。死にたい。自分も死にたい。自分こそ死ねばいい。そうなれば楽になるのに。殺してよ。誰か殺してよ。誰か殺してよ。誰か、僕を、殺してよ。殺して殺して殺して……。

——神様は残酷だった。そんな小さな願いすら叶えてくれなかった。

全てが終わった日曜日。

僕はなぜか、生き残った——。

「……………っ」

どこことなく、目が覚めた。

しかし寝心地が良かったとは到底言えない。起きたばかりなのに呼吸が荒く、全身から大量の汗が噴き出している。かなり夢心地が悪かったと自信を持って言える。

いつもの発作だ。

いつもと言っても週に一度ぐらいのペースではあるが、小さい頃の『あの時』からずっと続いてるとなると、やはりかなりの回数これは起きていると言えるだろう。しかしそれだけの回数をこなしているにも関わらず、紫音はどうしても慣れる事が出来ない。慣れる訳がない。過去最大のトラウマとも言えるあんな無慈悲な現実、いくら夢で魅せられても慣れるなんて不可能な事だ。今でも、素直に『怖い』と思えるほど、紫音は恐怖している。この発作に。あのトラウマに。過去の現実。

（大体、こんな時に発生しなくてもいいのにさ……）

未だ眠気眼の瞼を軽く擦りつつ、上半身だけ起こして紫音は首を動かす。開け放たれた部屋の窓。外はすでに夜空に包まれていたが、そこに広がる風景を見て何となく落胆してしまった。

（夢な訳ないよな……。フツ、分かってたさ。夢落ちなんてベタなパターン起きるはずないことぐらい、分かってたさ。でも少しぐらい期待しても良いと思わない？ ねえ？）

と言っても、目覚めた瞬間に、寝てるベットがいつもと違うベットだったから何となく結果は分かっていたが。

べ、別に負け惜しみなんかじゃないんだからね！ 勘違いしないでよねっ！

（……………とかやつてる場合じゃなくて。リイナちゃんは——）
「あ、起きた？」

ふと声のした方向に振り向くと、そこにはありがたくリイナ・グレイティア・セツティがいた。

テーブルの隅に背中を預け、本でも読んでいたのか。文庫本サイズの本が一冊。紫音の起床に気付いてその本はすでに閉ざされているが。

「嫌な夢でも見た？ 凄くうなされてたけど……」

うなされてたのか俺。なんか恥ずかしいぞ。

つい返答に困ってしまったが、ここは軽やかに「何でもないよ」

と一言スルー。無駄に心配されては逆に気まずいし、何よりこの夢の内容を他人に話せるかと問われたら、答えはNOに決まっている。それに夢心地は悪かったが、実際睡眠は取れたので体力はそれに回復してるはず。今は寝起きなのでちよつと力が入り難いが、時間が経てば時機に筋力も元に戻ってくるだろう。本来の目的は果たせたので無駄な事を言う必要は何もないのだ。

それよりも、さっきから気になっていた事を紫音は尋ねてみる事にした。

「ねえねえ、それなに？」

紫音の指先にはリイナの持つ閉じられた文庫サイズの本。表紙は薄緑色をしたシンプルな作りで、黒色の奇怪な線で蛇みたいにウネウネした文字がど真ん中に記されていた。というか、あれは表紙というより、本来あるはずの表紙を取っ払ったシンプル形態な気がしてならない。それこそまるで、何を読んでいるのかクラスメイトに知られたくない引つ込み思案なオタク少年の如く。

「何って……本？」

キョトンとした様子で返してくるリイナだが、うん、この返答は怪しい。実に怪しい。紫音の脳内センサーがビンビン謎の電波を受信している。

紫音は思い切って核心を突いてみる事にした。

「いや、それは分かってるけど。何の本なの？」
ビクッ、と。

その言葉を聞いた瞬間、リイナの体が一瞬震えたのを紫音は見逃さなかった。

これは確実だ。おそらく他人には見せられないような、とんでも内容が記された小説の類に違いない。それこそ人間の想像力を限界まで駆り立たせるようなエー（略）……じゃなくて、ギャルゲでいういつも強気な生徒会長のヒロインが実は恋愛小説を愛読してましたというギャップ萌えの原理が成り立つという可能性が！

「え、えつと……」とかぶつぶつ呟きながら視線をそらすリイナを見て、紫音の顔面にいやらしい笑みが浮かび上がった。あ、やべ、止めらんねえ。

「フヒヒ……おいおいリイナちゃん、我慢してねーで喋った方が身のためですぜ。おじさんこういうのはとっても気になっちゃうんですよ」

「ちよ、なんでこんなくだらない事で！？ てゆーかシオン君、その気持ち悪い笑顔やめてよ！」

と言われてもこの妄想力を抑制できるのは超エリート学園に通っている学年第一位の超エリート君ぐらいだろう。大抵の男は、男という人種に生まれてしまった時点でこういう運命をたどることが決まっているのだ。

「——良いかいリイナちゃん、男はすべからずして変態だ。例えばそれはどこの国どこの世界へ言っても揺るがない共通文化だ。世界共通だ。人間の常識だ。しかし男の中にはそれを認めまいと必死に抗う馬鹿がいる。自分は変態じゃないと、いたって健全だと周りに振りまく輩がいる。ええ俺さ、俺ですとも。しかし今俺は気付いた、それは間違っている！ 男として生まれたのならば、それを認めるべきじゃないか。自分が男だと堂々と言い張るには、男としての根源をしっかりと自立するべきではないか！ そう！ それこそが何よりも大切なのだ！ もう一度言おう、男はすべからずして変態だ！ ただそれを認めるか否かで、人間の器は天と地の差を生み出すのだ！！」

「い、意味分かんないから……」

「で、本の内容ってどんな？」

「さっきの前振りは何！？ よく分かんないから別にいいけど……。と、とにかくこれは駄目。絶対に駄目」

顔を少しだけ赤くして、恥ずかしそうに本を胸に抱えるリイナ。

いやはや、その体勢実に可愛いじゃないか。

しかし何が何でも本の内容は知られたくないらしい。それほど内容的にヤバイものなのか、それともリイナ個人として他人に知られるのが嫌なのか、どちらかは不明だが。

まあ、ここまで拒絶されては諦めるしかない。おそらく強引に奪う事は簡単だろうが、残念ながら紫音はこっちの世界の文字がまったく読めないのだ。なんとかリイナから口を開いてくれない限り内容を知らる事は出来ない。

だがここでただ単に退いては万屋失格だ。いつか必ずその内容を暴いてみせんぞ、と紫音は内心適当に愚痴ってみるのだった。

「ねえリイナちゃん」

「な、なに」

「それエロ本？」

瞬間、赤かったリイナの顔がさらに真っ赤に染め上がったのは言うまでもない。

「~~~~ツ！？ ンな訳ないじゃない！ こ、これだから男の子は困るのよ！ 馬鹿！！」

紫音に怒声を浴びせながら本をさつさとデカイ鞆の中に突っ込んでいくリイナ。

なんか物凄い慌てぶりである。たぶん下ネタトークが苦手なのか、それとも恥ずかしがり屋さんなのか。まさかホントにエロ本じゃあるまいし、初々しい慌て方だ。まったくいじり甲斐があつて困る。

リイナは小説のほかになんとちよつと転がっていたゴミなどを軽く始末すると、不意に立ち上がって言った。

「と、とにかく。そろそろ君の事起こそうと思ってたところだし、

私はそろそろ動き始めるけど。シオン君、君はどうするの？」

彼女の言葉を聞いて思わずポカンとしてしまう少年が一人。

ハッ和我に返ると、思わず視線を開け放たれた窓から外へ向けていた。

「もうそんな時間なの？」

リイナは無言で、ただ窓から外のある一点を指差した。

そこに視線を持つていくと――、確かに。少し遠くてハッキリとは見えないが、街の一点から祭りの雰囲気や灯を灯したオレンジ色の光が辺りを照らしていた。耳をちょっと澄ませば喧騒の音も少しだけ聞こえてくる。青い夜空に、赤い光。なんだか幻想的な雰囲気。がその一点からは感じられた。

（あこでやってんのか……、面踊りの祭り）

確かに今思えば、辺りが静かになった気がする。この街の住民も観光客も、あの広場に集中しているせいだ。離れたこの場所は実に静かな感じがした。

何となく黙っていた二人の沈黙を先に破ったのは、リイナだった。

「私はこのまま街の正面門に向かうつもりだけど、シオン君、確にお面持ってたよね？ お祭り行くんじゃないの？」

「まあ、それはそうなんだけど……」

言われて、思わず言葉を濁してしまう。そしてリイナの姿をチラチララリズム。

そんなリイナは不思議そうな様子で紫音の答えを待っているが、紫音の迷いの種となっているのはそのリイナなのだから困ったものだ。

なんだか名残惜しいのである。

リイナ・グレーティア・セッティと出会ってまだ長くはないが、この短い時間の間に深めた彼女との関係はそれなりに大きいものである。お互いがお互いを助け助けられ、そんな事を何度も続けている内にお互い何だか言っていて仲良くなってしまうのだ。こんな複雑な関係を築いてしまっただけ、ただここで「さようなら」ではな

んだか名残惜しすぎる。

しかしそれと同時に、紫音とリイナは同じ逃亡者同士という事だ。逃亡者、つまりゆつくりはしてられない。いくら今は安全な時間帯だからと言って、それも束の間であり、過ぎゆく時間なのだ。呑気にこの出会いに感謝、なんてしていられない。リイナはそれが分かっているから、そして理解納得しているから、こうもサバサバと物事を進められるのだろう。

（でも、なんかなあ……）

そういうのって良いのだろうか、と不意に思ってしまう。

人間関係の在り方なんて人それぞれだから仕方ないとは思っけど、でも、紫音にはどうしても納得いかなかった。

「……………、リイナちゃん」

「ん？」

とりあえずベットから身を下ろした紫音は、考えを纏め、リイナに向き直った。

たぶん今の紫音にはこれぐらいしか思い浮かばないのだろう。

「これからちよつと、時間ある？」

それにリイナは不思議そうに一瞬黙ったが、すぐに口を開く。

「まあ、お祭りって結構長い間やってるらしいし、逃げるチャンスはいっぱいあるけど……」

言い終えた後、「なんで？」とリイナは付け加えてきた。まあ、それもそうだけど、面と向かって聞かれるとやっぱりこういうのは恥ずかしい。こういう時ばかりは、もといた世界でも恋愛だの何だのに目を向けておけばよかったと痛感する。そうすればいざって時にトギマギしなくて良かったのに。

……いや、少し考えてた時期もあったっけ、恋愛。

「まあその、なんだ」

ちよつと考えた末、紫音は苦笑いを浮かべつつ、後ろ手にお祭りの方向を指差した。

そして戸惑いつつも、告げた。

「ちょっとだけ見てこないか？ お祭り」

「シオン君でさあ、何だかんだ言って可愛いところあるよね」
「う、うっせ」

多くの人々の喧騒が響く中、紫音とリイナは小さな高台に来ていた。

まあ、高台と言ってもその頂上は地上からほんの10メートルほどで、どちらかというと土の壁から突起した部分を少し手入れして手すりなどが設置された感じだ。ここからなら祭りの中心となる大広場から適度な距離を置いてあり、多少なりとも見渡せるので良い感じに祭りを観察できるのだ。

しかしここまで来るまで大変だった。

あの発言の後、長い沈黙が続いた末、先に動いたのはリイナだった。しかしなぜか彼女はそれがデートの誘いだとは勘違いしてしまい、物凄く顔を真っ赤にしながら暴れまわって、落ち着いたのは紫音がついっかかり本当の訳を話してしまってからだ。だがそれが災いとなって、リイナは大爆笑。笑いの渦で紫音を辱めのどん底に叩き落とし、まあさっそく誘ってくれたんだから、ってことでOKしてくれた訳だ。

だが一応二人はお尋ね者な訳で、多少は警戒しなければならぬ。ということ、この高台を見つけ出したのだが、掛けられてい

た梯子を上っている時にまたアクシデント。レディファーストって事でリイナを先に行かせ紫音が後を追うように上ったのだが、まあもちろん上を見上げるとスカートの中に広がるヴァルハラが拝める訳で。さすがに今回ばかりは気付かれ全力全開で蹴落とされた。顔面へのクリーンヒット。あれは痛かった。普通に痛かった。

しかし、

「大体、寂しくなるから一緒に見ないかって……。ぷぷ、シオン君って、カッコイイより可愛いって言われるタイプの男の子だね」

さつきからこの話ばかりであるこの娘は。

人の弱みを握ったら徹底的に痛めつける、そんな性格をしているに違いない。紫音の経験上リイナは確実にドSの才能があるだろう。実際姉の美弦紀彼方もそうだった。この子は絶対にドSな性格になる。悲しい事になってしまう。

「う、うるせーんだよう。大体、リイナちゃんがデートの誘いなんかと勘違いするから悪いんじゃないカツ！」

頭を抱える紫音はちよつと反撃してみる。

上手い具合にリイナの顔は思いつきり赤く染まった。この辺はまだ扱いやすいので、少なくともお姉ちゃんっぽくはならないだろう。「あ、あれは……ッ!? 君がややこしい言い方するから悪いんじゃない！」

「ハッ、知った事か。誰が知り合って9時間ほどしか立ってない女の子に告白するか! 勘違いしたそっちの方が悪いんですよー!」
「う、うつつうつつさいわね! 大体ねえ、こんな祭りのある日じゃ普通勘違いするじゃない! それが乙女心つてもんでしょ!」

と、今の言葉に紫音は不思議と引っ掛かる事に気付いてしまった。
「? こんな祭りのある日?」

思わず口に出し、リイナは紫音の言いたい事が分かったのか。「ああ、知らなかったの」と納得したように呟いた。

「……だから君、あんな事堂々と真正面から言えたのね」

「堂々とは言ってない。決して言ってないぞ」

すかさず突っ込むがリイナは至ってスルー。この野郎。

「とりあえず君の人生の為に教えてあげるけど。毎年行われるこの面踊りの祭りの日にね、今夜一緒に踊らないかーっていうお誘いを異性に対して言った場合、それってどういう意味になるか、君考えた事ある？」

ねえっす。

するとリイナは少しだけ頬を染めると、ちょっとだけ戸惑いながら言った。

「あ、愛の告白よ、告白。ほら、面踊りの祭りって友情を深めるって由来があるでしょ？ それを男性から女性、またはその逆だったりとすると、愛情って意味で取っても良いんだって。だからそれがいつの間にかそういう文化になって、人々の間で勝手に解釈されるようになったの」

「ほう……」

「だ、だから！ 別に私が勘違いしたっておかしい事じゃないの！ なんだか嘘っぱちっぽい気もするが、たぶんそうなのだろう。実際に祭りの方を見てみると、確かに異性同士で組んで踊っている人達の比率が多い気がした。

まあ、それならリイナが勘違いしたのも納得がいく。

しかしなんだ、もう一つどうでもいい疑問が湧き出てきてしまった。

「ねえ、リイナってもしかしてツンデレ？」

そしてそんな疑問をついつい口に出してしまう俺、ドンマイ（意味不明）

「？ …… つんで、れ？」

「いや、分かんないなら気にしなくていいよ」

「???」

どうやらこの世界、これまでの経験上そういう単語がまったく通じないらしい。住んでいるのは同じ人間なのに不思議なものだ。平成人真っ盛りな紫音にしては同時になんだか不便な気がしてならな

かった。

（やっぱ住んでる環境が違っただけでこうも違うものなのかね……）

何となく。

何となく紫音は、面踊りの祭りの方へと視線を戻した。

そこにはキツネやら猫やらライオンやら、色んなお面を各々付けた人々が、実に楽しそうに踊っていた。振りなんて決まっていなかった。何となく分かる。みんながみんな、自由に、盛大に、舞っていた。

そしてそれらの人々が囲むように、大きな輪の中心には巨大なキヤンプファイヤー。燃え上がる紅蓮の炎。暗闇を照らす緋炎。盛大だが、同時に美しさも兼ね備える、実に幻想的で美しい光景だった。

「綺麗だね」

隣のリイナが呟く。

「綺麗だな」

それに短く返す。

でも、と。

紫音にはどうしても、その光景が他人事に感じてしまった。

（環境が違う、ね……）

結局、紫音はリイナやあこのいる人達と違って住む世界が違うのだ。何もかも、環境が違う。踏みしめてきた地面も、吸ってきた空気も、まったく別の物なのだ。そう思った瞬間、唐突に紫音の全身を何かが走り抜けた。冷たい何か。恐怖ではない。歓喜でもない。そう、これは……

孤独。

周りに誰もいない、誰も助けられない、それは死ぬよりも辛い事。まるで自分一人が世界から切り離されたような、圧倒的な孤独感。

これは前にも一度、経験した事があった。

いつもの発作。慣れる事の出来ない痛々しい発作。あの時に見る夢と、なんだか似ている気がした。周りが真っ暗で、何も感じなくて、自分だけがその場から生き残って――。

どうしてこう、神様なんて野郎は紫音を苦しめるのか。どうして紫音を一人にしたがるのか。もし一度でも顔を合わせたら、一発ぶん殴ってやりたい。

でもそんな事叶うはずのないのが現実なのだ。たったそれだけの願いすらも、神へは届かないのだ。あの時だって、そうだったのだから。

（でも、いつまでもこうしてる訳にはいかないんだよな）

美弦紀紫音は変わったのだ。あの時から、たった一人の孤独と絶望から、姉である美弦紀彼方が助け出してくれたあの時から、変わろうと願ったのだ。

だから今も、この孤独感に平伏すわけにはいかない。美弦紀として、万屋として、強くなるうと決意したのだから。

「シオン君？ どうしたの？」

隣から届くリイナの声に、ハッと我に返った。ちよっとしんみりした表情でもしていたのか、心配掛けてしまっただろうか。

「……いや、何でもないよ。気にしないで」

軽く微笑みかけて、視線を前方へと移す。

とにかく、この祭りが終わったら本格的に動き始めるしかないのだろ。元の世界へ帰るため、少しでも努力しなければならぬ事は見えていた。それに、王国騎士団の連中もおそらく本格的に警備を開始するはず。奴らとの戦闘を出来るだけ回避し、尚且つ情報を探る。それはかなりの高難易度を誇っているのは何となく分かった。「……シオン君ってさ」

と、不意にリイナから話を振ってきた。

何となく振り返ると、気付く。彼女の表情に、少しだけ真剣な様子が見取れた。

「ジャッポーネから出てきた理由、修行の一環って言うてたけど…

……」

「……、」

「他にも、何か理由あったりするんでしょう？」

それはあまりにも核心を突く言葉だった。

我ながらあの時は上手い具合に誤魔化せたと思っていたが、どうやら彼女には見抜かれていたらしい。さすがに異世界だの何だのには考えが及んでいないらしいが、それでも、紫音の本当の目的が別にある事を完璧に言い当てていた。

「今日、部屋に泊まらせてあげて気付いたけど、君っていつもと全然違う雰囲気出すときあるよね。普段はへらへらふざけてばかりなのに、ホント時々、まるで何考えてるか分からなくなる時。……何か、別に理由あるんじゃないの？」

「……、」

なんて鋭い子なんだろう。

いや……そうか。だからなんだ。だからこそこの子は、たった一人でも王国騎士団から逃げ続け、こうも簡単に生き延びているのだ。流石だな、と思う。行き当たりばったりの紫音とは大違いだ。

「……さあ、どうだろうね」

返す言葉はそれだけだった。

他に言える事なんて何もない気がする。結局美弦紀紫音とは、その程度なのだから。

「……」

「……」

再び流れる、時間が止まったような沈黙。

どうしても、口を開く事ができなかった。なぜかは分からない。でもなぜか、開いてはいけない、そんな気がした。

だが、その沈黙を破ったのはまたもやリイナ。少なくともそれは、良い意味に捉えられる言葉ではなかったが。

「……じゃあ私、そろそろ行くね」

ハッと体ごと振り向くと、リイナは地面に置いていた鞆を方に担

ぎ、もう逃げる準備は満タンだった。

そしてその言葉は、同時に別れの言葉であった。

もう合う事もないだろう、小さな別れ。

「早くしないと祭りも終わっちゃうしね。警備が薄い内に、さっさと街から逃げるわ」

「……うん、分かった」

言いながら高台を降りる梯子の方へ歩いていくリイナ。

その背中に何を言えば正しいのか、紫音には分からなかった。ただ、たった一つ思い当たった言葉を、口にしていた。

「リイナちゃん、ありがとう」

それにリイナは、思わずといった感じでこちらに振り向き、少し苦笑いしてから「こっちこそね」と一言。

さらに一息ついて、彼女は言った。

「お尋ね者同士の馴れ合いはここで終わりだけど、まあ、お互い幸運を祈りましょう」

そして、スツと軽く片手を上げると、まるで裏路地を逃げる時と同じように、リイナの一言が紡がれた。これこそ、最後の別れと言わんばかりに。

「さよなら」と。

梯子を一気に飛び降りたリイナは、すぐに見失ってしまった。

そして彼女の最後に見せた表情を思い出しつつ、紫音は呆然とそこに佇む。ただ一人、夜空を見上げて。

(……あー、こういうのらしくないよなあ)

ほんの9時間ちよつと。

たったそれだけの時間しか共に過ごしていないというのに、紫音は想像以上にあの少女へ『友情』を持っていたのかもしれない。

やたら、痛感してしまったのだ。

本当に久々に、感じてしまったのだ。

『寂しい』という、ちっぽけな感情を。

第7話：冴えない孤独感（後書き）

急展開ワロスですみません……w
感想評価お気軽にどうぞ！

第8話：逃亡者の開戦、万屋の飛躍

月明かりに照らされる、王都『アルスウエル』。

面踊りの祭りが行われている大広場を背に向けて、リイナ・グレイティア・セツティは街の正面門へと歩みを向けていた。

背後から伝わってくるお祭りのヒシヒシした雰囲気と、人々の歓声や打楽器によって奏でられる盛大なメロデー。と言ってもすでにかなりの距離が開いているので小さくしか聞こえないが、これだけの距離が開いていても人々の歓喜する思いが伝わってきた。

少しだけ、羨ましいな、と思う。

本来ならばリイナもあの中にいたって悪くはないのだ。生まれは別の国だったとしても、ちよつと前まではこの街に住んでいた。友達とは言えずとも知り合った地元の住民も何人かいる。自分もあの場所に混ざっているのが、本当なら当たり前の光景なのだ。

しかし、数日前からリイナは王国騎士団に追われる身となってしまった。しかも奴らの様子からするに、かなりの最重要手配犯なのだろう。毎日のように繰り返される逃亡戦が日に日にしつこくなっている気がする。

まあ、理由はどうあれリイナは所詮お尋ね者。

こんな身分の人間では、お祭りに気軽に参加することでさえできないのだ。例え面踊りのようにその時間だけは騎士達の警備が完全になくなるといっても、すでに街中には指名手配犯としてリイナの顔が晒されており、人が大量に集まる場所をうるついては何が起こるか分かったものではない。誰かに追われる身として、そのようなお

気楽な行動は許されないのだ。

だから、同じ追われる身として、あの少年が祭りに行こうと言いだしたときは心底驚いた。

もちろん最初はこちらの不手際で告白だと勘違いしてしまったのもあるが、それは後から解決したのでどうとも思っていない。なにより自分の立場を分かっているながら、それでも祭りに行こうと言う少年の考えに驚かされた。

初めて路地裏で助けられ、食堂で色々お話した時から変わった人だなと思っではいたが、まさかここまでとは。優しい言葉を気軽に掛けてくるかと思えば、変な事言いだしてへらへらふざけたり、でも自分の思った事をサラっと言ってきて実は素直だったり。時折見せる独り言が激しかったり。ヒョロイ見た目に反して実は物凄く強くて、なんだか真剣な表情を見せる事もあって……。

とにかく変わった人だった。

正直、何を考えているのかまったく読めない。

でも、と思う。だからこそ、だからこそリイナは、少年の申し出を受け入れたのかもしれない。

（久々だったもんね……、ああいうの）

誰かと一緒にご飯を食べるなんて、久々だった。あんな優しい笑顔を向けられるなんて、久々だった。バカやってふざけたのも、久々だった。真っ向から「ありがとう」だなんて言われたの、久々だった。追われる身であるリイナを、自分の事なんか考えずに助けてくれるなんて——、初めてだった。

思い返せば、あの少年と過ごした今日一日。自分は久々に、心の底から笑っていた気がする。

たった一人で王国騎士団から逃げ続け、知り合いだった人達もやがてリイナから離れていき、誰も味方になってくれなくて……。

そんな中突然現れたあの少年は、有無を言わさずリイナを助けてくれた。

確かに変だけど、不思議な人ではあるけれど、それでもリイナは、

彼のそういう性格にどこかすがっていたのかもしれない。一人だったから。今までずっと一人だったから。だから、宿屋で偶然困惑している彼を見かけて、思わず声をかけてしまったんだ。行く必要のないお祭りに、行ってしまったんだ。

（ま、もう終わった事だけだね）

今思えば、あの少年が別れ惜しくお祭りに誘ってきた理由が何となく分かる気がした。

何だかんだ言って、お互いがお互い、友情を求めていたのかもしれない。いや、少年の方がそうでなくとも、リイナは確実に少年に対して友情を求めていたのだろう。

もし仮に、リイナが追われる身ではなく、ただの一般人だったら。もしそうだったら、絶対に友達になれていた。なぜだかそういう確信がリイナの中には存在していた。

（……って、追われてなかったら私はここにいないか）

まったく、何考えてるのよ私。馬鹿らしい。

今最も大切なのは、王国騎士団の総本山とも言えるこの王都アルスウェルから逃げ出す事だ。思い出の感傷に浸る事は後でいくらでもできる。今は少しでも早くこの街を出なければ。

視線を前に向けると、ようやく街の正面門が見えてくる頃だった。浅黄色をした石畳の大通り、その両サイドを民家やお店で挟み、真っ直ぐと伸びた先には小さな噴水が一つ。リイナの視点からしてみれば、その噴水に隠れるようにして巨大な街の出入り口がそびえ立っていた。それをしっかりと視界の中に捉え、野宿道具などが敷き詰められている大きな鞆を揺らしながらリイナは真っ直ぐ歩を進める。

あの門を抜ければ、ついに外の世界だ。

別に街の外へ出た事がない訳ではない。そもそもアルスウェルに来るまでに船と馬車を利用して外の世界を行き来しているのだから。だが自らの足でこうやって外へ向かうのはリイナも初めて。生身の人間が単体でウロウロしていれば野生のモンスターに襲われるのは

確実だろう。だがそれがまた、実質騎士団から逃げるためとはいえ、旅へ出ているという現実を強く実感させられる。なんだか一気に大人になったような、そんな気分だった。

まあ、どれもこれも……

——この状況を打破できればの話だが。

「……あんたら、いつまで隠れてる気よ。姿現しなさい」

不意に立ち止まり、前方を見据えたまま低く唸るリイナ。

飯のここににいるのがただの一般人ならば、その見据える先に何があるのか。おそらく姿形を捉える事も出来なかっただろうが、リイナは違う。

生憎と、大通りの道を塞ぐように大量の騎士が隠れている事ぐらい、最初から見透かしている。

「——ふむ、さすが我々から数週間も逃げ切っていただけの事はある」

突如何もないはずの空間から響く、声。

だが実際、そこには何もない訳ではない。確かにある。確実に、絶対に、ある。

瞬間、バサツと。

まるで今まで透明マントを被っていたかのように。

大量の騎士達が、各々武器を構えてそこに現れた。

それは人間の壁とでも言わんばかりの人数で、ざっと見渡す限りでも1000は確実。

夜空から降りる月明かりが騎士達の鎧に反射し、怪しいほどの銀光が辺りを照らしだしていた。

そして——そんな『壁』の先頭に立つ、唯一鎧を着込んでいない男が一人。

スラリと流麗に伸びる高い背丈に、女性のような白い肌。虫一匹は殺せそうなほど鋭いゴールドの瞳。後頭部で纏められた長髪の白髪。そして、絶対的風格を宿す、騎士団団長のみが着る事を許された赤い装束。

遠目から一度だけ見た事のあるリイナはその美男性が一体誰なのか、すぐに答えが導き出された。

「王国騎士団団長、ルパート・アルビン・ノリス……」

リイナの緊迫した声を聞いて、騎士団最強を誇る男は口元に小さな笑みを浮かべた。

「君がリイナ・グレーティア・セツティだな。こうやって正面から会うのは初めてかい？」

ルパートの言葉に耳を貸す気はない。それよりも問題なのは、今の現状だった。

おそらく騎士団の連中は、リイナが面踊りの祭りを利用して街の外へ逃げる事を事前に予想していたのだろう。だからわざわざ透過系の晶術を兵士全員に使用し、正面門で待ち構えていたのだ。お祭りの最中は基本、街の警邏などが全てなくなる日。しかし逆を言えば、一般市民にさえ気付かれなければそれでいいという事にもなる。運悪くも街の住人はほぼ全てが大広場。距離の離れたこの正面門前でなら、いくら騒ぎを起こそうとも迷惑がかからないのである。

軽く舌打ちをしつつ、リイナは一步の後ずさり。邪魔になるであろう鞆は適当に放り投げた。

「はっ……騎士団長もあろうお方が、手配犯一人の為に全軍出撃ね。ちよつと大げさすぎるんじゃないの？」

挑発的に言い放つが、ルパートはまたも不敵な笑みを浮かべるだけだ。まるでそう言われる事が分かっていたかのような態度である。「なに、君一人だけならいつも通り小隊を配置しておけばそれで済んだんだが」ルパートは実に愉しそうに、「……どうやら昼時、君は別の『誰か』と共に行動をしていたらしいな。その『誰か』によって我が騎士団の一個小隊が壊滅、しかも相手は無傷と来たものだ。

団長として危惧するのも当たり前だろう？」

その『誰か』が一体何なのか、答えは自分でも驚くほど早く出た。

（シオン君だ……）

昼時にあった裏路地での戦闘。あの少年は確かに、たった一人で20人も的小隊を返り討ちにしてみせた。しかも無傷。その報告を受けたルパートとしては、危惧するのも当たり前という事か。

（でも、こっちとしてはいい迷惑ね……）

リイナは視線だけで辺りを確認しつつ、横合いにある裏路地への通路と真後ろの道からは誰も来ていない事を確かめる。お生憎様、リイナはあの少年ほど強くないので、100数人も敵相手に真正面から挑むほどの勇氣はなかった。事がどのように運ぶにしろ、退路ぐらいいは確認しておかねばマズイことになる。

だが、

「逃げようと思うなら無駄だ」

「ッ」

「例え君がここで逃げ出そうとも、我々はそれを追わない。いつまでもここに陣取り続けるだろう。何日経とうがそれをやめるつもりはない。君を捕まえろと言う依頼は、依頼主が依頼主だからな。ここまでやる価値があるのだよ」

つまり、今いる100人を何とか撒いて、正面門の警備が疎かになった隙を突く、という作戦は無駄に終わったという訳だ。なんとこの洞察力。リイナの考えが、こつも簡単に潰されてしまった。

ルパート・アルビン・ノリス。今になって思えば、かなり恐ろしい男なのかもしれない。

相手の考えている事を裏の裏まで読み、判断し、もっとも効率のいい作戦を立てる。その結果がこれなのだ。今現在も、あの鋭い瞳がじつと見つめてくるだけで、こちらの考えが全て読まれているような錯覚に陥ってしまう。

これが騎士団長の風格。

今まで対峙してきたどの小隊長にも感じられなかった、圧倒的すぎる威厳が周囲の空気を伝ってヒシヒシとリイナの体を刺激していた。

(くそ……、どうする)

額に流れる冷や汗を無視して、リイナは必死に頭を回転させる。

論外な結論だが、ここで真正面から突破するのはまず不可能だろう。昼時にあった小隊との戦闘でさえ、傍らにいた少年の事を気にかけすぎたせいもあるがあと一步で片腕切断されるところだった。なんたつて相手は全て戦闘のプロ。リイナも人並み以上には戦えるが、あの量相手では開始2秒で昏倒させられるに決まっている。

では一旦背を向けて逃げ出すのは。これもよくよく考えたら危険だろう。

ルパートは追わないと言っているし、とりあえず现阶段の危機は回避できる。だが、今一切街の出入り口は完全封鎖され、おそらく警備が疎かにならない程度に隊を分割して、そちらの班でリイナを追ってくる事は確かだ。おそらく今まで以上の過激な猛攻で。出口を前にした折角のチャンス逃すに加え、じりじりと体力を削られて追い詰められるのも、突っ込むのと結論は同じだった。

どうする。

どうすればいい、リイナ。

奥歯を噛み締め、ただルパートを睨みつけるしかないリイナだが、突如そのルパートが口を開いた。

「——我ら王国騎士団としては、君が戦いに挑もうがこの場から逃げ出そうが、捕まえる事に何も変わりはない。が、このままでは私個人としての騎士道に大きく反する」

「……正攻法じゃないから？　じゃあなに、見逃してくれるっついでいの？」

「フツ、それも君次第だろう」

一体どういう意味だ。

その疑問を口にするより早く、ルパートの言葉は紡がれた。

「リイナ・グレーティア・セツティ。一人の騎士として、君に一騎打ちを申し込もう」

「なに……？」

彼は困惑するリイナの様子を実に愉しそうに眺めながら、淡々と会話を続ける。

「一種の賭けのようなものさ。どちらが勝つか負けるかで、今後の次第を決める」

そこまで聞いて、ようやくリイナはルパートの言いたい事が分かった気がした。

なるほど……、面白いじゃない。

「仮にこの勝負、君が私に勝つ事が出来たなら、我々騎士団は素直にこの道を開けよう。街の外へと自由に逃げるがいい」

「だ、団長！」

と、響いたのは群がる騎士達の中。

視線を向けると、そこには赤いトサカのついた兜を身につける小隊長がいた。あの顔には見覚えがある。本日の昼時、あの少年にたった一撃で気絶させられた男だった。

「お言葉ですが、いくら団長の決定とはいえそれは勝手すぎます！ それでは我々がここに呼ばれた意味が……」

「その意味がなくなっただのは今に限った事ではないだろう？ それともイーノス、お前の隊を壊滅させたという男、連れてこれるのか？」

「で、ですが！ 万が一の事もあります！ ここは我々も……」

「これは団長命令だ」

「しかし……！」

「団長命令に、逆らうか？」

最後の一言。

それが響いた瞬間、イーノスと呼ばれた男が思わず息詰まるのを、リイナは何となく分かった。

しかし、それもそうか、と思う。あのただならない雰囲気と風格、

それほどの威厳を持つ男にああも言われたら押し黙ってしまうのは仕方ない事だ。

男が完全に黙ったのを確認すると、ルパートは再びこちらに向き直る。

「もう一度言うが、仮に君が私に勝つ事が出来たら、我々は素直にこの道を開けよう。……だが、君が敗北をきし、私が勝ったら」

「素直に捕まれ……って言いたいのか？」

なんて率直で騎士らしい考えか、と最初に思った事はそれだった。確かに騎士団長である彼はそれに相応しいほどの威厳を持っているが、だからこそ、他の騎士達に比べたらまだマシな騎士道精神を持っている事が読み取れた。それこそリイナを捕まえるためだけに一般市民に対して剣を振るうクソ野郎共よりかは。

「それでどうする？ リイナ君。私の決闘を受けるか、否か」

そんなもの、すでに決まっていた。

仮にここで逃げ出したとしても、100人相手に立ち向かったとしても、達する結果が同じなら。

リイナは第3の答えに賭けるのみだ。

「いいじゃない……その申し出、受けてあげる」

「そうこなくてはな」

言うと同時、ルパートは後ろ手に他の兵達を下がらせ、余る手で腰の鞘から一振りの剣を抜き放った。

シン、という透き通るような音。そして姿を現すは、銀光する美しい刀身に、青い宝石が埋め込まれた金の柄を持つ片手持ちのロングソード。明らかに他の騎士達が使っている剣とは質が違う。剣に関しては素人のリイナが見ても、それは明らかな業物と判断する事が出来た。

「君も自分の武器を抜いてはどうだ。まさか、晶術だけが取り得な訳でもないだろう？」

……なるほど、こいつには気付かれていたか。

観念したリイナは、己の両手に魔力を集中する。感覚的には何か

硬いものを握りつぶそうとする時と同じだろうか。そして創造するは、もつとも自分が得意とする武装。

「――『Connection』『Imbued』」

小さな口から紡がれるは小さな呪文。『接続』と『錬成』。

刹那。

真つ白な光を周囲に撒き散らして、リイナの両手にそれは顕現した。

刃渡りは30センチほど。僅かに反れている刀身は東方に伝わるブレードという特殊な剣に似ている。無駄な装飾はされず使いやすさを求めたようなそんな形状で、2つあるそれを両手に構え逆手持ち。

俗にツインダガーと呼ばれる、ハンティング用の二刀武具だった。「ほう……その呪文、武装転生の晶術か。なかなか珍しいものを使うな」

「剣ばかり頑張ってるあんたらとは違うからね」

武装転生。

それはリイナが最も得意とし、切り札としている晶術。伝説などに登場する聖なる武具を、自分の魔力を大幅に犠牲にする事によって己の手に顕現させるという実にユニークな晶術だ。もちろんこれを行使できる人間は実に少ない。リイナだって今までの人生、自分と同じ武装転生をできる人間はほんの一握りしか見た事がないくらいだ。

今呼び出したのは『マインゴージュ』と呼ばれる短剣。

リイナがもつとも得意とする武器だった。

「さあ、準備できたわよ」

言いながら、低く腰を落とし、双小剣を構えるリイナ。

「いいだろう」

静かに呟き、長剣を眼前に構えるルパート。

負ける訳にはいかない。

どんな事があっても、こんなところで捕まる訳にはいかないのだ。

例えそれがちつぽけすぎるワガママでも――
それでも、そんな幻想から逃げるために、リイナは『あの場所』
を出たのだから。

（だから、勝つ……！）

お互いがお互いの動きを真剣に睨み付け、
一陣の風。

それを合図に、両者は真っ向から激突した。

「――という訳だから、君達の将来の為に取っておきの知識を教
えてあげようと思うんだ。どう、知りたい？」

「……知リたーい！……」

絶賛お祭り状態のアルスウェル。

相変わらず例の高台の上にいる美弦紀紫音は、地元住民の子だろ
う、目の前にいる3人の子供たちに向けて小さな演説を行っていた。
なぜこんな状態になっているのか。

詳しく話すと長くなるが、簡単にまとめて言うのであれば、向こ
うから声をかけられたのだ。

リイナと別れた後、ボーっとしばらく元の世界の事を考えていた
のだが、不意に結構近くから声が聞こえたと思ってそちらに振り返
ると、高台のすぐしたから「なにしてるのー？」的な感じでこの子
達が紫音に声をかけていたのだ。

どうやらこの面踊りの祭り、街中が歓喜に溢れると言っても『大人』限定らしく、地元の風習をよく理解していない小さな子供たちにとってはかなり退屈極まりないものらしい。並大抵の家庭は祭りが終わるまで自宅に子供を留守番させておくらしいが、ごく稀にこうやって家を抜け出して友達と遊んでいる子達もいるのだと。この3人の言っていたが本当ならばの話だが。

まあそんな訳で、丁度暇を持て余していた紫音は子供たちに高台を登らせ、話の流れでなぜかこんな謎演説が始まってしまった。

……だが、

「まず君らのような世代の子供たちにとって、将来の夢なんてのは大概『正義のヒーロー』やら『スーパーマン』なんていう完全超人としか言えないような奴らになりたいってのが大半だ。そして固定概念に縛られている3流の大人つてのは、そういうのを馬鹿らしく思い適当にあしらってやがる。でも人生にとってそこが別れ道なんだ。自分が今まで学んできた知識——という名の概念に縛られ、決まった事を決まった用にしかできないサルのような大人と、自由な発想と独自性を展開し、夢へと思いを馳せる君らのような子供達。一体どちらが正しいかなんて、簡単に分かるだろう？ もちろん君達だ。君達こそが正しいんだ。確かに『正義のヒーロー』やら『スーパーマン』なんていう夢は現実離れしてるけど、決して不可能なことじゃない。不可能だと決めつけるのは己の固定概念に囚われているアホ野郎の事を言うのさ。例えば俺なんかは、8歳の時に両親を亡くし、10歳の時には危ない連中に変なクスリを飲まされ頭がおかしくなった。14歳では何も無い砂漠地帯にたった一人取り残され、16歳には実の姉に童貞を奪われて史上最悪最凶のハードMとしてたつぷり襲われたもんだ。そんな風に小さい頃から数多くの困難、逆境、悲劇、羞恥、調教、洗脳、最愛の人との別れを乗り越えてきた俺は、この若さにしてすでに一流の最強！ 君達が夢見る完全超人！ つまり何が言いたいのかというと、自分達がくだらないと判断したらもうその大人の言う事は聞いちゃ駄目だ。自分まで

奴らの三下病に侵されてしまう。そして夢を諦めず、いつまでもどこまで努力し続けるんだ！　そうすれば君達もいつかなれるはず。俺のような完全超人に！！」

「なんだかよく分からないけどお兄ちゃん凄いんだね！」

「おれシオン兄ちゃんの事、これからシオンさんって呼ぶ！」

「紫音様でもいいぞ」

「シオン様！」

「シオンお兄様！」

「……おおおおおーっ！！」「……」

……確実に調子に乗っていた。もうどこぞのガキ大将気分である。実際言っている事はほぼ全て嘘作り話なのだがその辺気にしないことにする。紫音自身間違っている事は言っていないつもりだし、なんか喜んでもらえてるのでこれでいいのだ。うん。

「ちなみに君達、学校は通っているかい？」

コクコク頷く子供達。なるほど、学校って言葉は前の世界と共通な訳ね。

「なら君達も一度は感じた事があるだろうけど、学校の教師ってのは実に偉そうに胸を張ってる奴らだ。でも騙されちゃ駄目。ああいう奴らこそが固定概念に縛られてるサル共の典型なんだ。自分達の立場を利用して、自分こそが偉いと勘違いし子供を顎で使ってやがる。だからこれから、あいつらにもっと勉強しろって言われた時には、今日俺が話した事をそのまま言い返してやれ。そうすれば低脳なあいつらは確実に黙る、押し黙る、そして理不尽な理由で怒鳴ってくる。そして後はその出来事をお母さんやお父さんに言いつけてやれ。数日後にその教師は学校から姿を消しているだろう。つまり俺達の勝ちって訳だ」

紫音が話し終えるや再び歓声を上げる子供達。やばい、この気分たまらないんすけど。

どうやら異世界に落とされて、どこかスイッチが切り替わってしまったのだろう。なんか時々テンションがおかしい方向性に上昇気

流している。しかし良いね、実に良いね。

と、

「シオン様。シオン様の将来の夢はなんなの？」

三人のうち一人が、そんな事を聞いてきた。なかなか鋭い質問である。さすが君、完全超人の才能あるよ。

それにしても、なんと答えたものか……。

「シオン様は『かんぜんちようじん』なんだよね？　じゃあ、その上はなにがあるの？」

「わたしも！　わたしも気になる！」

「おれも！」

んー、とわざと顎に手を添えて変な偉人っぽくしばらく考えたシオンは、

「……それはね、愛だ^{ラブ}」

「らぶ？」

「俺の夢は、世界の中心でお姉ちゃんと愛を叫ぶ事なんだ」

ちなみに冗談ではない。3割くらい本気である。

「いいかい3人とも。確かに完全超人は、名前の通り全ての面において完全で、最強を誇る超人だ。……でもね、『愛』の力の前にはそんな超人すらも屈してしまうんだよ。『愛』は、人を、動物を、植物を——この世にある万物の理ですら、指先一本で覆してしまう、そんな無敵のパワーなんだ。そして同時に、誰もが求め羨望している。お兄ちゃんもその内の一人。ここまで話を聞いてきた君達なら気付いているだろうけど、これはある種の固定概念に縛られているのと同じなんだよ。だけどそれすらも『愛』の力が覆す。俺のお姉ちゃんへの愛が、そんなちっぽけな常識を覆しているんだ。たぶん君達は俺の言っている事がよく分からないだろう。でもいつか君達にだって分かる時は来る。絶対だ。そして俺と同じように、自分にとっての本当の『愛』を探すことになるだろうさ。それは激しく困難な道のりだよ。だけど揺るがないでほしい。諦めないでほしい。そして何より、自分自身に負けないでほしい。心を強くある

ことこそが、愛への最大の近道なのだから……」

「……お、おお……」

今度こそは感極まったような声で唸り声を上げる子供達。ふふ、よいぞよいぞ。もつとワシを称えるがいい。

こちらを見上げてくる、子供達の羨望の眼差し。それを見ているだけで、美弦紀紫音のボルテージは面白いぐらいに鰻登りだった。

「ねえねえ、シオンお兄様」

すると、3人のうち唯一女の子である金髪ツインテールの子が、紫音の服の袖を引っ張ってきた。「お次はなんだい？」と出木杉スマイルで振り向くと、女の子は空いている手で自分の真横を指差す。「あれなにー？」

いや、正確には街の一点だろうか。

女の子の指先を伝って街の眺めを一望する紫音だが、特に変わったものも見つからない。あると言えば大広場で執り行なわれている面踊りの祭りぐらいだが、生憎女の子の指さす先はまったく違う方向だった。

（幽霊でも見えてるのかしら）

もしそうだったらシャレにならん。

とりあえずこのまま黙っているのは完全超人として許せないのので、目を細め、出来るだけ色んなところを凝視してみた。

家、家、家、家、お店、宿、お店、家、宿、噴水、門……。

（……門？）

そこまで考えて、ふと紫音の視線が捉えるものがあつた。

街の出入り口となる正面門……だろうか。そのすぐ手前の一本道に、まるでバリケードでも作るかのように大量の人間が陣取っているのである。

よくよく見れば、その群がる人間共、王国騎士団の連中だと理解することができた。

それなりに距離が離れているので細かいところまでは分からないが、月の光が反射して辺りを照らしている銀の鎧。それこそが決定

的判断材料だった。

（かなりいるな……、なにしてんだろ）

そもそも面踊りの最中は街中の警邏がなくなるという決まりではなかっただろうか？

だと言うのにあの大人数で街の正面門に陣取って……いったい何をやっているのやら。あれではこれから街に入ろうと言う人も思わずUターンしてしまうに決まっている。もちろんその逆も。

（つーかあんなに騎士団の連中が群がっていると、リイナちゃんも街の外に出るの大変だろうな……）

……………。

……リイナ？

ふと、引っ掛かるモノがあった。

まさかとは思う。どこかでそれを否定したい自分がある。だが、他に考えられるものがあるだろうか？

紫音の頭の中に再生されるのは、あの少女の言葉。

『私これでも、結構顔の知れ渡ってるお尋ね者だからね、のんびりはしてられないよ。そろそろこの街も出ようかと思ってたところだし』

『私はこのまま街の正面門に向かうつもりだけど、シオン君、確かお面持ってたよね？ お祭り行くんじゃないの？』

『早くしないと祭りも終わっちゃうしね。警備が薄い内に、さっさと街から逃げるわ』

（……、まさか）

いや、そのまさかなんだ。

このタイミングで、この時間帯に、わざわざ王国騎士団の連中が大勢で正面門を塞ぐ理由と言ったらなんだ？

答えは一つだ。

たった一つしかない。

（奴ら、最初からリイナちゃんの考えを読んで……）

全てが繋がった。

その瞬間、ブワッ！ と。全身から冷や汗が溢れ出してきたのは気のせいではないだろう。

（まずいぞ……！）

仮に紫音の考えが正しければ、街の外へ逃げるために正面門へ向かったリイナはかなり危険な状況に晒される……いやもしかすると、現在進行形って可能性もある。

これはまずい。

非常にまずい。

そしてその焦りは、美弦紀紫音の万屋魂に火を付けた。

「ねーねーあれなにあれなにー？」としつこく紫音の服の袖を引っ張ってくる女の子。

紫音は振り返り一度だけ子供たちを一瞥すると、軽く笑いながら言った。

「あれはね、完全超人の助けが必要だって合図だよ」

一人ずつ、自分の暇つぶしに付き合ってくれた子供達の頭に手を載せてわしゃわしゃしてやると、場違いなぐらい楽しそうに笑う子供達。

それを見やって、紫音は、

「じゃ、お兄ちゃんは大切な用事が出来たからもう行くよ」

返事は待たない。

そのまま手すりに手を掛けると、紫音は自殺としか思えない勢いで高台から身を乗り出した。

重力の手に引かれ地面へ。しかし、美弦紀流で鍛えたこの体にはまったく響かない。

軽く10メートル強はある高さから飛び降りた紫音は軽々と着地し、ダツ、と地面を一踏み。瞬間、猛烈なスピードで街の中を駆け出した。

その時すでに、スイッチは切り替わっていた。

目指す場所は街の正面門。

（間に合え……！）

万屋、美弦紀紫音は夜闇の街を駆け抜ける。

第9話：負けられない意志

狙うは先手必勝。

双小剣を構えるリイナは、ルパートより数瞬速く一步を踏み出していた。

身を低くして地面をなぞるように走り抜けたリイナは、右に持つ小剣で気合一闪。風を切って繰り出された刃がルパートの首を狙って飛来する。

「――ぬ」

長剣を縦に構えそれをいとも簡単に受け流すルパート。だがたった一撃防がれたとしてそれが何だ。何度も何度も攻撃を繰り出したしても尚、隙の生まれないのがツインダガーにとって最高のメリットなのだから。

流された右の小剣の流れに乗りつつ、下から振り上げられる左の一撃。体を一步ずらして避けられるが、これも想定済みだ。本命は足――二連撃によって注目を逸らしていた右足でローキックを繰り出した。

ガスッ！ と、それは見事ルパートの脇腹に突き刺さり、よろめかせたところに新たな隙が生ずる。身を捻り、右に持つ小剣で再び一閃が繰り出された。

が、

「王国騎士団を舐めてもらっては困るな」

降り注ぐルパートの冷静な声。

はっとなりすかさず視線を上段に見据えると、そこには長剣を振

り上げ、すでに振り下ろしているルパートの姿。

リイナの刃とルパートの刃、一体どちらが速いか。

一瞬で判断したリイナは、切り出していた小剣の軌道が無理矢理折り曲げ、すぐさま防御へと切り替えた。直後、構えた小剣の根元に着弾する一撃。想像以上の体重がのしかかってくる。

（こ、の……！）

男と女では腕力の差は歴然だろう。慌てて体を逸らしながらのしかかる刃を受け流すと、一旦攻撃の手を休め大きくバックステップした。軽く5メートルほどの距離が開く。

ルパートはそれを追ってくる訳でもなく、実に冷静な顔で剣を構えなおす。さすが騎士団長といったところか、まったく迷いが無い。「ふむ、正式な訓練を受けてないとはいえ、良い動きと判断力を持っているな。よほど実戦経験があると見える」

「それはどうも」

挑発的に返すリイナ。

だが、内心はそうでもなかった。どちらかというと焦っている感情のほうが強いだろう。

ついさっきの一撃。

直前にリイナはダミーの攻撃を二発も放って、尚且つ割りとは本気で放った蹴りが完璧にインパクトしていた。にも関わらずルパートは剣を振り上げ、一撃を繰り出してきたのだ。

そんな荒業、相当体を鍛えていない限りできる事は不可能だ。仮にリイナがルパートの立場だったら、蹴りをもらった時点で確実に隙ができていただろう。

（軽い攻撃じゃまったく響かない……。もっと火力の強い一撃を加えないと……）

少なくともダガーの刃がルパートの肉体に突き刺さるぐらいはしないといけないだろう。

しかし、どうやって？

もちろんルパートで、その解答を待ってくれるはずもない。

「余所見している場合か？」

あまりにも軽快なステップで一氣にリイナとの距離を詰めてくる
と、その長剣を片腕で振っているとは思えないスピードで連撃を繰
り出してくる。それに応戦して、すかさずツインダガーを振りぬく
リイナ。

ガン！　ギン！　ガン！　と。

幾度となく激突する三つの剣戟。二人にとっては一步も退けない
攻防だが、戦いというものに無縁な人間がこの光景を見たら、夜闇
の中で煌く三つの銀光は実に幻想的に見えただろう。

（くそ、重い……！）

手に構える武器は二対一で、一見したらその結び合いはリイナが
有利に見えるだろう。

だが実際はまったくの逆である。

確かに攻撃の人数はリイナの方が多いが、その差をルパートの実
力が完全に埋めているのだ。いくらリイナが実戦経験豊富で、尚且
つ武装転生などというレアな晶術を使えたとしても、所詮は素人の
付け焼刃と戦闘のプロ。ルパートの繰り出す一撃に加わっている重
さと洗練された技が、リイナのメリットである手数を実に減らし
ているのだ。

振り出す一撃の先にはなぜか必ずルパートの長剣が構えてあり、
攻撃のパターンを少しずらしても、まるでそうすることが事前に
わかっていたかのように受け流す。

（まるで考えが読まれてる！）

これが騎士団最強の実力か。

確かに、今まで戦ってきた連中とは明らかに動きが違う。剣の振
り方から身のこなしまで、こうやって刃の結び合いを続けていれば
嫌でも実感してくることだった。

「おそらく君は、こう思っているはずだ」

そんな中、切羽詰った攻防の中でも涼やかに言葉を紡ぐルパート。
「どうしてこの男には、己の刃が一度も届かないのか。思考を読ま

れているかのようだ、と」

「……ッ、それが何よ！」

ガギンッ！ と。

顔をぶん殴るほど勢いで繰り出された右の斬撃とルパートの長剣が激突し、お互いが拮抗状態に入っただ。だがそれすらも、ルパートは予想していたかのような態度だった。

「先に言っておくが、人間という生き物は他人の考えなど知る由もない。それは私も同じだ。君の考えていることなど、私には何一つ分らないさ」

「何が言いたい！」

「指定しているのだよ、リイナ君」 ルパートはその鋭い瞳でこちらを見つめ、「私は君の考えなど呼んでいない。ただ君の行動を先に誘導し、指定しているのだよ。予測も予想も何もない。私自身が君の行動を考え、実行させ、行く先が分かっているから君の刃は私には届かないのだ」

「黙れ！」

すかさずリイナは空いていた左の小剣で奴の顔面目掛けて切り掛かる。だがそれもルパートからしてみれば『分かっていた』ことなのだろう。軽く頭を後ろに引いて刃をかわし、拮抗を崩すと二人の間に再び僅かな距離が開いた。

（指定している、か……）

リイナは空いた距離をすぐに縮めることはせず、慎重に距離を測りながら考える。

つまりルパートは、一撃一撃の攻撃を巧みに操り、リイナが『次にこちらへ攻撃しなければならぬ』という思考を持つように仕向けているということなのだろうか？

もしその話が本当なのだとしたら、リイナはかなり危険な状態にあると考えられる。なんたってルパートはそれだけのテクニクを持っているのだ、今まで切り結んでいたのはギリギリのラインで二人の力が拮抗していたということになる。……いや、もしかすると、

ルパートにとっては今までのただの茶番で、やろうと思えばいつでもリィナを仕留められる。そういう状況だってあり得るのだ。
（くそ、思い切って勝負受けたけど、案外ハズレくじだったのかもね）

しかし、だからと言って退くわけにはいかないのも確か。ここは意地でも勝たなければ、今まで必死こいて逃げてきた努力が水の泡なのである。

（何か一つで良い。突破口が見つければ……）

そう考えている間にも、ルパートの剣戟は飛来する。

長剣のリーチを上手く利用した間合いの図り方で、確実にリィナ目掛けてその連撃が振るわれる。

（どこにどう攻撃を仕掛けても、それは全部あいつから『指定されている』。たぶん私の実力じゃ確実に抜けきれない）

今までは攻勢に回っていたが、少しでも集中するために受け身へと移る。必死に頭を回転させながら、迫り来る刃を少しでも受け流す。

（何か、あいつの予想を少しでも上回る攻撃手段があれば良いけど……！ ただ単に武器を振り回してるだけじゃ埒が明かない）

そこでふと、頭の片隅に思い当たる節があった。

激しい剣戟は今も続くが、それを何とか受け流しつつリィナの中で何かが繋がっていく。

（武器以外……？ じゃあ、武器以外のもので攻撃を加えれば……？ 攻撃の打つ座標は完全に『指定』されているから関係ない、こちからしてみれば『打つ攻撃』が問題なんだ！）

その瞬間、頭の片隅でもややもやしていたものがついに閃いた。

ルパートの得意とする戦法を崩す、唯一の突破口。道が開けた！ 分かってしまえばやる事は簡単だ。一瞬で次なる自分の行動を算段し組み立てる。飛来した上段振り下ろしを上手いこと受け流してそのまま大きく後ろへと退く。ルパート側から追撃を仕掛けてくるよりも速く、リィナは低い体勢で地面を蹴った。

「つえあ！」

唐突過ぎるリイナの突撃に一瞬怯むルパート。その数瞬の間にリイナは再び距離を詰め、左右交互の連撃を何発も打ち込む。ただ最初の一撃以外は全て指定されているのだろう、ルパートは焦る様子もなく冷静にその攻撃の数々を撃ち落していった。

だがそれがどうした。

激しいコンボの中、不意にリイナは左手に持つ小剣をこの短距離でルパートに向けて投げ放っていた。攻撃の種類はどうであれ、顔を狙ってくるというのは予想済みだったのだろう、軽々と弾かれて明後日の方向へと飛んでいく。

そこから流れるような動きで繰り出される右の横一閃。長剣によって軽々と撃ち落されるが――、リイナの本命は、ついさっき小剣を手放した左手にあった。

「少し詰めを誤ったわね」

右手の攻撃に隠されるようにして構えられた左手が、燃えていた。武装転生によって魔力をかなり使っていたリイナだが、残る魔力を搾り出して作った炎の晶術。狙うは長剣の位置からしてもっとも防ぎにくそうな首元。だがルパートはそれすらも予想しているのだろう、着弾より速く防御が前に出てくるのは間違いない。

しかしいくらルパートでも、爆発能力のある晶術の炎弾は防ぎきれないはず。攻撃の位置ではなく、どうやったらその鉄壁の防御を崩すことができるか、そう考えた末の一撃。

「ぬう！？」

ようやく気づいたようだ。だが遅い。

「はあっ……！」

気合とともに、己が左手を手前へと突き出す。

瞬間、手全体をまとっていた炎が切り離され、ルパートの首元目掛けて射出される。なんとか身をよじって回避しようとするルパートだが、予想外すぎる攻撃とすでに防御の体勢に移っていたこと、そしてこの至近距離。すでにこれをおこなう術は一つも残され

ておらず――、

ズドンッ！ という轟音。

火花と熱風を周囲に撒き散らし、炎弾はルパートの眼前で爆発した。

「きゃあ……！？」

予想以上の衝撃に術者であるリイナまでその場で尻餅をついてしまふ。しかし同時に、勝ったと確信した。今の衝撃波が物語っている。1メートル前後しか空いてないこの距離で、この威力。視界はほぼ全てが灰色の粉塵に覆われて状況がよく掴めないが、確かに手ごたえはあった。リイナの頭の中には、勝利の余韻が浸り始め――

「詰めを誤ったのは一体どちらだろうか？」

刹那。

粉塵のカーテンを突き抜けて、猛烈なスピードで突き進んでくる一撃。それを防ぐことができたのはほぼ奇跡に近いだろう。リイナ自身の条件反射が偶然にも右に持つ小剣を防御に使い、彼女の華奢な体を軽々と吹き飛ばした。

「あ、く……っ！？」

石畳の地面へと体を投げ出し、一歩遅れて頭がパニックへと陥る。一体何が。何が起きたというのだ。

両手を地面に突き、すかさず視線を前方へと向ける。そして絶句した。

立っていたのだ。長い白髪を風になびかせ、ルパート・アルビン・ノリスその人が、悠然と佇んでいたのである。右手には相変わらず金の装飾がされたロングソードを携え、僅かながら汚れのついた赤い装束を着込み、

左手に、青白く光る晶術の盾を浮かばせながら。

「そ、れは……？」

両目を見開くリイナは思わず聞いていた。

それに対し騎士団最強の男は、フツと不適な笑みを浮かべる。

「君は、騎士団の人間が晶術を使えないとも思っていたかね？」

ルパートは愉しそうに、「確かに我ら騎士団は剣の道こそが本道。晶術は極力使わないようにしている。しかしそんな我らが、唯一の弱点である『それ』を突かれた時の対処を何も考えていないわけがないだろう？」

「……ッ、やってくれるじゃない……」

体を起こしながらリイナは毒づく。

よく見ると、確かに。ルパートの長剣を持つ右手の甲——ガントレットの隙間から僅かな光が漏れていた。魔力の源であるマテリアが埋め込まれた象徴、晶術紋が光っているのである。その現実こそが、ルパートは晶術を使っている、という証明となっていた。

（それに、あの防御力……今の攻撃を至近距離で受けて、まったく揺るがないだなんて……）

小剣を持つ掌に汗が滲んできたのは気のせいではないはず。確実に焦っていた。自分でも認めてしまうほど、リイナの内心は焦りに揺れていた。

どうする。一体どうすればいい。

ついさっきの炎弾で魔力はほぼ尽きており、手にあるのは事前呼び出していたマインゴーシュの短剣のみ。しかも対になっているはずのそれは一本だけだ。こんな危機的状況、このまま状況に流されていれば確実に……、

「ではそろそろ、決着をつけようか」

ゾクリ、と。

初めてリイナの体が『恐怖』という感情で震えた。勝つ術なし、

迫り来るは敗北のみ。つまりそれは今まで必死に逃げてきた努力が全て水の泡ということだった。

（く、そお……！）

身構えたリイナに、もはやルパートは突っ込んでくるのみ。

ロングソードを腰に構え、今までとは比べ物にならないほどスピードで迫り来るルパート。すかさず小剣で防御の体勢に入るリイナ。だが、勝負はすでについているようなものだった。

ルパートが繰り出すは横一文字に切り裂く気合一閃。構えていたリイナはその強烈な一撃をなんとか防御の範囲に収めたが、

（押さえ、きれな——！？）

襲ってくるのは莫大な衝撃。リイナ程度の筋力ではそれを完璧に防ぐことはできず、足が地面から浮かび上がり真横へと吹っ飛ばされた。

「うああっ！？」

思わず手に残っていたもう一本の小剣を手放してしまい、空へ舞う。地面を何度も転がって思わず咳き込むが、ルパートの攻撃はまだ止まらない。

いつの間にか再び間近に近寄っていたルパートは、リイナの顔面に向けて片足を振りぬく。見事ブーツの先端が頬に突き刺さり、リイナの体はさらに地面を転がった。

「が、あ……！？」

口の中に血が滲む。頭がフラフラする。視界が揺らめく。

最早頭の中が真っ白で何も考えることができなかった。少しでも体を動かさなきゃ、そうは思っても、思いたくても、体が着いてこない。仰向けに倒れたリイナの回復を一秒でも許さないかのようにズドッ！と腹筋のど真ん中にルパートの片足が振り下ろされた。

「ぐ……う……」

「もう限界か？ リイナ君」 空から振り注ぐルパートの冷徹な声。

「……だが、私相手にここまで持ったのだ。賞賛に値しよう。……しかし勝負はもうついた、諦めたまえ。君が一体どういう理由で」

あの方』に追われているのかは知らないが、これは『結果』だ。君はもうどうすることもできない」

ルパートは言う、諦めると。もうお前じゃ無理だと、そう伝えてくる。

だがそれは、リイナにとってあまりにも残酷すぎる結末だった。

そんなバットエンド、認められる訳がない。リイナ・グレーティア・セッティ一人の人間として、そんな結末許せるわけがなかった。例え何が立ち塞がるうとも、最後の最後まで抗い続けると決めたのだから。

「それが、何だって言うのよ……」

だから最後まで、負けてはいけない。

心意気だけでも、退くわけにはいかない。

「あんた達には何も分からない……、これは私にしか分からない。私だけが分かること。何も分かってないあんたが、勝手なことばかり言ってるじゃないわよ！」

それを聞いて——ルパートはただ不敵に、笑みを作るだけだった。

そんなもの自分には関係ないと、お前を捕まえる事のみが自分の目的だと言わんばかりに。

「ふ……まあ、いいさ。自分から降参する気がないのであれば、やる事は一つ。暗闇の中へ沈み込むがいい」

ルパートの剣が高く振り上げられ、刃の角度が90度捻られる。

峰だ。あれをリイナの脳天にでも叩き込み、意識を奪うつもりなのだろう。

（く、そ……！）

なんとか逃げようにも、ルパートが片足でリイナの体に釘を打ち、自由を許してくれない。

この、ままじゃ……

「——ふっ」

振り下ろされる一撃。

迫り来る銀光。

人間というのはあまりにも滑稽で、こういう時にだけ過去の記憶を隅々まで思い出すものである。

旅に出た自分自身の姿、初めて見た観衆の風景、自分に親切にしてくれた多くの人々、やがて離れていく彼ら、そして——なぜか思い出す、少年と過ごした楽しい時間。

それらの思い出も、やがては儚い夢として散ってしまうのか。

そう思うと、不意に一粒の涙が浮かんできた。こんなもの意味ないのに。こんな一滴、ただの水滴でしかないのに。

そして——、

現実は無残にも、そんな少女の願いを粉々に叩き潰した——。

そう、思っていた。

ガンッ！ という衝撃音。

しかし振り下ろされた一撃は、リイナの頭に直撃していない。

「……え、あ……？」

確かにリイナ目掛けて振り下ろされていた長剣は、彼女のすぐ横——顔から数センチずれた地面に叩き付けられていた。

あまりに予想外だったことに思考の停止するリイナだが、少しずつ戻ってくる脳の回転によりついさっきの出来事が鮮明に蘇ってくる。

（何か剣にぶつかって軌道を逸らした……？）

ならば何が。

ゆっくりと、ゆっくりと、思わずリイナは『それ』の弾き返っていった方に振り向いていた。

そこにあつたのは、無残に転がる木彫りのお面だった。顔の形的にキツネ……いや、犬だろうか。おそらく物凄い勢いで剣の刃渡りに直撃したのだろう、丁度右目辺りに荒つばい抉り傷が刻み込まれている。

だがそんな事、リイナにはどうでもよかった。それよりも重要なことに、気づいてしまったから。

（あ、あれって……）

キツネつばい顔をした、犬のお面。

あれとまったく同じものを持つている人を、リイナは知っていた。

（ま、さか……）

何か言つたびにふざけた言葉で返してきて、でも時々凄く真剣な顔になって、思ったことを素直に口に出してきて、実は強くて、いつも適当で、馬鹿で……、

（そんな……でも、そんな訳）

でも仮に、そのまさかなら。

恐る恐る、顔を上げるのが怖かったけれど、それでも勇氣を持つて顔を上げたその先。

「……………あ」

リイナとルパートのいる場所から10メートルほど先に、それは……その少年は、立っていた。

風に揺らす黒髪と、同色の瞳。なんだか重たそうな長袖の服とズボンを着込むその少年は、少し荒い息を吐いてそこに佇んでいた。

まるでそう……ピンチの時に現れる、ヒーローのように。

「———たくさあ、お祭りの最中なのになんでこんなに騎士団^{あんたら}が集まつてるのかって走ってきてみたら……なんだよこれ。人の知り合いに手え出してんじゃねえよ」

面倒くさそうに言葉を紡ぐ少年は、頭を掻きながら、一歩ずつこちらに歩み寄ってくる。

駄目……来ちゃ駄目……。

そうは思うのに、どうしてかリイナは口を開くことができなかった。

代わりに口を開いたのは、リイナを押さえつけるルパートの方だった。

「貴様……何者だ？」

「さあね。誰だと思う？」

少年は即答。

まるで思いつきルパートを馬鹿にしているかのような態度だ。しかし彼は笑っていないかった。リイナとルパートの姿を目を細めて捉え、一歩一歩こちらに近寄ってくる。

やがて少年が立ち止まったのは、もうお互いの顔がハッキリと見える距離だった。リイナと少年の視線がぶつかる。逸らしたい、そう思ったけど、少年の真っ直ぐな瞳を見ると、どうしてもそれが許せない。

そんなに見てほしくなかった。見られなくなかった。こんなボロボロの姿を、涙の流れた顔を、見られなくなかった。なのに少年は、ただ真っ直ぐ、こちらを見つめてくる。そして言った。ふっと小さな笑みを浮かべて、この場の雰囲気を実にぶち壊すような言葉を。「お前、そういう顔も可愛いじゃん」

「え……？」

「待つてろ、今助ける」

少年は確かに、そこに立っていた。

それこそが当たり前のことかのように、堂々と、悠然と、釈然と、立っていた。

その拳を軽く握り締めて、

美弦紀紫音が、そこに立っていた。

第9話：負けられない意志（後書き）

戦闘シーンじゃなかなか文字数稼げないね（。。
それでも8000文字は頑張った！
↑

第10話：助けたいと思った

目の前に広がる光景を見据えて、美弦紀紫音はできるだけ冷静に状況を判断した。

リイナを逃がすまいと道を完全に塞いでいる大勢の兵士共と、そんな彼女を組み伏せているなんだか偉そうな雰囲気を持った白髪の男。そして体に数箇所打撲の後を残し、口の中を切ったのだろう、口の端から一筋の血を流しているリイナの姿。

状況は上手く掴めないが、絶体絶命のところ何とかギリギリで間に合ったということは分かった。もし、あと数瞬。数瞬でも紫音がお面を投げるのが遅れていれば、確実にリイナの意識は奪われていたに違いない。咄嗟の判断で起こした行動だったがどうやら吉と出たらしい。

（しかし何だ。当面の問題はこの状況をどうするかだよな……）

冷静に周囲を見渡す。が、少なくともこちらが優勢とは実に言い難かった。

驚きに目を見開いているリイナの近くには白髪の男が物騒なものを持って構えており、無闇に動くことはできない。だからと言ってこのままじっとしていればリイナが何をされるか分かったもんじゃないし、あの大群に紫音がたこ殴り、なんて事だって十分に考えられる。

（こういう時に一番有効な手段は……）

万屋としての勘が生きる。

導き出されたもつとも安全で有効な手段——、おそらくは言葉

の応酬。

犯罪者の立て籠もる家にメガホン持つて語りかける交渉人じゃあるまいし滑稽だとは思うが、実際今の状況下ではこの手段が最も効果的なのだ。あくまでも言葉が通じたら、の話だが。

とにかく何とかしなければ。そう思う一心で口を開こうとした紫音だが、

「団長！ 奴です！ 奴が我が隊を一人で壊滅に追いやった……！」
群衆の中から響く野太い声。思わず振り返ると、バリケードの先頭に赤いトサカの付いた兜を被る中年のおっさんが声を張り上げていた。どこか見覚えがある、と思つたら、昼時に紫音が一撃で昏倒させた隊長さんだった。これはこれは、感動の再開じゃないか。

しかしどうやら、あの時の一軒で紫音の顔は知れ渡っていたらしい。バリケードを作っている騎士達の集団からはざわめきが起こり、団長と呼ばれた白髪の男でさえもこちらの顔を見てわずかに眉をひそめていた。

（……この様子じゃ交渉はムリっぱいな。あいつらにしてみれば、俺こそが悪党な訳だし）

「シオン君！」

と、突如紫音の名を呼ぶ叫び声。リイナだった。彼女は涙の流れた跡の残る痛々しい顔で、それでもようやく口を開けた、とでも言わんばかりに大声で叫ぶ。

「私なんかに構ってないで逃げて！ 君が私の私情に巻き込まれる必要なんてないよ！」

それはある意味、拒絶の言葉でもあった。

しかし紫音には分かる。今のリイナは少しでも紫音を助けたいと思つて、拒絶しているのだ。

これ以上巻き込みたくないから。これ以上紫音の罪を重くしたくないから。自分のせいで、誰かが罪を背負うなんて、耐えられないから。

だから彼女は紫音を拒む。ここに立つ紫音を拒絶する。他でもな

い紫音を助けるために。

……でも、

「聞こえなかったかい？」

そんな優しくて、可愛い少女だからこそ、

美弦紀紫音は、万屋として、一人の男として、なにより『友達』

として、助けていたいと思うのだ。

「さっき言っただろう？ 助けるって」

「でも……！」

しかし何かまた叫ぼうとしたリイナの言葉を、最後まで聞くことはできなかった。

ガスッ！ と。

白髪の男がリイナを押さえつけていた片足を振り上げ、重力に任せ振り下ろしたのだ。言葉が途中で途切れ、苦しそうに咳き込むリイナ。思わず両目を見開く紫音に対し、蹴りを入れた本人である白髪の男は口元の不敵な笑みを浮かべて言った。

「私は王国騎士団団長のルパート・アルビン・ノリスだ。もう一度問おう、君の名はなんという？」

わざわざ自分から名乗りを上げて質問を投げかけてくる男。

どうしても名乗れってか……。

「……、美弦紀紫音」

紫音の中には、今すぐにも飛び出したい気持ちでいっぱいだった。なんたつてリイナがすぐそこで傷つけられているのである。即座に飛び出し、あの男をぶっ飛ばしたい衝動に駆られてしまう。

だがその行動はあまりにも軽率だ。一人の万屋として、美弦紀の人間として、もっと先の事を考えて行動しなければならない。自分の為にも、リイナの為にも、ここは自制心を強く持って踏み止まる。ルパートと名乗った男は言う。

「君は実に変わった性格をしている。分かっているだろうがこの娘はある理由で我ら王国騎士団に追われる身だ。例えば何も犯罪を起こしていないとも、扱いはそれをほぼ同義。この依頼が来る以前に作

つていた人脈も、この期を境に全て消えていったのだろう」

その言葉を聞いた途端、リイナの表情が苦虫でも噛み殺すかのようになんだ。そこに浮かぶのは『悲しみ』と『激昂』。

なんとなく想像できてしまった。まだ二十歳にも満たない女の子が、ある日を境に突如孤独の世界へ潜り込み、たった一人だけ、自分だけが本当の世界から切り離される様を。それはまるで昔の自分を見ているみたいで、胸が締め付けられるような錯覚に陥ってしまった。

そうか……、あの子も一人だったんだ。この世界中で、味方になつてくれる人間が誰もいない、そんな孤独をずっと味わっていたんだ。

「……にもかかわらず、今この段階でもリイナ・グレーティア・セツティの味方になつている自分が、君は非常にイレギュラーだとは思わないかね？ 騎士団に歯向かうという事は、つまりこの王都アルスウェルそのものを敵に回すのと同じようなことだ。それを君は今、平然とやってのけている。少しは自分の命が惜しいとは思わないのかね？」

改めて騎士団の人間から説明を受けると、それは冷や汗ものの現実だった。王都だなんて言うんだから今いるこの街が王に統べられる相当大的な街だとわかるし、それを敵に回すということはかなり危険なのだろう。たとえば住んでいた世界が違えど、それは実に危険なことだと感じる事ができた。

「——まあね。そりゃあ俺も命は惜しいよ。惨めにも一度はお姉ちゃんに救われたこの命、そう簡単に手放すわけにはいかない。あんたの言ってることはどこまでも正論過ぎて困るくらいだ」

しかし、

例えいかに危険でも、

「でもね、あんたの今後のために一つ教えてあげるよ」

ここは退けない。

美弦紀の名を掲げて紫音が万屋を名乗るなら、この場は退けない。

いかに目の前に迫る敵が盛大であろうとも、あの子を助けたいと思える心が少しでもあるのなら。

この場は退けない。進むところ。

もちろん、進んでやるさ。

「生憎俺はそんな事に興味はない。あんたらみたいな騎士だの王都だの、俺の知ったところじゃないし、俺はリイナを助けるためにここに来たんだ。他のことなんて興味はない」

だから言つてやる。

堂々と、真正面から、思いっきりルパートを馬鹿にするように。

「訳の分からない事をぐちゃぐちゃ言つてないで、さっさとその足退かせよ」

そして同時に、紫音の限界はとうの昔に突破していた。

全てを言い終えたその瞬間、紫音は思いっきり地面を蹴り風を切つて走り出す。

「——む！」

大体紫音がここで仕掛けてくることを予想していたのだろうか、ルパートの反応は想像以上に速かった。左腕に浮かんでいる青白く光る不思議な盾をこちらに構えると、長剣はその場で振り上げられ、リイナの意識を今度こそ奪うべく狙いが定められる。その様子を正面に捉え、思わず、思わず紫音は——、

笑っていた。

「敵の実力が分からない内は、優先すべきは敵の実力詮索だよ」

ほんの数メートル。

たかがそれだけの距離ならば、美弦紀の足を持つてすれば一瞬の距離。

剣がリイナに届くより速くこちらが辿り着くことなど、造作もない！

「——ッ——！」

人間の身体能力を遥かに超えるスピードで一気に距離を詰め、その勢いに乗ったままスライディング。ほぼ同時のタイミングでルパートの長剣が振り下ろされる。が、

「……」

ガンッ！ と、辺りに響くのは虚しい打撃音。

つい一瞬前までルパートの足元にいたリイナの姿は、跡形もなく消えていた。

いや正確には、猛烈なスピードで割り込んだ紫音が、盾と剣をくぐり抜けてリイナの体を引き抜いたのである。その人間業とは思えない荒技に、そこにいる誰もが押し黙った。ほんの一瞬の出来事。その『一瞬』という刹那の瞬間に、あの少年は騎士団最強の団長を一枚出し抜いたのである。

そして当の本人は、胸にリイナの体を抱きかかえ、ルパートと騎士の大群に挟まれる状況にも関わらず実に冷静に言葉を発していた。あくまでも手の中にいる華奢な少女に対してだが。

「大丈夫？ 少し痛かったろ？」

対すリイナはしばらくその言葉に呆然としていたが、突如として怒りで顔を真っ赤にするといきなり大声で叫んでくる。なんだよ、元気じゃん。

「大丈夫、じゃないよ！ 君なんで来たのよ！？ せっかく君のことも考えて出来るだけ速くこの街でようとしてたのに、なんでわざわざ追ってきちゃうのよ！」

「へえ……そんな風に気遣ってくれてたんだ」

「うつ……」

「でも結局この様じゃ意味ないよね」

「うつ……」

「泣き顔、可愛かったよ」

紫音が何か言う度に、怒りで赤かったはずの顔が段々羞恥へと切り替わっていくリイナ。何もいえなくなつて顔を真っ赤にしているこの姿と来たらもう、弄り甲斐がありすぎて困る。

といつても、そういうお楽しみは後回しだ。今はこの状況をなんとかするのが先だろう。

胸にリイナを抱えたまま、紫音は辺りへと視線を巡らせる。右にはルパート、左には騎士のバリケード。もちろん一本道なので逃げ場は他になく、確実に挟み撃ちだった。もう少しリイナの救出方法を考えた方がよかったかもしれない。

「し、シオン君……」

リイナから心配そうな声が漏れる。

「大丈夫、何とかするから」

それをどうするか悩んでいるのだが。

おそらく逃げるのは難しいだろう。よくよく見れば近くの建物の合間合間に路地裏への道があるが、仮にそこへ逃げ込んだとしてもそれこそ袋のネズミだ。一網打尽だろう。しかだからといって正面から戦うのは、あまりのも分が悪すぎる。紫音一人だけならまだしも、同時にリイナを守りながら戦うのでは話が違ふ。特にあのルパートという男、騎士団長だけあつて一体何を仕掛けてくるのか分かったものではない。正直、いくら紫音でもリイナを守り抜ける自信はなかった。

（となると、導き出される答えは一つなんだけど……）

ふと、視線を自分の右手甲に落とす。そこには鉄の半球が……いや、正確にはこういう形をした『釘』が突き刺さっていた。それは美弦紀の人間として一人前と認められた証であり、美弦紀流本来の莫大なエネルギーを封印している小さな枷。

致し方ない、よな。

この際だ。今日出来た新しい『友達』を助けるためだと思えば、これを使うのに不思議と躊躇いは薄れていった。
と、

「ふふ、ふふふ……面白い、君は実に面白い。幾度となくこの私を驚かせてくれる……」

紫音とリイナの見据える先で、不意に不気味な笑みを浮かべ始めたのはルパートだ。まったくもってホラー映画に最適な顔面してやる。

「たった一人で我らが小隊を潰したといい、今の動きといい、どこまでも私を愉しませる。どうだね？ この際君の罪は全て抹消しよう、我が軍に入らないか？」

「やだね」

もちろん紫音は即答である。こいつらみたいな腐った騎士道精神貫いてる場所に入隊するぐらいなら、生涯ずっと犯罪者の方がまだマシだ。

「生憎と俺は、この一生で仕えても良い人間はお姉ちゃん一人なんだよ。お前らみたいな弱小チームには興味ない」

「だが君、この状況をどうするといふのかね？ たった一人で、しかもその娘を守りながら、我ら全軍を相手に出来るとでも思っているのか？」

「……」

「私はチャンスを与えているのだ。君のその実力を賞賛して、君のためにチャンスを与えているのだよ。君はその誘いを、絶好の機会を、逃すといふのかね？」

確かに冷静に考えてみれば、その誘いは紫音にとって絶好の機会なのかもしれない。

なんたつて紫音の本来ある目的は元の世界へ帰ること。効率よく情報を集めるのなら少しでも動きやすい地位に立ったほうが良いのだろう。それこそ王国騎士団に入ってしまったえば職権乱用もし放題に違いない。

だがそんな目的よりも、この世界に来る前から何より大切なものが紫音にはある。それは万屋としての自分。万屋として、たった一つの冴えない仕事でも全力で取り組む自分自身。何度も地獄を見て、

大切な姉すらも失って、それでもそんな紫音を支えてきたのはそれだった。いくら元の世界へ戻るためとはいえ、心の支えでもあるそれを投げ捨てることなんて紫音にはできなかった。できるはずがなかった。

いつまでも沈黙を張り通している紫音に、ルパートは拒絶の答えを悟ったのだろう、「そうか」と一言。

「……ならば仕方ない。女もろとも、この場で捕縛する」

その言葉にはルパートの確信が宿っていた。紫音とリイナを確実にひれ伏せることができると、自信を持っている態度。なんたつてこの数と戦力、いかに紫音が強くとも個々の実力では限界があるのだ。

頃合を見計らっていたのだろう、騎士達の大群がゆっくりと武器を構えて動き出す。

「シオン君！」

抱えるリイナが慌てた声を発した。このままではまずい、危険だと、彼女の脳内にも危険信号がサイレンを上げているのだろう。

それらを一瞥して、美弦紀紫音は――、

「……リイナちゃん、できるだけ俺に強く掴まって」

彼のあまりにも冷静すぎる言葉に、リイナは思わずといった感じでキョトンとしていた。

だがいちいち説明などしている暇はない。

（――一撃だ）

一撃で、終わらせる。

手馴れた動きで紫音は右手甲の『釘』に指を引っ掛け、それを――

月明かりに照らされ、一時の祭典に身を焦がす人々。

その時、とある少年の小さな叫び声と、大地を揺らすような轟音が響いたのは、ほぼ同時だった。

ガシャガシャ、という鎧を揺らす音と、時折人の叫び声がどこから響いている。

そんな中紫音とリイナは、とある建物に背を預けて地面に座り込んでいた。ついさっきまで全力で走っていたせいで紫音の息はちょっと上がっている。と言っても軽く胸が上下する程度だが。

「ねえ……さっきのなんだったの？」

隣に体操座りで座り込んでいるリイナが、紫音の右手に突き刺さる『釘』を見ながら訪ねてきた。その声色にはなんだか戸惑いが見え隠れしている。おそらく聞いて良いものかどうか、悩んでいたのだろう。

それに気になるのも仕方ないと思う。騎士団の連中はともかく、紫音に抱きかかえられその光景をもっとも間近で目撃したリイナなら尚更だ。紫音がこの『釘』を抜いた途端あの一撃、疑問に思うのも仕方ない。

「いくらなんでもアレはおかしいよ……。君、晶術使えないんでしよう？　いくら鍛えてるからってさっきのは無茶苦茶よ……」

「ははっ、鍛えれば誰でも出来るって」

「いや無理でしょ！　いくらなんでもたった一発であの大群を吹っ飛ばすなんて人間業とは思えないよ！」

「俺は完全超人だからな」

はっはっは、と適当に笑い飛ばしてみる。「またそうやって誤魔

化すんだから……」とリイナはぐちぐち言っているが、実際本当に鍛えるだけでこの体が手に入ったのだから仕方ない。ちよつとその鍛え方が異質すぎた、それだけの話である。

少し説明が遅れたが、二人がどうやってあの状況を打破したのかと言うと、ただ単に紫音の一撃で騎士達の作っていたバリケードを叩き崩し、姑息な手を使わず正面から逃げたのである。街の外へ逃げなかったのは一種の勘というやつで、正面門から見た外の世界が地平線まで草原一色であまりにも見つかりそうだったので、一旦道行く道を突き進みここまで辿り着いたのだ。

それなりの距離を走ったのでしばらくは見つかることもない。こうやって座り込んで、二人して休んでいるのだ。

「シオン君って隠し事多いよね……」

「いい男には秘密が付き物だ」

「普通それ女でしょう。……てゆうかよく自分でいい男なんて言えるわね」

「自信過剰ですから。そういうリイナちゃんだって隠し事だらけな気がするけど？」

見なくても分かる。隣で、うつ、とリイナが言葉を詰まらせたのが何となく分かった。自ら図星ですと言っているようなものだ。た。そういうところが可愛いというかなんと言うか、弄り甲斐がありすぎる。もしかするとそこを徹底的に攻め続ければDS属性のある彼女をDMに変えられるかも、と得体の知れないことをつらつら考える美弦紀紫音だった。

「そ、そうなればもしかすると、俺に対してもあんな事やこんな事……」

「……シオン君笑い方気持ち悪い。実は君サドだったりするでしょ」
「それはまあお姉ちゃんはDSだったし……い、いや！ 違う！
俺は決してSなんかじゃないぞ！ お姉ちゃんにハードMとしてたつぷり調教された思い出が俺にはあるんだ！」

「？ ナ二星とチャネリングしてるのよ」

男にはどうしても譲れないことの一つや二つ、必ずある事がこの娘はわかつとらんようなだな。その時なぜか哀れみの目を向けられた気がしたがその辺は無視しておくことにした。

ふと、会話が途切れる。

別に何かあった訳ではない。ただ単に言葉を失った。口を開いてはいけないような、そんな気がした。

空を見上げると、そこには元の世界と何も変わらない、まん丸のお月様が浮び上がっている。そこから降りる微かな光が、お祭りで歓喜するこの街を照らし出していた。

(……)

若干耳に届く、人々の歓声。打楽器の音。おそらく紫音とリイナを捜しているのであろう、鎧を揺らす騎士達の足音。叫び声。

何も考えずにこうやっている、やはり紫音を襲うのは『孤独感』だった。自分だけが違う。周りの空気と何もかも違う。それらの現実を嫌でも実感させられ、彼の体は身震いしてしまう。

でも、と思う。

視線だけを隣に向けると、そこには紫音と同じ孤独に包まれる少女がいた。事情は分からない。向こうも喋る気はさらさらないのだろう。でも分かる。騎士団に追われる、たったそれだけの事実で孤独になってしまった女の子。どうしても紫音には、それを放っておく気になれなかった。親近感を覚えたのか、今日一日で芽生えたちっぽけな友情からか、理由は分からない。だけど、なぜか、この華奢な少女を助きたい、そう思えることができた。

「—— 独り、だったんだね」

自分でも驚くぐらい、自然と口が動いていた。

「ずっと独りだったんだよね」

「……」

少女は腕の中に顔を埋め、何も言わない。

「寂しかったよね？」

何も言わない。

「苦しかったよね？」

何も言えない。

そして同時に、それはこの小さな少女が表すちっぽけな感情を意味していた。くだらない、どうしようもない理由で追われる身になって、仲の良かった人ですら彼女から離れていく。残酷すぎるその光景が嫌でもハッキリと想像できてしまつて。

でも紫音は違う。

例えいかに困難だろうが面倒だろうが、一度助けると決めたら途中で投げ出したりなんかしたくない。

隣にいるこの小さな女の子を、助けたい。

「もう大丈夫だよ」

今日何度目だろうか、少女に対して「大丈夫」と言葉を向けたのは。

これはおそらく重症だ。よほどこの一日でリイナ・グレーティア・セツティに対する執着が増してしまつたらしい。

「俺で良ければ、君を独りにはしない」

その言葉が意味するのは何なのか。

それを察したリイナは、驚いた様子でこちらに振り向いた。信じられないとでも言いたげに両目を見開いてる彼女に対し、紫音は笑いかけ、言つた。言つてやつた。

「街の外に逃げるなら、俺も着いていくよ。その旅に」

それは小さな小さな宣言だつた。君を独りにはしない、それを指す意思表示。

リイナは相変わらず驚きの様子を隠せないでいるが、紫音と視線があつた途端慌てて顔を腕の中に埋める。なぜだか耳が赤くなつているのは気のせいだろうか？

「ど、どうして？」

「ん？」

「どうしてシオン君は、そんなに私に構ってくれるの？」 リイナはそっぽを向きながらも言葉を紡ぐ。「だつておかしいじゃない。

いくらお話して仲良くなったからって、今日会ったばかりなんだよ？ 私を助けるだけで罪が重くなるんだよ？ 助けたってなんのメリットもない。なのにどうして君は、何度も私を助けようとするの？」

彼女の言葉はもつともらしい疑問だった。

いくら紫音がリイナを助けたからと言って、何か盛大に良いことがある訳ではない。むしろ悪いことのオンパレードだ。余計に騎士団からのマークが強くなって、より一層危険人物として注目されるだけである。そんな事なら、リイナのことなど放っておいてさっさと元の世界へ戻る方法を探す方が明らかに良い選択なのだろう。

「理由なんて分からないさ」

だが、それがどうした。

何度も言うが、美弦紀紫音は一度助けると決めたら答えは曲げない。そういう考えの持ち主である。

「俺がリイナちゃんを助けたいと思った。だから助けた。細かい御託なんてどうでもいい。誰かを助けるのってそういうもんだろ？」

「でも……」

「でも何もない。それに今更どうこう言ったって俺はもう立派な犯罪者だよ？ この街に残ったって、それこそ危険な道じゃないか」それを言われたらさすがのリイナも返す言葉がないのか、ごによごによ言いながら黙り込んでしまう。

……と思ったら、想像以上に彼女の答えはあっさりしたものだっ

た。

「……一緒に来てくれるの？」

「着いていくって言ったでしょ？」

「……馬鹿」

なぜに。

思わぬ暴言につい言い返そうと口を開きかけるが、それよりも早くリイナの言葉が割り込んだ。

「——、ありがとう」

「……………く、苦しゅうないぞ」

最初の空白は気にしないって方向性で。

べ、別に恥ずかしいとか思っていないんだからね！ か、勘違いしないよねっ！

なんだかこの沈黙がやるせない気持ちになってきたので、必死に次の言葉を考えた紫音は、

「ウブな娘よ。俺様に惚れたな」

「な……っ！？ そ、そんな訳ないでしょ！ 誰が君みたいな頭の悪い節操なしなんか惚れるもんですか！」

「とか言ってそれが『好き』に変わったときって激しいんだよね。特に腰振りとか」

「こ、ここ、ここここ腰振り！？ なんで君はそう軽々とセクハラ発言できるのかな！ 最低！」

「……その激昂も実は本気ではなく、日常の枠外から外れた行動に極度の緊張を得たから出てくる罵詈雑言。これをきっかけに俺に対して好意を抱く可能性が！」

「……ッ！ もう訳わかんない！ 変態！ 馬鹿！」

場違いなほどに、二人の叫び声が夜の街に響き渡る。

久々だな、誰かとこんなに話したのは。

そんな事を考えながら、美弦紀紫音は傍らの少女に言葉を掛けた。

第11話：旅立ち

「団長、よろしかったのですか？」

あの交戦から数時間――。

王国騎士団の拠点でもある正義を象徴するジャスティア教会に向けて、ルパート率いる全軍は撤退を始めていた。

いや、実際交戦と呼べるほど長い間の戦闘ではなかったのだが、現実はその数分で勝敗を別けていたに等しい。ルパートとリイナの戦闘。あれ自体は確実にルパートの勝利と言える結果だっただろう。しかし問題は『あの少年』が戦いの場に乱入してからだった。

少年は立ちほだかる王国騎士団全軍を相手に、恐ろしいことになった一撃で勝負をつけてしまったのだ。それはあまりにも常識を逸して、間近で見ていたルパートですらあの光景は信じがたい光景であった。

しかし全軍壊滅といっても、決して重症者や死者が出ているなんてことはない。まるで全て狙っていたかのように、どの兵士も『ある一定』のラインまでしかダメージを受けておらず、誰一人戦闘不能者が出ていないのだ。

だがいかに低いダメージでもその規模が莫大すぎる。あの少年は己の一撃を持って、騎士団広範囲に効果を与える小ダメージを繰り返し出したと言っわけだ。どう考えても人間業とは思えない。仮に段階の高い晶術行使したのなら考えられないことはないが、残念ながらあの少年が晶術を使っていた様子が何一つ見当たらなかった。

まったくもって謎である。

だからこそ、面白い。

ルパートの口元には、知らず知らずのうちに小さな笑みが浮かんでいた。

「確かに先程の戦闘で全軍に大きな被害が出来ましたが、皆まだまだ剣を構える事は出来るはず。逃亡した奴らはおそらくまだ街の中でしょうし、門に部隊を張っていれば少なくとも街の外へ逃がす事はないと思うのですが……、団長？」

斜め後ろを歩くイーノスが怪訝な様子で訊ねてくる。ルパートの意味のない笑みをおかしく思ったのだろう。

「いや、何でもない」彼はすぐに表情を改めると、「……ふむ、正攻法で考えるとお前の考えは正しいだろう。だが、よく考える。奴らはもうリナ・グレイティア・セッティだけではない。我々にここまで損害を与えたあの男も一緒にいる。仮に先程と同じく全軍を正面門に配置したとして、それからどうなるか。分かるか？」

改めて正面を見直すと、騎士団の先頭を進むルパートは右へ折れまがった。もちろん後ろに付いてくる騎士達もそれに着いてくる。

街の大広場では未だ面踊りの祭りは続いていた。街の人間に物騒な雰囲気を与えないためにも、あえて遠回りしながら教会へ戻らなければならぬのである。

「この無駄に広い王都のどこかに隠れているであろう奴らは、体を休ませたらずにでも街の外へ出ようと正面門に赴くだろう。もちろん休んだのだから、『体力を回復』してだ。お前も見ただろう？」

あの男が繰り出した一撃を。たった一撃で我が軍はこの様だ。だというのにも関わらず、あの男に全力でやられたら……、少なくとも今以上の大打撃は覚悟せねばならんだろうな」

「……つまり、これ以上の損害を受けないためにも、今回は見逃して今後に備える、と？」

「そういう事だ。私とて、何も考えていない訳ではない」

「しかしお言葉ですが、リナ・グレイティア・セッティを捕縛する任務は最重要任務。かの有名なあの^{……}大財閥からの依頼です。こう

もみすみす機会を逃しては、今後に響く可能性が十分にあるのでは……」

今回の問題はあの少年についてだけではない。むしろあの少年以上の大問題が上乘せされている。

リイナを殺さずに捕まえるというこの依頼は、世界的に有名な大貴族——その当主から頼まれているのだ。理由はもちろん分からない。それはルパートら騎士団の知った事ではない。何より問題なのは、仮に依頼に失敗したり、相当な時間を食ってしまうと当主の怒りを正面から買う事になり、騎士団そのものの存在が危うくなるのだ。

スケールの大きい事に聞こえるかもしれないが、依頼主はそれだけの大貴族。金と名声、なによりそれだけの地位を持っている。王国騎士団程度、軽くひと捻りするぐらいどうってことないのである。「そのための撤退だよ、イーノス」ルパートはたそがれるように夜空を見上げ、「知っているか？ 星の光も日の光も、すべては魔力の波と言われている。魔力は時として人の思う思考を現実とする。個人が個人の、自分だけの現実を作り出すのだ」

「は、はあ……？」

「私には私の現実があり、お前にもお前の現実がある。私は私自身の現実に従っているのみだ。なに、イーノス。お前が心配する事ではない」

「……つまり隊長は、隊長個人でやりたい事がある、と？」

「ああそうだ。多少調べたい事があつてな。心配せずとも出来るだけ早く終わらせるさ。お前達はいつお通り任務に勤しんでおけば良い」

ルパートがそう言うと、イーノスは特に言及してくる事はなかった。聞いたところでどうせ何も答えてくれない、と薄々思っているのだろう。

「ところで、イーノス」

視線は前に向けたまま、少しずつ見えてきたジャスティア教会の

建物に視線を注ぎつつルパートは傍らの部下に訊ねた。

「お前は『あの少年』と真正面から剣を交えた事があるのだったな？」

「？ ええ、まあ。と言つても向こうは武器の持たない丸腰でした……」

その時の戦いの事でも思いだしたのだろうか、イーノスは僅かに渋い顔をする。しかしそれも仕方ない。騎士とあろう者が剣を手に取りながら、素手の相手に敗北したのだ。しかも部隊は全壊。軽い黒歴史に刻みこまれてもおかしくはない事だ。

「……あの少年の事を、お前はどう思う？」

「どう、と言いますと？」

「何でもいい。特徴でも外見でも、お前の思うところはどうか？」

イーノスは少し考える素振りを見ると、

「ほぼ全て、ですかね」

「……」

「都会の人間とは思えないような庶民の立ち振る舞いもそうですが、見た事もない奇妙な服装に、滅多に見かける事のない黒髪黒目。そして何より、晶術をまったく使っていないにも関わらず我々を壊滅させるような身体能力」

彼は続ける。

「あの少年、どこからどう見ても違和感の塊でしかありません。どこ出身なのか、そしてどこで育ったのか。それが分かればまだ違和感の半分は拭えるかもしれませんが、それすらも分かりませんからね。……私的には、謎、というのが今の答えだと思います」

「ふむ……」

イーノスの言う事はどれも正論だった。ルパート自身も彼と同じような事に引っ掛かっているのだから。

立ち振る舞い、資格好、黒髪黒目、そして圧倒的实力。あらゆる方向から見ても違和感を感じずにはいられない謎の少年。

イーノスには言っていないが、今回リイナ・グレーティア・セツ

ティを逃がしたのにはもう一つ理由があった。あの少年がなぜリィナを守るのか理由は不明だが、ルパートは今回の戦闘で薄々気付き始めていた。

今の騎士団ではあの少年に勝てない。

いくら汚い手段を使っても勝てる気がしない。なぜかそう思ってしまうのだ。

あの少年がリィナ・グレーティア・セツティの傍にいる限り、彼女を捕らえる事は不可能だと、ルパートの本能が告げていた。例え何度街の正面門を塞いだところで、いずれは破られ強行突破される。それほどまでに少年の力は圧倒的で、ルパート達の思う常識を完全に逸していた。

（それでも無理に塞ぐという手段もあるが……、そのような無茶な手段、団長として命じる訳にもいかない）

ルパート・アルビン・ノリスは思う。

元々はただの目標を捕縛するだけの任務だと思っていたが、実はそうでもないらしい。

リィナ・グレーティア・セツティと名乗るな……ぜかかの大財閥に狙われる少女と。

それを守り、身の危険を顧みず少女の傍にいる謎の少年と。

謎は深まるばかりだが、ただの任務とは考えにくい。ただの捕縛任務が、ここまで謎を呼ぶものではない。必ず何かがある。そう思った。

この状況で、騎士団団長の立場としてはどうすべきか。

ルパートの考えはとつくのとうに決まっていた。

「……色々と、調べてみる必要がありそうだ」

「団長……？」

不思議そうな様子で訪ねてくるイーノスに、なんでもないと片手で制すと、ジャスティア教会へ注がれていた視線を再び夜空へと移す。

そこには爛々と輝く無数の星。

それらをただ静かに見つめながら、ルパートは悠然と自分自身の決意を固定した。

日本でいうなら、早朝4時ぐらいだろうか。

辺りはまだ暗闇に包まれているが、万屋として自然と身に付いた体内時計が大体の時間を予想させていた。

いくつも建ち並ぶ家並の影に身を隠しながら、美弦紀紫音はそつと顔を覗かせる。緊張の面持ちで見つめる先は、王都アルスウエルの正面門だった。

（人影はない、か）

そう思うと同時、紫音は家の影から飛び出し、開け放たれた正面門のすぐ手前まで駆け寄った。そこで辺りを警戒するように視線を巡らせ、ふう、と一つ溜息。ある一点へ向けて手招きをした。

「大丈夫だよ、誰もいない」

紫音がそう言うと同時に影から小走りで出てきたのは、リイナである。ふと彼女の顔を見るとなぜか呆れたような表情をしていた。はて、紫音は何も機嫌を損ねるような事した覚えはないが……、

「シオン君さあ、そんなに警戒することはないのに」

「え？」

「だって数時間前に見たじゃない、騎士団が列作って撤退してるとこ。それをわざわざ見という、今更警邏があるとか考える必要ない

と思うんだけど」

どうやらリイナの奴、いちいち周囲に警戒しながらコソコソ動くのが気に入らなかつたらしい。まあ、紫音からしてもそれには一理あるし彼女の性格からそういうのは気に食わないのかもしれないが、

「あのなあ、リイナちゃん」

敢えて言おう、経験者は語会的な意味で。

「油断大敵、って言葉ぐらいは分かるよね？ ……つまりそういう事だよ。何かから追われる立場ってのはどんな時でも警戒を怠つちやならない。それ1つで命に関わることだってあるんだから」

それだけ言つとリイナはますます嫌そうな表情を浮かべた。

「それはそうだけどさー、いつまでも気を張り巡らせていたら精神的に参っちゃうよ」

「もちろん1から10までずつとは言わない。自分にとって絶対に信頼を置ける場所なら十分に休めばいいと思うよ。例えば自分の自宅とかね」

「えー……」

リイナはまだ文句を言いたそうな表情だが、紫音の言っている事があまりにも正論すぎるせいだろう。何も言えずゴニョゴニョしているだけだ。

が、

「てゆうか、信頼のできる場所ならもうあるよ……」

ふとそんな事を呟いて、なぜか紫音の顔をチラチラと見てきた。

彼女の頬が僅かに赤いのは気のせいではないと思う。紫音の顔に何か恥ずかしいものでも付いているのだろうか？

「？ えつと、なに？」

「……別に何でもないよ」

そう言つとリイナはبيضと顔を背け、紫音を置いてさっさと歩きだしてしまつた。呆れられた次はなぜか怒らせてしまつたっぽい。でもそんな表情の変化が、ヤダ可愛い……、とか思ってしまったの

は内緒である。

（にしても、街の外つてのはじっくり見てみると凄いもんだな……）

紫音の見つめる先には正面門の奥——つまりアルスウエルの外の世界が広がっていた。

そこにあるのは、どこまでも、どこまでも、壮大に広がり続ける緑色の草原。元の世界じゃ絶対に見れないような光景だった。夜闇に包まれ、風によって草葉っぱが優しく揺れるそれは幻想的の一言に尽きる。紫音の中ではまるで世界遺産でも見つけたような、それほどまでに貴重なものを見ている思いに駆り立たされた。

「シオンくん？」

外の世界に思わず視線を奪われていると、彼の数十メートル先ですでに街の外に出ているリイナが呼んでいるのが聞こえた。おそらく彼女にとってこれほどの光景も当たり前の事なのだろう。何度も何度も飽きるくらい見せつけられ、彼女の中ではマンネリと化しているのだ。

再び育ってきた環境の違いを発見してしまい思わず苦笑の漏れる紫音は、草原からリイナへと視線を戻して、真っ直ぐと歩き始めた。そして一歩ずつ歩みを進めながら、彼は思う。

この先に待っているのが一体何なのか、今の紫音には分からない。いや、それは紫音だけではない。この世界にいる誰もが、自分自身の未来なんて分かったものじゃない。それこそ自分が異世界に落とされてたった一日でとんでもない状況に陥ってしまったら、未来なんて考える前に今この瞬間こそが悩みの種になってしまふ事だろう。

だが、今ある美弦紀紫音は、自分でも驚くほど心が軽かった。

リイナと一緒にいるからなのか、それとも莫大な金を所持しているからなのか、細かい事は分からない。だけどこれだけは分かる。

紫音は違和感を覚えるぐらい冷静で、面白いぐらいにこの先の未来に気分が盛り上がっていた。

もちろん心配なところもある。

恐怖だつて、僅かながらある。

でも、それがどうしたというのか。

結局、何がどう転がったって今の美弦紀紫音がやるべき事はたった一つ。

前へ進む。ただそれだけだ。

「——あのさ、リイナちゃん」

気付いた時、紫音はリイナの背中へ言葉を掛けていた。

「君がどういう目的で、一体何があつて騎士団の連中から追われているのかは分からないけどさ……」

不思議な様子で肩越しに振り向いてくるリイナの顔を真正面から見つめて。

自然と軽く微笑んで。

なんの迷いもなく、紫音は口を開いていた。

「もし……もし、リイナちゃんがその気になつてくれる時が来るのなら、いつか話してくれないかな。君が追われる本当の理由」

リイナが目を見開いたのが分かる。紫音の言つた事が少し予想外すぎたのだろう。

しかし、彼女の驚きはそこまでだった。たぶんリイナも同じ気持ちだったのだ。何となく、本当に何となく、目の前にいる少年少女の事をもっと知りたい。もっと理解してみたい。そんなちっぽけすぎる気持ちだ。

リイナはしばらく黙り、紫音の方へ向けていた視線を一度外すと、体ごと、こちらへ振り向いた。

その時の彼女は、小さく、可愛らしく、微笑んでいたと思う。

「——気が、向いたらね」

瞬間。

草原の向こうに見える地平線から、一筋の光が漏れだした。

地上を明るく照らすそれは新たな一日の始まりと、一日の終わりの

を意味していて。

美弦紀紫音は今までの人生にない新たな旅を目の前に見据えて、
一歩、外の世界へと踏み出した。

第11話：旅立ち（後書き）

さてさてこんにちわ、またはこんばんわ、悠理です！

今回の11話は序章の完結まで、ってことで少し短めに終わらせておきました。

ええそうです、ようやく序章がこれにて完結です！

序章は大体の世界観説明、紫音とリイナの出会い、でもって旅立ちまでの物語。つまり言葉の通り、「俺たちの戦いはこれからだ！」的なところまでって事です。

いや、やっとですよ。。やっと旅立ってくれましたよ主人公。。作者的にそろそろうんざりし掛けてたところなんですよ（おい

しかしまあ、旅立ってくれたからにはこれからです。これからの旅で、おバカな二人にも仲間が増えたり、紫音の過去に関する伏線が張られたり回収されたり、ようやく本当の意味で物語が始まった事になります。

腕が鳴るぜwww

そして察しの良い読者様ならお気づきかもしれませんが、『冴えない仕事』は他のファンタジー小説と違って、章区切りで進むお話となっています。

つまり『第一章↓第二章↓第三章↓・・・』という感じ。ちゃんと話はずなげますが、紫音やリイナと主に関わってくる人達が違いますし、章ごとに問題解決↓次の章へというライトノベルによくありがちな方法で進めていくってことでせう。

まあ細かい事はまだ分かって事でww

紫音やリイナ、そしていずれ増えていくであろう彼らの仲間たちの

今後の展開に期待しつつ、更新をお待ちくださいな。

では!!

第12話：可愛いものは可愛い

美弦紀紫音は目を据わらせ、目の前の敵を睨みつけた。

そこにいるのは四足歩行の藍色の毛並みをしたオオカミ。全長は1.5メートルほど。リイナがいうにはバインドウルフとかいうイカした名前のオオカミらしい。王都アルスウェルがある大陸を主な住処とし、群れでの行動をあまり好まず単体でウロチョロしている事が多いとか。大して強い訳でもなく戦闘慣れしている旅人からはただの邪魔者扱いで、戦闘経験のない素人からしてみれば恰好の練習相手らしい。

紫音は真剣な眼差しでそんなバインドウルフを睨みつけ、真正面から退治している真っ最中だ。本来ならば紫音ほどの実力があれば一瞬で決着を付けれるところなのだが、正直に言わせてもらおう。無理っす。

（……だつてさ、あれ見た目はただのオオカミじゃん。こうやって正面から見つめあつてると、段々愛くるしさが出てくるもんなんだぜ？ ほら見るよあのクリクリした可愛い瞳。俺のハートがキヤッチされたね。それをこの手で殺すなんて……お、俺には出来ない……ッ）

この思考がこっちの世界の人間に聞かれたらただのアホでしかないのだが、ここは立派な日本人として純粋な心を持たねばなるまい。完全超人とかそんなチャチなものでなんとかなる状況ではないのだ。美弦紀紫音は今、自分自身の葛藤と戦っているのだ。

ガルルル、と牙をむき出しにして唸るオオカミ。その威嚇自体、本来ならば怖がるところだが今の紫音にはそれすらも可愛く思えて

しまった。なんかもう、視覚に映ったオオカミが脳内で自動変化されて柴犬に見えてしまう的な、そんな感じ。

（だ、ただ、駄目だ。やっぱり俺には動物虐待なんてできないッ！
そもそもこの世界の常識が間違ってるんだ！　こんなに可愛い生き物を躊躇いなく殺すなんてどうにかしてやがる！）

その瞬間だった。

紫音の内面的な焦りを感じ取ったのか、オオカミが芝生の地面を踏みしめ、一気に飛びかかってきた。

もちろん美弦紀流の修行をしてきた紫音がそれに反応できないはずがない。しかし今は状況が違う。何が何でも傷つける訳にはいかないのだ。その為カウンターという言葉は即座に頭から抹消し、紫音は間一髪のところまで体を捻った。

ギリギリのところでオオカミの攻撃をかわし、体勢を立て直す――訳でもなく、紫音の動きは早い。そのままオオカミの後ろ首、つまり肉のダブっている部分に手を伸ばし思いっきり掴むと、軽く手前に引き寄せつつ最低限の力で地面に押し倒した。

キャン、という小さな悲鳴が鳴る。だけど今は我慢してもらえない。

そのままオオカミの動きを封じるように背中にあたると、紫音は一瞬にしてマウントポジションを取っていた。これで勝った、と思った。あとはこのままオオカミが落ち着くまでこの体勢をキープし続けられただけなのだ。

が、そんな時。

「シオン君ナイス！」

突如響く、声。

地平線まで見える壮大な草原の中心で、女の子の透き通るようなその声は響き渡った。

「へ？」

そして、紫音が思わず顔を上げたその直後。

風を切って飛来する一振りの短剣。

それは一寸の狂いもなくバインドウルフ目掛けて空を飛び――
その額に、突き刺さった。

悲鳴はなかった。

それを見た時、すでに事は終わっていた。

紫音が跨っている柴犬おおかみの額には片手持ちの短剣が深々と突き刺さっており、そこから緑の芝生を赤い液体で染め上げていく血液が流れ出ている。ここまで接触しているから分かる。分かってしまった。今ここにいる柴犬おおかみは、もうすでに――（紫音ビジョンでお送りしています）。

「あ……あ、……」

「シオン君はやっぱり、状況判断とかもすごい得意だね。少し尊敬しちゃうよ」

ピクピク震えながら声のした方に振り向くと、そこにいたのはリイナ・グレーティア・セッティその人だった。片手で短剣をクルクル回しながらこちらに歩み寄ってくる。

「殺傷力のない素手じゃ決着付けるまでに時間掛るって思ったんだよね？ だからわざわざ抑え込んで私に仕留めさせるなんて……、あの数秒でそこまで頭の回る人なんて滅多にいないよ」

いい終えたリイナは紫音と屍となったオオカミの前で立ち止まり、すつと空いている手を伸ばす。それはオオカミの額に突き刺さっている短剣の柄を握り締めると、

引き抜いた。

それはもう軽々と当たり前のように。

紫音の限界はここまでだった。

「き……、き……」

「？」

「き、貴様アアあああああああああああああ！！ 動物虐殺、イクナイツー！！」

ガバツ！！ とんでもない勢いで立ち上がり突如絶叫した紫音に、リイナは『は、え？』と目を白黒させている。しかしそんなもの知った事か。それ以上に今の紫音は怒りに燃えていた。今なら視線だけで油を点火させれる気がする！ むしろRPGの魔王様ぐらいは殺せそうな気がするっ！

「……よ、よよよ、よく、よくも俺の前であんな可愛いわんわんを……。何だかんだ言っても、リイナちゃんとなら何とかやっていけそうとか最近思ってたよ。ついさっきまではッ！」

「ちょ、シオン君？ 少し落ち着こう？」

「これが落ち着いていられるか！ やっぱり駄目だ、この世界の間はどいつもこいつも心がどうにかしてやがる！ こんなふざけた幻想はどっかの誰かさんにぶち殺してほしいくらいだ！」

「お、おーい。シオンくん」

「うるせえ！ この動物殺し！ お前なんか動物ナンタラ法で警察に捕まっちゃえ！」

「……」

「く、くそ……こんな事ならアルスウェルを出る前に馬車でも買っておけばよかった……。そうすればモンスターも寄り付かなくてこのわんわんを殺さなくても済んだのに！ 俺の馬鹿野郎！ そしてリイナちゃんの馬鹿や」

紫音の言葉を遮るように、数瞬で喉元に何か突き付けられた。正直見えなかった。視線だけを持っていくと、それはリイナの持つ短剣。ついさっきわんわんを刺殺した短剣。まだ赤い血がこべり付いてるのが謎の雰囲気放っていた。

ダラダラダラと紫音の額に冷や汗が流れ出てくる。

神は言っている。

謝った方がいいんじゃない？

「……すみません、出過ぎた事を言いました」

「よろしい」

取りあえず紫音の言葉に納得してくれたのか、リイナは短剣を引

いてくれた。

普通に身の危険を感じました。いやマジで。

「大体君、さつきから何をギャアギャア言ってるのよ」大人しくなった紫音に彼女は呆れ顔を向けつつ、「私が動物殺しとか、いきなり馬鹿呼ばわりとか……。そんな事言われる筋合いはないんですけど」

「で、でもおまつ、さつきそのわんわんを容赦なく……！」

慌てて屍となる柴犬^{おおかみ}を指差して叫ぶが、それを見たリイナは『はあ？』とでも言いたそうな表情で顔をゆがめた。

「わんわんって……もしかして君、このこと愛くるしい子犬か何かだと思ってる？」

「思ってる」

「開き直らないでねお馬鹿さん。正体不明の幻覚攻撃でも受けてんの？ 田舎育ちな君の為に一応言っておくけど、こんなオオカミでも人を容赦なく襲ってくるモンスターなんだから。言い方変えるなら魔物。そこんとちゃんと分かってる？」

もちろん分かる訳がない。

逆に言うなら、そんな魔物でもこんなにも可愛い顔をしているのだ。別に紫音は動物愛好家って訳でもないが、ここは立派な日本人として自ら命を奪うなんて出来る訳がなかった。

「くそ……、これも育ちの違いって奴なのか。お前らにも本物の柴犬って奴を見せてやりたい……」

「また訳の分かんない事を……、ってシオン君！ 後ろ！」

リイナの叫びに疑問符を浮かべながら後ろに振り向くと、そこにいた異物を捉えて思わず紫音は目を見開いた。

一言で言うならスライムか。

薄緑をしたうによした不定形の物質で、明らかにゼリー状の体をしている。透き通ってる体の中心——そこには野球ボールほどの赤い球体が埋まっており、何となくそれが本体なんだと本能的に理解する事が出来た。

薄緑をしたスライムはまるでネジのように体を回転させて幾度と

なく自身を捻ると、瞬間、トルネードアタック的なノリで紫音目掛けてタツクルしてきた。どう考えても攻撃である。そして――、
「気持ち悪い」

振り上げた足で踏みつぶした。

ぐちゃっと、人間で言うなら人肉であろう薄緑のゼリーが周囲へ飛び散る。もう一度言おう。気持ち悪い。激しく気持ち悪い。俺はこんな奴、絶対に魔物だなんて認めないぞ。絶対にだ！

「シオン君さ、言ってる事とやってる事が真逆なんだけど……」

リイナの言葉はスルーしておいて、とにかく紫音は目の前の汚物を抹消することにした。とにかく踏み潰す。潰す潰す潰す。奇跡的に残った本体らしき赤い球体については、軽くジャンプして全体重で踏み潰した。

数分後、そこは惨状となっていた。辺りには緑色のゼリーが散乱しており、無残にも潰された本体の球体はひしゃげたトマトのようになっている。それらを眺めて紫音は、思わずニヒルに笑ってしまった。

「このザコめ。この完全超人に歯向かう奴はみんな赤いシミになる事を覚えておいた方がいいよ」

「そりゃスライムだからザコに決まってるよ……。まったく、君の言動にはいくらツツコミを入れても追いつかないわ……」

うんざりした様子のリイナは説教する気も失せたのか、さっさと惨劇の場から離れて行ってしまった。

慌てて追いかける紫音だが、その時視界の隅にわんわんの屍が再び映る。立ち止まり、一度だけ振り向くと、紫音は心の中で頭を下げた。

もちろんスライムを除いてだが。

「ほら、邪魔もいなくなっただしさっさと歩こう」

「うむん」

リイナはちょっと離れた場所に放置されていた荷物を持つと、その際に対となる双小剣を虚空に消して歩き始めてしまう。あまり無

駄な行動を好まない性格もあってか、少しだけうんざりしてらっしゃる。

小走りで追いつき、隣に並んだ紫音は以前から気になっていた事をつい口走っていた。

「あの、リイナちゃん」

「ん？」

「前から使ってるあの短剣だけど」視線だけをリイナの右手甲に移しつつ、「ああいうのも晶術なの？ 使ってる時、いつも手の甲が光ってるから……」

それに対し少しだけきょとんとする彼女だったが、思ったよりすぐに答えは返ってきた。

「うん、そうだよ。武装錬成って呼ばれてるちよっと変わった晶術」

「ぶそ……なんだって？」

「武装錬成。正式名所はコネクション・アンビュード。接続と錬成って意味だよ。聞いたことない？」

黙って首を振ると、特にリイナは不思議そうな表情をするわけもなく、

「そう。まあ珍しい晶術だしね、田舎者の君には余計分からないか」

「？ そんなに珍しいもんなのか？」

はて、晶術にも珍しさとかそういうのがあるものなのか。てつきり魔法と同じようなものだと思うっていたので、強くなる＝強いので使える感じが強ければ誰でも使えるようなものだと思うっていた。

あれか、特殊アイテムがないと覚えれないとか、そんなタイプなんですな分かります。

「珍しいと聞かれると、相当珍しい方だね。君、召喚術って言葉ぐらいは分かる？」

「まあそれぐらいは……。離れたところにあるものを呼び寄せたり、そんなんでしょ？」

とりあえずなけなしの知識でカバーして見ると案外間違いでもなかったらしい。

リイナは軽く頷くと、

「そう、召喚術は術者の望んだものを別の場所から呼び寄せる晶術。物体召喚ってのは次元の狭間に無理矢理対象のブツを捻じ込むような仕組みだから、術者にはそれ相応の魔力が必要な^{マテリア}の。つまり複数の魔力結晶^{マテリア}か、上質なものが必要になってくるって訳。そこまでは理解できる？」

「うん」

「簡単に言っちゃえば武装錬成はそれの上を行く晶術。書物や伝説上にある武器や防具、それらを手元に呼び寄せるの。例えそれが架空の武器だったり、今この現世に存在しなくてもね。……と言っても正確な形が分かってないと難しいんだけど」

つまり、大量の魔力を生贄にする代わり、昔のナンタラ王とかが使ってたんでも宝剣とかを召喚出来る、という訳だろうか？

「じゃありイナちゃんがいつも使ってる短剣も、実はめっちゃ凄い武器だったり……？」

おそろおそろ聞いてみる。が、返ってきた答えは意外にもNOだった。

彼女は顔を横に振ると、つまらなそうに言う。

「そんな法王級の武器を毎回毎回召喚してたら私の魔力が保たないよ。ただでさえ基本の消費が大きいのに。あれは適当な文献で見つけた、マインゴーシュっていう普通の兵士とかも使ってた短剣だよ」「へえ……」

とにかくうんうん頷いておく。

もしリイナの言っている事がすべて本当なら、かの有名なエクスカリバーやグングニルといった伝説上の武器も召喚できる、という事なのか。

そう考えるとますます興味の湧いてくるのが美弦紀紫音である。

「ねえねえ、もう一回あの短剣出してよ」

あからさまに嫌そうな顔をされた俺はどうすれば。

「や、やだよ。言っただでしょ？ 魔力消費が大きいって。そんなポ

ンポン出せるものじゃないし、先のことをちゃんと考えて計画的に使わなきゃ駄目なの」

「えー」

「えー、じゃありません」

まったくこのツンケン女め。

こうなれば秘策、という事で紫音は即座に動いた。軽やかなステップでリイナの前に躍り出て彼女の進行を妨害すると、そのままダイビングジャンプでもするように、

土下座した。

「どうか、どうかお館様！ この紫音めに、今一つの機会を恵んでください！」

「ちょ、シオン君！？」

「何とぞよろしくお願い申す！ 何とぞ！ お館様アアああああああああああ！！！」

さすがにここまでされては流石のリイナも動揺するのか、手持無沙汰にあたふたし始めた。そんな様子がまた可愛いと思ったのは内緒である。

ふっ、計画通り。完全超人つてのは、己のプライドぐらいいつでも捨てることができるのよ！

「あ、ああもう！」

それから数分、紫音がひたすら己の熱い思いを語っていると、リイナがようやく反応を見せた。

怒りによるものか何なのかは不明だが、ちょっとだけ顔が赤いのは気のせいではないと思う。

「分かったわよ……、そんなに言うなら一度だけだからね。だからさっさとその変な演技やめてよ。その……恥ずかしい」

……。

か、可愛いじゃないカツ！

軽くじと目になって頬を染め、そんな事を言いやがるリイナに少しだけトキめいてしまった。すみませんお姉ちゃん、僕お姉ちゃん

以外の女の子にもやっぱり興味あるっぽいです。

「その代わり、次魔物が出てきてもシオン君が退治してよね」

自分で頼んでおいて何だが、そんな紫音の内面的な思考にお構いなく、リイナはさっさと作業に入り始めた。といっても一瞬だが。

彼女が目を閉じて小さく何かを呟いた——その瞬間、マテリアの埋まっているリイナの右手甲、晶術紋が小さく輝き始める。それはまるで蛍の光のように小さな小さな輝きでしかなかったが、それからは明らかに別の何かがある。そう思った。

そして、

「おお……」

思わず感嘆の言葉を漏らす。

次の瞬間、何もなかったはずのリイナの右手には、しっかりと例の短剣——マインゴーシュが握られていた。曲刀のように曲がった刃に、無駄な装飾のない柄。元の世界でこの手の武器はナイフ系統しか見た事がなかったため、こうやって近くで見るといかに珍しい物が理解できた。

「確かこの剣、左手用短剣って呼ばれる盾の代わりに使われてた武器らしいよ。なんでも相手の攻撃を受け流すためとか何とか……」

「ほう……」

つまりリイナはその短剣を敢えて双剣持ちにしているという事だ。攻撃を捨てたぶん回避と防御に回しあるのだろう。何だかんだ言って彼女も色々考えながら晶術を使っているのだ。

「まあ私は右手にも同じの持ってそういう文献の内容は完全に無視してるけどさ………って、あ」

と、リイナが何かに気付いたように突如驚きの声を上げた。

どうやら紫音の背後を見ているらしい。思わずその視線を追って紫音も振り向くと、そこにいたのは——、

「……」

「……」

バインドウルフだった。

二人して沈黙し、お互い顔を合わせる。再びウルフに視線を戻して、またまた顔を合わせると、

「ごめんなさい俺には無理です」

「ふざけんな」

……この後、2匹目のわんわんがリイナの手によって天に召されたのは言うまでもない。

紫音がリイナとアルスウェルから逃亡して約2日が過ぎていた。

もちろん体内時計での計算でしかないので信憑性はないが、5時間ほどの睡眠を2回取っているのだぶん合っていると思う。

リイナが言うにはこれから港町まで歩いていき、そこから船に乗って隣の大陸——つまり別の王都がある、別の王が仕切っている大陸へと逃げるらしい。そこまで逃げ込めば執念深い流石の王国騎士団でも易々と紫音達を追ってくる事が出来ないとか。詳しくはよく分からないが、領土的な問題でアルスウェルの騎士団達は足を踏み入れることができないのだろう。

紫音にそれを反対するつもりは到底なかった。大体、紫音はこの世界の住人ではない。今は共に同行しているリイナに頼るしかないし、元の世界へ戻るためにも色々と『世界』を観察する必要性があると思う。折角心優しい彼女と行動を共にする事ができたのだ、個人の意見を突きだして話をややこしくするのは決して得策ではない（と言っても、いきなり港町まで行くなって訳じゃないけど）

事実、アルスウェルから港街までは、徒歩だと軽く5日は掛ってしまうらしい。そんなとんでも距離をずっと歩き続けては人間として体が保たない。紫音はともかく、リイナは普通の女の子。確実に無理だ。

そんな訳でたった二人の旅団は現在、アルスウェルと港町の丁度中間にある小さな村、ピゴット村へと足を向けている。そこで一旦休憩を入れ食料などを十分に補給する、というプランが成っていた。……まあ、いくら中間と言っても2日と半日は掛ってしまう距離なので、かなりの時間を必要とする訳だが。

「……ねえ、リイナちゃん」

つい30分ほど前、2匹のわんわんを殺断した短剣使いの少女へ向けて、かすれ始めた声で紫音は言っていた。

「……わたくしめ、いい加減腹減ったんですけど……」

今にもぶっ倒れそうな少年の言葉に、スタスタと軽快に歩くリイナの答えは実に簡単だった。

「ふーん」

「ふーんって、それだけ？」

「？ そうだけど、それが何？」

「いや、何と言われても……」

さつきからこの調子だった。

しかもこの少女、全く悪気がなく真顔で答えてくるのだから困る。もちろん紫音だって、今現在食料という食料を持っていないのは分かってる。実は上着のポケットに偶然にもガムが入っているのだが、そもそもガムなんて腹の減りを全く満たさないし、紫音が唯一持っている『元の世界』の食い物だ。そう簡単に消費する訳にはいかない。

実は紫音もリイナも、昨日の朝から何も口に入れていないのだ。それまではリイナの荷物に入っていた携帯食料で何とかだったが、それつきりである。腹が減るのは当たり前だ。どうやらリイナは元々が小食らしく結構耐えられるみたいだが、体を鍛えて暴食な紫音は論外である。軽く拷問に近かった。

（ちくしょう、これだからプニプニした女とか言う軟体動物は困るんだ……。自分達が腹減ってないからって、それが男にも通じる事だと思い込みやがって……）

心の中で愚痴る。とにかく愚痴る。口に出したら色々と酷い目に遭いそうな愚痴を、ただひたすら呪術のように呟き続ける。

（大体何なんだよあの携帯食料。日本の携帯食料はもつと優秀だったぞ。飲み物がないと口の中がパサッパサっていう欠点を除けば結構良かったんだぞ。それに比べて何なんだここのは、あれじゃまるで直径1センチほどの飴玉食ったのと同じ感じだ。ええい、くそ、くそ、ああもう！ おかしい、絶対に理不尽だ。結局何が言いたいのかって、女はおかしいんだよ！ 毎日毎日スタイルを保つために小食でいやがって、こんな時ばかりその習慣が役立ってやがる。もつとガッツと食うべきだと俺は全国の女性に主張するね！ あつ、ちなみにお姉ちゃんは除くよ。お姉ちゃんはあの素晴らしいスタイルに加えて小ぶりな体だったのに、俺と同じような量を毎日食べてたんだ。お姉ちゃんは全世界で唯一の理解者だよ。お姉ちゃん、ああお姉ちゃん、お姉ちゃん。どうかこの悲しい運命を背負った不甲斐ない弟に救いの手をッ！！）

……ちなみに、落ち込んだり怒ったりガッツポーズをしたり、無言のまま謎の動きをしている紫音を、リイナが優しい目で見守っている事に本人は気付いていない。

と、その時。

ぐう。

みつともないほど間抜けな音が、紫音の腹から鳴った。

「……」

「……」

リイナの憐れむような視線が顔面に突き刺さる。何だか物凄く気まずい。超気まずい。なんて言うんだろっ、紫音に押し掛かる重力だけ2倍になってる感じた。

「……」

「……」

「……」

「………そ、そっだよ。ああそっだよ！ 腹減ったんだ！ わた

くし美弦紀紫音は嫌ってぐらい腹が減ったんです！ 昨日の朝っぱらか何も食ってなくていい加減限界なのです！ でもこれは人間の三大欲求の1つだぞ！ 何か悪いか、ええ！？」

「いや、何も悪いだなんて言ってないけどさ……」

突如叫び出した紫音はもはや開き直っていた。あれである、蘇生術である。一種の蘇生術だと思ってほしい。こうでもしなきゃこの鬱憤を晴らせる気がしなかった。

呆れ顔のリイナは視線だけこちらに向けつつ、口を開く。

「てゆうーか、そんなにお腹減ってたの？ 何度も同じこと繰り返して言ってると思ったら……」

「う、うっせ」

まあ、リイナが呆れるのは仕方ないと思う。彼女も日本全国の女性と同じ、小食でスタイルを保っている女の子なのだ（胸以外）。彼女からしてみればもうすでに腹の減ってしまっている紫音こそが異様なのだろう。

しかしリイナにも男の気持ちというやつを少しは分かってほしい。それこそ育ち盛りの紫音みたいな少年は、リイナみたいに小食で体型を気にしたり（胸以外）、メタボな中年のオッサンみたいにダイエットをしようとしてる訳でもないのだから。

「……シオン君さ、今何度か失礼な事考えなかった？」

「い、いや。気のせいだと思うYO」

別に俺は胸がちよつとアレでも気にしないさ！

だつてお姉ちゃんもちよつとアレだったからねッ！！

……なんてことはもちろん口が裂けてでも言えるはずがない、美弦紀紫音だった。

リイナは面倒くさそうに溜息を吐くと、

「まあ、お腹減ったって言われてもね……。今は手持ちの食糧ないし、我慢するしかないよ」

「う……じゃあ何か捕まえるとか！」

「そつえばバインドウルフって、食用にもできるって話だよ？」

「謹んでお断りさせていただきます」

ンな事出来る訳がない。あの可愛いわんわんの死体を丸焼きにして肉を切断していく様を想像すると、紫音には到底無理な話だった。もはや万事休すなのか。

「く、くそう……。リイナちゃん、あとどれくらいで村に着くの？」

「そんな事私に聞かれても困る……。って」

するとリイナは、何かに気付いたように足を止めていた。紫音も釣られて止まるが、思わず頭に疑問符を浮かべてしまう。

「……意外と、もうちょいっぱいね」

「へ？」

リイナは見るべき先を指し示すように、正面に向かって指をさした。

その指す先を目で追っていくと、そこには、

(……あ)

見えた。

小さくだが、確かに見える。

どこまでも続く壮大な草原。地平すらも拝めるその中でただ一つ。ポツンと、それを見てとる事ができた。

ピゴット村。

王都アルスウェルと港町の中心にある小さな村が、確かにそこに存在していた。

「あれが……？」

思わず呟いた一言に、隣のリイナは『そ』と一文字で返す。

腹が減って減って仕方のない紫音には、その光景が素晴らしく輝いて見えた。まるでそう、砂漠の中にあるたった一つのオアシスでも見つけたかのように。

リイナは言う。これから目指すべき小さな村を真っ直ぐと見つめて。

「あれがアルスウェルが仕切るこの大陸唯一の田舎町、ピゴット村だよ」

第13話：ピゴット村の村長さん

ピゴット村。

土地面積は小さな遊園地と同じぐらいの面積。地球上もつとも小さい国、バチカン市国を半分にした程度の大きさだ。案外大きく聞こえるかもしれないが、バチカン市国はかの有名な『夢の国』と同じ程度の大きさと言われている。その半分だ、決してスケールの大きい話ではない。それこそ2日半前にいたアルスウェルなんて、都道府県一個分の大きさはあってもおかしくないんじゃないかってぐらいデカかった。

そんな面積の小さいピゴット村だが、村のほとんどは田んぼとか木造の一軒家で埋まっている。外の世界と違って地面の芝生は完全に刈り取られ、茶色い土。ここに住んでいる方々には悪いが、騎士団なんてのがウロチョロしているあのアルスウェルからは想像もできないほど田舎臭がプンプンだ。

しかしそれに比べて、町の中は意外と賑やかだった。もちろんアルスウェルみたいに一般住民が露店を開いているなんて光景は見当たらないが、ちゃんとした営業で食料を売っている店は視界に映るし、宿屋だって住宅の列に並んでしっかりと鎮座している。なにより地元住民の方々がそこら辺で世間話をしていたり、子供達がボールを蹴りあつてゐる時点で賑やかとしか言いようがなかった。

何となくだが紫音は、都会のガヤガヤしたものより田舎のこういう雰囲気の方が好みである。

と言つても、今あるこの状況がなければの話だが……。

(う、うわっ……)

素っ気無い門とも言いにくい門を潜った途端、周囲から突き刺さってくる視線という視線。

自分へと大量に突き刺さったそれに対し、思わず紫音は立ち止まっていた。うわっ、ジロジロ見んじゃねえこの田舎もん共がッ！と自信過剰な口が開きかけたが、そこは何とか踏み止まった少年である。

（ここまで注目されると何か一発芸でもしたくなる愚かな美弦紀さんなのであった……）

ふと気付くと、そんな紫音を無視してリイナはとつと前に歩き出していた。

堂々と歩くその態度を不思議に思いつつも、紫音は慌てて彼女の背中を追いかける。

「り、リイナちゃんってこういうの気にならないの？」

視線をまったく気にせず道のご真ん中を堂々と歩くリイナに、さりげなく尋ねてみる。

「こういうのって？」

「や、だからこの視線というか注目っぷりというか……」

紫音の言葉に、リイナは『ああ、これのこと』とつまらなそうに相槌を打ち、

「そもそもピゴット村は訪れる観光客とかほとんどいないからね。

私達のことが珍しいんじゃない？」

「ま、まさかの珍獣扱い？」

「そこまでヒドイものじゃないわよ」リイナははにかみなが笑い、

「ほら、言っただでしょ？ 私達はお尋ね者だから使えなかったけど、普通アルスウェルから港まで行くのってお金払って馬車に乗せてもらったりするの。つまりその間にあるピゴット村は基本スルーされる。これと言って観光名所がある訳でもないしね」

「俺達みたいな来客はそもそも訪れるのに違和感があるってこと？」

「そゆこと。心配しなくてもここまで注目されるのはこの村だけだろうし、あまり気にしない方がよいよ」

へー、と思わず口にしてしまう。つまり彼女が言うことは、地元の電車で人の乗り降りが激しいところと一日中まったくないところの差と、同じようなものなのだろう。異世界にもそういうのってあるんだ、とついつい関心してしまう。

と、

「……そういやリイナちゃん、どこ向かってるの？」

さっきから紫音の斜め前を歩くリイナは、迷いもなく真っ直ぐと歩いていた。RPGのゲームならば普通初めて入った街では宿屋に直行し消耗した体力を回復するのだが、件の宿屋はとつくのとうに通りすぎている。まるで別の目的地があるみたいだ。

「そりゃあ村長さんの家に決まってるでしょ」

リイナは当たり前のように言う。

「アルスウエルみたいな都会なら別だけど、こういう田舎町じゃまず村長さんに挨拶をするのが常識よ。知らなかった？」

「生憎とその田舎町に住んでいたもので」

悪びれもなくシレつと嘘を吐く紫音をリイナは疑う様子もなく、

「そういえば君、ジャッポーネに住んでいたんだっけ？」

「う、うん」

「そっかあ……。あこは世間から切り離されてるって聞くからね。それなら仕方ないか」

すみませんジャッポーネに住んでる皆さん。

心の中で顔も分らない人々に平謝りする紫音に構わず、リイナはとつと話を始めた。

「旅人つてのは、村人から言ってしまえば自分達の村の名を世間に広める唯一の糸口だからね。基本、私達みたいな旅人は村人達から重宝されるのよ」

「えつと……つまり？」

「うーん」リイナは少し考えると、「……ほら、旅人って文字通り旅をしているから色んな街を行き来する訳じゃない？ 無論それと同時に、色んな街の色んな人々と出会う。つまり人脈が増えるって

ことよ」

それならば分からないこともない。おそらくネットサーフィンみたいなものだろう。

ネットワークというもう一つの世界にPCを媒体にして接続し、他人のブログやホームページへとアクセスをする。そこでコメントを残したり、某掲示板に書き込んだりと様々なことをする事によって趣味の合う人と出会い、ネット内での友人関係が成立するのだ。

「んで、旅人が他の街で知り合った人と話す内容と言ったら何だと思う？」

「そりゃまあ、自分の旅の内容だろうね」

「そう、大体の旅人ってのは自分の見てきた景色ってのを他人にも教えたがるから。そしてもちろん、その話の内容には今まで寄ってきた街の名前だって出てくる。……つまり、そういう事よ。自分達の町に寄った旅人に良い印象与えて見送ってやれば、その分町の『良い部分』だけが口伝いで世間に広まる。そうすると町に訪問してくる人が増えて、時には引越してくる人間だって現れるわ。町……というかそこに住む住民達にとっては好都合ばかりなのよ」

なるほど、と素直に納得する。簡単に言ってしまうえば、世間体を少しでも上げるために住民達は旅人に好印象を持たせようとするのか。

しかしそうになると、一つだけ疑問が浮かび上がってくる。

「でもそれなら、なんで俺達が村長さんに挨拶をする必要があるんだ？ 相手にしか都合の良いことはないじゃんか」

紫音の反応を大体予想できていたのか、リイナの解答は早かった。「ほら、いくら住民が旅人に好印象を持っていたからって、旅人が無愛想な奴だとお世話をしたい気分にはならないでしょ？ だからこういう場合、旅人の方から手を出すの。村に入ったらまず村長さんの家に直行して、とりあえず挨拶をする」

「それで『そちらからも是非絡んでやってください』的な思いを伝えらる？」

「その通り」一つ頷き、「向こうからしてみれば旅人側がそんな姿勢でいてくれると、自分達からも声を掛けやすいでしょう？　するところからが驚きなんだけど、気前の良い村長さんならタダで宿に泊めてくれたり、碇泊期間を教えればその分の食事を用意してくれる、ほんと優しいことしてくれるのよね」

「そ、それはまた単純なことだ」

正直日本じゃありえない。村の主に挨拶するだけで宿がタダになるなら、それほど楽なことはなからう。なんだか万屋の仕事で全国を回っていたとき、いざって時は野宿までしていた自分が馬鹿らしい。

「まあそんな訳だから、村長さんへの挨拶は絶対。旅を少しでも楽にするための一つの手段よ」

「はあ……」

なんだか信憑性のない話だが、現実なのだから仕方ない。これも育ちの違い、潔く受け入れるしかないのだろう。

それよりも今はさっさとその挨拶とやらを済ませて欲しい。とにかく紫音は腹が減ったのだ。腹が減って仕方がないのだ。村長さんが食事を用意してくれるに越したことはないし、そうでなくとも早くそこら辺にある食堂へと突っ込んでメシを食わなければならぬ。でなければ死ぬ。飢えて死ぬ。大事なことなので2回言いました。

「ほら、そんな事言ってる内に……あれ村長さんの自宅じゃないかな？」

リイナの言葉に、彼女と同じ方向へと視線を送る。

見渡す限り人と木製住宅しか映らないが、その中でただ一つ、存在感のある住宅が一軒鎮座しているのを紫音は捉えた。

他の建築物同様、木でできている事に変わりはないが明らかに雰囲気が違う。そもそもサイズが大きいし、他の家と違って2階建ての作りとなっている。ガラス窓や木目のない加工木材の壁は手入れが行き届いているのだろう、この距離からでも他と比べてちよっと綺麗だった。

2人して早足で家まで駆け寄ると、ここが村長宅なのか近くを歩いていた男の人に質問。

親切にも答えてくれ、どうやらここで正解らしい。村人が旅人に對し媚を売っているという話は本当にマジらしい。

「ちなみに俺が男性の立場なら、嘘情報を教えて恥をかかせていたね」

「？　なんか言った？」

「いや、何でも」

俺だつてまだ高校生、それくらいのお茶目心あるんだもん！　と心の中で神様に言い訳を放ちつつ、とりあえずそこは誤魔化しておいた。

リイナは躊躇いなく木製のドアを軽くノックすると、『すみませーん』と声を上げる。紫音はそんなリイナの後ろで黙って待機している、

しばらくして、カチャ、という鍵が解錠される音。

ゆっくりとドアを開けて姿を現したのは、年老いたおじさんだつた。第一印象としては、結構穏やかそうな人。でも怒ると実は怖かったりするタイプの顔作りをしている。

「どちら様でしょう？」

見た感じ50代のひげを生やしたおじさんは、すぐに紫音とリイナが村の人間ではないことを看破したのだろう。そんな事を言ってきた。對し、リイナは一度姿勢を正すと、

「私達、アルスウェルから隣国までの旅の途中でして。諸々事情により馬車を使えず、このピゴット村には休憩と食料調達の意味で寄らせてもらいました。今回は村長様に挨拶を窺おうと……」

そこまで話すと、村長のおじさんは大体の事を把握したのだろう。『おお！』とか声を上げて突然笑顔になった。さっきの男性と同じである。万屋として鍛えられた洞察力でそれが作り笑顔だということとすぐに分かったが、逆にそこまで素早く表情を変えられることに感心してしまった。

「これはこれは、旅のお方でしたか！　こんな貧相な村にわざわざ寄っていただけるとは、実にありがたいですな」

「いえいえ。見た感じ、農業に発達した村に見えますね。この時期ならレピツダ系の野菜がよく採れるのでしょうか？　それに凄く空気が新鮮で美味しいですよ」

……………。

「（な、なんというお世辞の言い合いッ！）」

「シオン君？　何か言った？」

「いえ、何でもありません」

聞き取られるとこだった、危ない危ない。思ったことをすぐ口に出してしまうこの口、何とかしないといずれとんでもない事をしてかしそうだ。精進せねば。

「それよりも、村長さん。お名前はなんと呼べば？」

リイナがネツクとなるところをサラリと口にした。確かに、間違っていないとはいえいつまでも『村長』という呼び方は駄目だと思う。「おお、失礼しましたな」おじさんは軽く一礼すると、「私はこの村の村長、グレン・ジャゲッド・ギボンヌと言います。お気軽にグレンとお呼びください。短い間でしようが、村のことで分からないことがありますたら気負いせずにお尋ねください」

グレンと名乗った村長のおじさんは、そういつて再び一礼。片手をリイナに差し出した。

リイナはそれを握って短く握手を交わすと、

「では、グレンさんと。私はリイナ・グレーティア・セツティ、リイナで構いません。それでこちらが――」

そこまで言いつつ、視線だけをこちらへと投げかけてくるリイナ。……おーけー、把握した。つまり自分で自己紹介しろと、そういう事ですねお館様？

瞬間、紫音の中でスイッチが切り替わる。と言ってもそれは万屋モードとかそんなではなく、

「――えー、わたくし東方から風来坊の如く参上した織田信長と

言いました」

……一瞬でネタを作り上げる馬鹿頭という意味でのスイッチだが。
「わたくしは昔からこのように素朴な村で過ごしていました、毎日毎日両親の手伝いと畑仕事のマンネリが続いておりました。そんなわたくしは毎日のように家の台所・本能寺に出没する黒光りした楕円状の生物、通称ゴツキーと格闘を繰り返して、全身が細菌まみれになりながらもわたくしはゴツキーの殲滅に勤しんでおりました。そのせいか寺子屋では同級生にインフルエンザ核兵器と恐れられ、避けられつつける日々。わたくし唯一の心の支えとなっていたのは、昆虫を一撃で殺すことのできる魔法のスプレーが味方にくれたことです。しかしある日、わたくしはいつものように本能寺でゴツキーと戦っていると、魔法のスプレーがなくなったのです。わたくしは思いました、裏切られたのだと。涙ながらなんとか本能寺からの撤退に成功したわたくしは、そこでお館様と出会い、こんなインフルエンザ核兵器に手を差し伸べてくれるお館様に一生着いていこうと決心したのです。わたくしにとってこの旅は新しい自分を見つけるための旅。私自身の器を図るための旅なのです。この度はわたくしが村に足を踏み入れた時点でインフルエンザ症候群の細菌をばら撒いてしまい、今後多大な迷惑をおかけになると思いますが、何卒よろしく願います!!」

……。

……。

「……っていうのは全部嘘で、彼の名前はシオン・ミツルギ。かなり捻くれた性格してますけど、優しい目で見守ってあげてください」
「ちよつとおおお！ おかしくないかこの空気。俺の住んでたところじゃ大爆笑の渦だったんだぞ！」

「はいはい……そういう意味分らないネタはいいから、これ以上私に恥ずかしい思いさせないでね。大体誰よオダノブナガって……」

（しまったアアああああああああ！？　ここ異世界だから信長さん歴史上にいないんだったああああああ！）

お、恐るべし異世界仕様。これを万屋の仕事とある学校に転校した時の自己紹介で言った時はなかなか受けたのだが、異世界ではそうでもなかったらしい。

穏やかそうな村長のグレンさんでさえ、苦笑いを浮かべていた。

（く、くそ、これだから異世界人は……。その知識のなさ、自重しろ！）

……その言葉がまるまる自分にも当てはまることに気付かない、お馬鹿な少年であった。

「ま、まあ是非くつろいで行ってください。我々はあなた方を心より歓迎いたしますよ。あとで宿の方に連絡を入れておきますので、部屋はご自由にお使いください」

「お気遣い感謝いたします。ではお言葉に甘えさせていただきます。それと、町の全体地図とかはないでしょうか？　できるだけ土地の形を把握したいので……」

結局いつも通りぶつぶつと独り言を呟き始めた紫音をスルーして、勝手に話を進めるリイナとグレン。なんだか物凄く置いてけぼりにされた気分である。リイナの奴め、あとで絶対復習してやる……、と謎の呪文を唱え始める紫音だった。

と、
「？」

腰に違和感。

まるで何かに引つ張られているような、そんな感じがする。

思わず斜め下に振り向いて、それを確認していた。

（……えっと、なんていうか）

そこにいたのは、小さな女の子だった。

見た感じ小学校高学年ぐらいの、可愛い女の子。大きく開かれたクリクリとしている碧眼に、肩まで伸びているショートヘアの茶髪。背丈はせいぜい紫音の脇腹辺りまでで、レース模様の描かれ

たローブのような服装で身を纏っている。

何というか、一言で表現するならあれだろう。

（幼女ですね、分かります）

茶髪の女の子は可愛い瞳で紫音を真っ直ぐに見上げており、小さな右手はブレザーの隅をちょこんと掴んでいる。どこか呆然とした、ぼーとした様子で見上げてくるその様はまるで不思議系薄幸少女をイメージさせた。

「……」

「……」

「……えっと」

「……」

「わたくしの名前は信長と申します」

「……」

「趣味はゴツキー退治、特技もゴツキー退治」

「……」

「お嬢さん、どうぞよろしくお願いします」

「……」

「……えっと」

「……」

「……」

「……、」

お姉ちゃん、会話が続きませんッ！！

この女の子、まったく言葉のドッジボールしてくれないんですが！

「………のぶなが、さん」

と、紫音が今にも泣きそうになったその瞬間、ポツリとだが女の子が口を開いた。

物凄く透き通っている声。若いこともあつてか、とてつもなく美声だ。雑音を通り抜けてくるその声は、例えばボリュームが小さくてもしっかりと紫音の耳に届いていた。

ここぞとばかりに耳を傾ける紫音。せつかく反応してくれたのだ、

耳の穴こじ開けてでも聞き取らなければ納得がいかない。

「のぶながさんは、旅人さん……？」

「……？ あ、そうだよ。信長は旅人さんだよ」

相変わらず可愛い碧眼はじつとこちらを見つめていた。正直言葉の意味が分からないが、この手の小さい子供はよく意味のない質問を投げかけてきたりする。少しでも会話を円滑にするためには、興味ありげに相槌を打つかその質問に乗って冗談を仕掛けるくらいである。

「のぶながさんは………」

「ん？」

彼女の小さな口がちょびちょびと動く。どれも音量が少ないが、あまりに美声なことから、しっかりと聞き取ることはできる。

「……… のぶながさんは、森のかみさまを………」

しかし次の瞬間、しっかりと聞こえたその言葉を思わず疑ってしまっほどもに、予想を越えた言葉が彼女の口から飛び出してきた。

「——殺してくれる……？」

………、は？

殺してくれる？

紫音の耳に間違いがなければ、確かに目の前の女の子はそんな事を呟いた。じつとこちらを見つめて、他の誰でもなく紫音を凝視しながら。

それが年端も行かない子供が冗談交じりに口にしたのなら納得できるだろう。

だが、この子は何か違う。年齢は10歳前後、見た目だって、漂わせる雰囲気もそれ相応の未熟さ。だがその一言だけは何かが違った。明らかに普通じゃない。普通を逸した別の『何か』が、確かに込められていた。

それが何なのかまでは分からない。ただ、美弦紀紫音の万屋とし

ての勘が告げていた。目の前に佇む小さな女の子には、必ず『何か』があると。

（殺してくれる、か……。いきなりとんでも発言してくれるじゃない）

謎の発言を言い放ったきり、女の子は口を開かなくなった。じつと見つめる紫音の瞳を、呆然とした様子で見つめ返している。敢えて言おう。お嬢さん、冗談にしては笑えません。

「あ、こら！ クレア！」

と、横合いから飛び込んでくる男の声。グレンだ。

彼はやたら慌てた様子で紫音と女の子の元まで駆け寄ると、彼女の手を引つ張りもとの位置まで戻っていく。ぽけーとした表情でなすがままになっている女の子がちょっと可愛いとか思ったのは内緒である。

「駄目だろう、クレア。旅人さんに変な話をしたら」

そう言うグレンはクレアと呼ばれる女の子の頭に手を置きながら、少しだけ叱り付けるような声色で言葉を向ける。まるで駄目な事は駄目と、教え込んでいるような様子だ。

「そちらのお子様は？」

つい、紫音は自ら口を開いていた。謎発言もあつてか、彼女のことが少し気になってしまう。

ああ、すみません、とグレンは一礼すると、

「この子はクレア・ジャゲッド・ギボンヌ。あまり私には似ていませんが、実の娘です」

「娘さんなんですか？ じゃあ奥さんは……」

空けられたドアから村長宅の中を眺めてみるも、奥さんらしき姿は見当たらない。

お出かけ中かな、と考えるが——意外なことに、答えはグレンの口から直接飛び出してきた。

「母は……ほんの数ヶ月前に、この世を他界しました。私と違って彼女は、クレアによく似ていましたよ」

「あ……すみません、悪いこと聞いちゃって」

「いえ」グレンは苦笑しながら、「母のことはすでに、私の中でもクレアの中でも割り切れることはできました。他人であるあなたが気負う必要はありません」

そんな彼の疲れ切った笑みを見て、紫音は即時に思った。
嘘だ。

少なくとも、この人はどこかで悲しんでいる。奥さんの死を。

……まあ確かに、他人である紫音が踏み込む事情でもないが、
と言つても、踏み込んでみたい事情はあるのだが。

「あの、一つ聞いていいですか？」

紫音はクレアの方へ視線を向けつつ、

「そのお嬢さんが言っていたんですけど、“森の神様”っていうのは一体……？」

「森の神様？」隣のリイナが不思議そうな表情を浮かべた。「なんというか……シンプルな名前ね、それ」

こいつ絶対ダサイ名前とか思ったよ。

というツツコミは口の中で留めておく。こんな事仮に口に出してしまつたら、その瞬間全力でぶん殴られるに違いない。自信過剰の俺とてそこまで命知らずじゃないぜ、とかなんとか考える少年である。

「あ、ああ……この子またそんな事を……」

対するグレンはなんだか疲れた様子で呆れていた。まるでそれが当たり前のことかのようなうた。

いや、それよりも、

(また?)

そんな紫音の疑問を感じ取ったのか、彼はおとなしくぼーっとしているクレアに視線を落とすと、

「……最近よくあるですよ。知り合いの人や通りすがりの人に、いきなり森の神様が何だのかんだのって。まあ、小さい子供が考えていることなんで、正直意味が分かりませんけどね」

言って、グレンは面倒くさそうに息を吐く。

当のクレアはどこかを見つめるわけでもなく、虚ろな瞳でじっとしている。その無表情っぷりからはさすがの紫音も感情を読み取ることは無理に等しかった。おそろべしクレアたん。

「ま、所詮子供のいうことですから気にしないでください。――それよりもお二人さん、旅の途中で疲れているでしょう？　すぐに宿は用意致しますので、是非くつろいで行ってください」

ちよつとシンドイ空気でも感じ取ったのか、グレンのその言葉で場の雰囲気がちよつとだけ軽くなった。見た感じ穏やかな人っぽいし、場の空気も読める。確かに村長としては最適な人だな、と紫音は心の中で賞賛しておいた。

それに、話に流されてちよつと忘れかけていたが、現在紫音は絶賛腹減り中なのである。いつぶつ倒れたっておかしくない。とにかく何か口にいれなければ。そんな思いが一瞬で頭の中を支配した。「それじゃお言葉に甘えて。私達、そろそろ宿に向かいますので。グレンさん、ありがとうございます」

紫音が今にも駄々をこねそうな雰囲気を感じたのか、リイナはさつさと話を切り上げた。なんだろう、最近リイナに先の行動パターンを読まれてる気がする。まさかとは思うが、段々手なずけられてしまってるのか美弦紀紫音？

……………ま、まさか（笑）。

2人並んでグレンに頭を下げると、とりあえずさつさと歩き出した。

紫音はグレンの傍らに佇んでるクレアに一度だけ手を振りつつ、リイナと共に宿を目指した。

第13話：ピロット村の村長さん（後書き）

段々サブタイトルが適当になっている気がする……w

第14話：ピロット村の無礼者（前書き）

すみません！更新長らくお待たせいたしました！><

第14話：ピゴット村の無礼者

宿屋までの道のりは速かった。

というか、ピゴット村に入ってから村長宅まで行く最中に宿屋を見かけていたので、ただ単に迷わなかったというのもある。相変わらず村人達からの好奇心な視線は絶えないが、それをまったく気にすることなく堂々と歩き続けるリイナに、まるで従者の如く着いていくうちにいつの間にか目的地に到着していた。

木製のドアを潜り、中に入る。こそつと周囲を見渡してみると、案外中の作りはアルスウェルの宿と酷似していた。建築師が同じなのか、それとも全国的にこういう形が常識なのかは分からないが、ちよつと不思議な感じだった。と言っても作りが同じということは、風呂場やトイレなどもおそらく同じ場所。その点に関してはちよつと関心する。

「にしても……まったく人がいないわね」

先導するリイナが同じように周囲を見渡しながら呟く。

彼女に言われて気付くが、確かに人の気配や利用者がまったく皆無に等しかった。しかしまあ、それも仕方ないのかもしれない。そもそもピゴット村は来客数の非常に少ない町、住民は自分達の自宅を持っているわけだから利用する必要性がない。紫音達のような珍しくも町に訪れる人間ぐらいしか、ここを利用する者がいないのだ。というか売り上げとか大丈夫なのでせう？ と紫音は疑問に思うが、ここは異世界。元いた世界のように赤字だの何だのが存在せず、一度建てた店が潰れるなんてことはない、なんていう変な常識があ

るのかもしれない。

「……もしそうなら、色々と平和だよな。この世界……」

「？　なんか言った？」

「いや別に。それよりさっさと部屋取ろうよ」

誤魔化すつもりで適当に話を振ったが、そこで気付いた。

カウンターに誰もいない。

アルスウェルの時は懐かしきNPC悪女がロボットみたいに突っ立っていたが、ここではそのような人間影も形も存在しなかった。

「……なんで誰もいないんすか」

「わ、私に聞かないでよ」

確かに、分かる。何度も言うがピゴット村は来客が少ない。むしろほとんど皆無と言っても過言ではない。そのため宿屋の存在意義すら問われるのは、しつかりと理解できているつもりだ。

だがしかし。しかしだ。それでも誰一人として客が来ない、なんて道理はどこにもない訳で。店員の1人や2人すらもないとは何事か。今時ド田舎にある駄菓子屋でさえじつちゃんばっちゃんがいるんだぞい！　と心の中でぐちぐち言ってみる。もちろん現実には何の変化もないが。

いつまで経っても姿を見せようとしない宿主に（この空間内にいるかも怪しいが）、いい加減イラツときたのか。リイナが言った。

「……、勝手に部屋使わせてもらっつ？」

「いや疑問形で聞かれても。っつかそんなコソ泥みたいな悪どい手段駄目だろ普通！」

とりあえず突っ込んでみるが、どうも彼女は納得いかないようだ。

「だって誰もいないんじゃないしょうもないじゃない」

「い、いやほら。他にも色々あるだろ？　近所住民に話を聞いてみるとか……」

「てゆーか私達、村長のグレンさんからタダで泊まっていってお墨付き貰ってるからね。ほら、さっさと行こうよ」

「それはそうだけど……てゆーかお前少しは話し聞け！」

紫音の指摘などお構いなしに、カウンター脇にある階段へと足を伸ばしていくリイナ。悪びれた様子などまったく皆無である。

万屋という仕事を経営していて正直お金の管理には敏感な紫音、彼女の行為に着いていくべきか行かぬべきか躊躇ってしまうが、よく考えると今の紫音はこの世界についてほとんど知識を持っていない。どっち道旅の同行者であるリイナには着いていかなければならない事をふと考えてしまった。

「あー……自分が情けないZE……」

「……なに悟り開いてんの？」

リイナが据わった目で見つめてくる。

まあ、今更過ぎたことを考えたところで何も変わらない。神様のせいか時の偶然か知らないが、美弦紀紫音がこんなヘンチクリンな世界に落とされたことも、目の前の少女と旅に出たことも、今現状じゃどうしようもないことだ。ここは一つ開き直って立ち塞がるトラブルを少しずつ払拭していき、先に進んでいくしかないのだろうか。

仮にこのタイミングで宿の主が出てきても、それはそれでその時に考えれば言い訳で……、

「おいおいテメェら、ナニ金も払わず勝手に上がろうとしてんだよ？」

……………系？

リイナとほぼ同時に声のした方向に振り向くと、そこにはカウンターの奥から姿を現したばかりの女性が仁王立ちで佇んでいた。

しかし女性というには風格というか雰囲気というか、周囲に漂う空気が威圧的すぎる。どちらかというともキムキマツチョにマッチしそうな空気だ。

「ったく、表が珍しく騒がしいと思って覗いてみりゃあ、なんだあんたら？ 見ない顔だけど、ナニ、まさか無償で泊まろうとか考え

てるわけ？」

炎のように深紅の赤をしたポニーテールの髪を振り乱しながら、威圧的な女性は鋭い視線を飛ばしつつこちらへと歩み寄ってくる。

紫音でさえ一瞬怯んでしまうそのガン飛ばしは、隣のリイナには結構身震いするものだったのだろう。一步だけ後ろに後ずさるのが視界に映った。

「言っておくケドね、あたしは例え旅人相手でも鼻屑したりすんのが大っ嫌いなんでね。まるで自分が王族みたいに堂々と道を通ってく奴なんてのはどうしようもなくウザいんだよ。そ、丁度今の teme エらみたいな奴がよ」

不覚にも一瞬ムツとしてしまう。リイナはともかく、紫音はその後ろを渋々着いていっただけなのである。だということにも関わらずこういう口ぶりで真っ向から自分を全否定されるとイラッとするのは当たり前だろう。

が、そんな紫音の思考にも関わらず、隣のリイナは一步前に踏み出して、

「何なのよ、この赤髪チリチリ女。それが客に対する態度な訳？」

……完璧に喧嘩腰だった。

そうですか、今のあなたの脳内には『穏便に解決』という考えがまったくないんですかそうですか！

イライラを律儀に押さえ込んだ俺が馬鹿みたいじゃないか！

「は？ テメエ今なんつた？ 客？ 本気でそう思ってたんならお前の頭ん中は相当吹っ飛んでやがるな。そもそも、今この建物内に客なんざ一人もいないっつーの」

そんなあなたもなかなかテンプレ染みた罵詈雑言だね……。そして隣のリイナのこめかみ辺りから不気味な音が響いてきたのは気のせいではないと思う。

「言ってくれるじゃない……。大体、私達はちゃんと村長さんに挨拶をして、『是非無償で宿に泊まってください』ってお墨付き貰ってるのよ。あなたみたいな礼儀知らずにどうこう言われる筋合いは

ないんだけど」

「村長からのお墨付きだあ？　んなもん知らないつつの。この村の村長があのお人好し野郎であつても、この宿の主はあたしなんだ。つまりここではあたしのルールがある。テメエらの都合は関係ねーよ」

「あーはいはいそうですね。あれよね、あなたみたいな人の事を犯罪者予備軍って言うのよね？　これだから田舎者は困るのよ。会話してるだけでも人間の常識が通じなくてほんと話を合わせるだけでも精一杯だよ」

「……テメエ、好き勝手言わせておけば。言っておくけど、テメエみたいな客でもない無礼者は無理矢理追い出すこともできんだよ」
「なに、やる気？　いいわよ、田舎者の暴力騒動に巻き込まれるのはちよつと嫌だけど、そつちがどうしてもって言うなら容赦なく叩き潰してあげるよ」

いつの間にかリイナと女性のお互いの距離はほんの数メートルに縮まっていた。

見えないのに、そこには火花が散っているんじゃないかと思うほど二人の覇気がピリピリと伝わってくる。今にでも喧嘩……というよりも、殺し合いでもおっぱじめそうな雰囲気だ。

……ていうかこれは放つて置いたらマズイのではなからうか？

それはそれで面白そうな気もするけど。ふひひ。

「いいぜ？　なら切にお願いしてやるよ。やっさと出てけクソガキ」

「あなたの方が心の中はクソガキがお似合いみたいだけだね」

指をポキポキ鳴らし始める女性に対し、カフスに隠される晶術紋が小さく輝き始めるリイナ。

さすがの俺もやばいと思つたね、うん。

「ちよ、ちよつと待った！　ストップストップ！！」

慌てて二人の間に割り込むと、とんでもない視線が左右から突き刺さってきて軽くビビツたが、そこは耐える。すぐさま二人を止める理由を脳内で構築し始めた紫音は、

「と、とりあえず二人とも落ち着こう。ここで暴れるのは色々と危険だし、ほら、街中だよ？ 他の村人にも迷惑がかかるしさ……」

「なら静かに潰せば良いだけよね。簡単じゃん」

「はっはっは、誰にも気付かれずひっそりと潰されるんだってよ。残念だったなクソガキ」

……完全に逆効果だった、はい。

しかしここで諦めては紫音らしくない。できるだけ穏やかに解決するためにも、ここは奮闘しなければ。

「で、でもほら！ 喧嘩ならあとでいくらでもできるし、今はとりあえず話し合うべきだと思うんですが！」

「ナニについて話し合ってたんだ？ ああ？」

「そうよ、こんなクソ女と話し合うことなんて何一つないわよ」

ど、どうでもいい所で意見一致おつて……。

「クソ女？ ああ、自分のことを言ってるのね。よく分かってんじやねえか」

「そういうところが、あなたの中身がクソガキっていう証拠よね。少しは口を開くの自重したら？ そうすれば少しは治療されるんじゃないの？」

「ならテメエは頭ん中丸ごと別のに交換するべきだな」

二人とも、よくそんなに悪口が思いつくなんてぐらいペラペラペラペラお互いを罵り合っている。

しかしそれと同時に、紫音の沸点メーターはふつふつと上り詰めており……、

「ええい！ お前ら、いい加減にしろゴルァ！！」

もはや色んな意味で限界だった。

絶叫と同時に、意識もせず振り上げた片足を木製の床に叩きつけ、バキバキ！！ という轟音。美弦紀流によって鍛え上げられた生足は軽々と加工木材の床をぶち抜き、それだけの光景は二人を黙らせるのに十分だった。

「……はあ、ふう、はあ……」

呆氣にとられたように目を見開いている二人を余所に、紫音は深く息を吐くと、

「……とにかく、こんな街中で本気の喧嘩はよくないと思う。まずは落ち着くべきだよ」

「……」

「……」

なんだか暴力行使で無理矢理黙らせたみたいな雰囲気で居心地が悪いが、まあ、それはとりあえずスル。紫音は一旦リイナの方に視線を巡らせた。

「リイナちゃん。確かに意見が通らないのは不愉快かもしれないけど、こっちは泊めてもらう身だから。この気を逃したら休むことも出来ないんだよ。一応、ここは下手に出ておこう？」

「……ま、まあ、君がそう言うなら、別に構わないけど」

渋々といった感じが多少残っているが、彼女なりに少し落ち着いたのだろう。ようやくその口から冷静な判断を聞くことが出来た。

この様子ならあとは放って置いても何とかなるかもしれないが、

ここは乗りかかった船だ。紫音は反対側の女性の方向へ振り向いた。

「あの、俺達無礼な態度でしたね。先に謝っておきます。すみません」

暴言を吐きまくっていた本人ではないとしても、その連れから素直に謝罪をされて面食らったのか、女性は言葉に詰まっている様子だった。まあ、紫音としては素直に謝ることにあまりプライドがないのでどうってことはないのだが。

「それと宿主さんの要望は、逆に言うところ『金さえ払うなら泊まっても良い』ってことですよ？ それなら……」

紫音は何気なく元の世界でも使っていた財布——普段上着の内ポケットに入れていたおかげで穴に落ちるとき取り残してくることがなかった——を取り出すと、そこからアルスウェルで稼いだWIZ紙幣を数枚取り出す。それを宿主の女性へと突き出した。

「えっと、二人分の宿泊料に……今床をぶち抜いてしまった修理代

です。受け取ってください」

紙幣の枚数は少ないが、全て合わせて20000ウイズという想像外の大金にさすがの宿主さんも驚きを隠せないのか。しばしその金を受け取るのに躊躇っているのが窺えた。

と、後ろから紫音の財布の中を覗き込んでいたリイナがぼそりと言ってくる。

「に……し……ろく……ちょ、シオン君。アルスウェルでの賭け事で荒稼ぎしたつてのは聞いてたけど、こんなにウイズ持ってたの？」
「や、まあ……頑張ったかんね……」

そんな二人の小さなやり取りを余所に、気付くと紫音の手にその紙幣はすでになかった。女性は20000ウイズの大金を一枚ずつ数えながら吟味すると、しばらくして言った。

「……ふん、小僧の方はまだ話が分かるみたいだな」

相変わらずその悪態は変わらなかったが、これ以上紫音達ともんちやくするつもりはないのだろう。さっさと身を翻してカウンターの方へ戻っていった。

そして、奥の部屋へ消えていく前に一言。

「泊まるなら勝手にしろ」

捨て台詞みたいによそつと吐き捨てると、それ以上何も言わず奥へ消えていった。

思わず、ふう、と溜息が漏れてしまう。なんとかギスギスした雰囲気から脱することが出来た。無事宿泊することもできたし、いい感じに場を収めることもできた。よかったよかった。

「……あの女、最後まで態度悪いわね」

「まあまあ。泊まることできたんだし、いいじゃん」

「でも本当ならお金使わなくて良かったんだよ？」

「それもリイナちゃんのお金じゃないんだから。別にいいだろ？」

「まあ、それはそうだけ……」

シオン君の事思ってた言ってるんだけど……、とか聞こえた気がするが、まあ気にしない。そもそも紫音はこっちの世界に来て間もな

い。これといって特段に欲しいものもないし、こついう時に使わずしてどうしようというのか。

リイナちゃんのそういう気持ちは嬉しいけどさ。

「ほら、とにかく部屋まで行こうぜ」

適当に声をかけつつ、紫音は階段に足を踏み出す。

「部屋の作りとか全部同じなんだな……」

部屋に一步踏み出して、最初に出てきた感想がそれだった。

そもそも宿屋の中に入った時点でやたら似てるなと思ってはいたが、部屋に入った時点で確信した。もう完全にアルスウェルの宿と同じである。さすがにベットや机の位置などは違うが、それらの種類などは完全に一致している。やはりこちらの世界で言うデザイナーなどが複数の街を通して同一人物なのかもしれない。

（それって結構手抜きなイメージがあるけどね……）

まあ、そんなこんなを考えても単なる暇つぶしにしかならない訳だが。

ちなみに今現在、リイナはベットの縁に女の子座りで背もたれ、アルスウェルでも読んでいた小さな文庫本を読んでいる。相変わらず内容は謎だが、今は無理に探ろうとも思わない。そんな事よりも今の紫音には重要なことがあった。

「リイナちゃん。俺どこかで飯食ってくる」

これである。

さつきから色々とありすぎて軽く忘れかけていたが、そもそも紫音にとってこのピゴット村に寄った最大の目的は空腹を満たすためだ。何があるうがそれこそが最優先事項なのだ。さすがに食い盛りの絶賛思春期真っ最中の紫音にとって、これ以上の絶食は命に関わるね。ええ、関わりますとも。

「ねえ、この宿から一番近い食堂ってどの辺？」

「うーん……」

「……」

「……」

「ねえ、ピゴット村って何か名物とかあるの？」

「うん……」

「……」

「……」

「ねえ、この村の村長ってそろそろハゲそうな髪だったよね？」

「うん……」

「……」

「……」

「ねえ知ってる？ エジソンは霊と交信する機会を発明しようとしたんだって」

「うーん……」

「……」

「……」

「……うん、何というか、アレだね。」

「ちよつとは構ってくださいよリイナさああああああん！！！」

唐突に大声で叫びだした紫音に、リイナもさすがに驚いたのだから。ビクッ、と体を震えさせた。

「な、なに？ いきなり叫んで……」

「なに？ じゃありません！ そりゃあ本とか読んだときは感情

移入しちゃって外からの声に反応薄いのは分かりますけど！ でも相槌だけって結構酷くありませんか！」

紫音に突っ込まれてようやく気付いたのか。彼女は申し訳なさそうに本を閉じると、

「あ……そうだったね、ごめん。……で、なんだっけ？」

「グサッと来るねえそのテンプレの台詞！！ 大体何なんだよその本！ そんな一生懸命読む内容って一体何なの！？ 何なんだよ何ですか三段活用！！」

ビシッ！！ とリイナの持つ文庫本を思いっきり指差してやる。本当ならぶん盗ってでも内容を確認して鬱憤を晴らしてやりたいところだが、紫音はこちらの世界の文字がまったく読めない。実質、リイナの口から直接吐かせるしかないのだ。

が、そんなリイナは紫音に本の内容を指摘された途端、慌てた様子で文庫本を胸の前に抱え込み、なぜか頬を赤らめながら体の向きを逸らしてしまう。なんかこつちが今にでも女の子に襲い掛かりそうな変態野郎みたいな構図である。

「だ、駄目。教えない」

そういえばアルスウェルで聞いたときもこんな反応をされたような……。

「なんでよ？」

「……は、恥ずかしいから」

そう言って視線を落とすリイナの様子は、男からするとなかなかグツと来るものだった。そりゃあもう、お姉ちゃんという人がある紫音にも関わらず一瞬可愛いとか思ってしまうぐらいだ。やばいっすよリイナさん……、

「……でなくて！ ボクはこの程度の煩惱には負けないかねっ！ お姉ちゃあん！！ 紫音はいつまでもあなたの事がテュキだからあああああああ！！」

「何一人で考えて勝手に叫んでんの……」

リイナに据わった目で見られてハッと正気に戻る。相変わらず姉

である美弦紀彼方のことになると思うとしても意識が別方向にぶっ飛んでしまう。

しかしまあ、本の内容については今は置いておこう。それについては今後しっかりとした場できっちり検討しようではないか。

「……それよりもさ、ほら。ここから一番近い食堂ってどの辺？」

一瞬で切り替わった紫音に驚きの様子を露にするリイナだったが、すぐに質問の内容を理解できたのだろう。何か答える前に自分の荷物入れの中をガサゴソ漁ると、A4サイズほどの藁半紙を取り出した。

「はいこれ。さっき村長さんから貰ったこの村の地図だよ。私も村のことはよく分かんないから、これで見えて調べて……って、どうしたの？ 感極まった様子で……」

「いや、これでこそリイナちゃんだなんて思ってた」

すぐさま彼女の手から藁半紙を受け取ると、ざっと目を通す。異世界の地図だからどんなものかと思っただが、そこまで変わった形ではなかった。以外にしっかりと書き込まれた地図になっている。

問題は建物らしき四角の枠になにやら文字が書いてあるのだが、それがまったく読めないこと。まあ、これについては後々なんとかすると思う。

「うし、じゃどこか食いに行ってくる」

「あ、ちよっと待って」

リイナに呼び止められると、彼女は紫音の手から地図を奪うと、どこから取り出したペンで髪の毛の裏面にサラサラと何かを書き連ね始めた。なんだか嫌な予感しかしないんですが。

そして一通り書き終わったのか、一度視線だけで確認すると、もう一度こちらに地図を差し出してきた。

「えっと……」

「食料の買出しだよ」

はい？

「ほら、今は街中にいるからいつでも食事できるけど、ここを出た

らまた等分は歩き続けなきゃならないでしょ？ だから携帯食料になりそうなもの書いておいたから、その通り買ってきて」

つまりアレですか、パシリってやつですか。

いや、別にそれに関してはどうってことはないのだ。むしろリイナにお世話になりっぱなしな紫音としては自ら率先してやりたいぐらいである。だがしかし。しかしだ。

（だからさ……さっきから文字が読めないって何度言えば良いのでせう？）

改めて地図の裏面に書かれた文字らしいものへ目を通す。

正直なところ意味不明である。謎である。よく分からんぐちゃぐちゃした線が羅列しているようにしか見えない。もし2世界の字が書ける人がいるのなら、是非翻訳を願いたい。

「シオン君？」

藁半紙をじつと見つめ動こうとしない紫音を不思議に思ったのだろ、リイナが声をかけてきた。

「どうしたの？ 何か分からないことでもある？」

あります。ありまくりです。

しかし実際にそんな事も言える訳がない紫音としては冷や汗ものでしかなかった。

「い、いや、なんでもないよ、うん。ここに書いてるものを買ってこればいいんだよね。おーけー紫音さんに是非任せなさい」

「……？ うん、ありがとね」

とりあえず親指を立てて爽やかに笑ってみるが、内心どうするべきかかなり焦っている美弦紀紫音であった。文字も読めないのに表を見て買出ししてこいとは、なかなか無理ゲーに等しいと思う。

……というか、紫音としては食堂に辿り着けるかも定かではないのだが。

（なんつーか、こっちに来てから幸運なことがほとんど起きてない気がするよね……）

思いつく限りでもリイナと出会うことが出来たという不幸中の幸

いぐらいだろう。

思わず深い溜息が漏れてしまう。しかしだからと言って、この場は自分の力で何とかするしかないのだ。

「……いつてきまーす」

背後から、いつてらっしやい、と聞こえたのはすぐだった。

第15話：ピコット村の御伽少女

死ぬ（飢えて）。

絶対死ぬ（飢えて）。

今すぐ死ぬ（飢えて）。

「は、腹減った……」

宿を出て軽く30分は経っただろうか。

美弦紀紫音は未だ飯にありつく事が出来ずに、まるでどこぞのゲームに出てきそうなゾンビ歩きで村の中を徘徊していた。理由は知ってのとおり、地図に書いてある文字が読めないから一体どのマークが食堂を指しているのか意味不明だからだ。

自分で言うのもなんだが、なんとも惨めである。

元の世界では万屋の仕事を経営していたおかげで地理には強い方だったのに、こっちに落ちてからは散々だ。まさか美弦紀家当主とあろう者が小さな村の地理に負けて飢え死にとか、情けないにもほどがある。仮に親父にでもこの事が知れたら2度どころか500回は殺される自信があるね。

つまり何が言いたいのかというと、腹が減ってそろそろやばいつて事だ。

さすがにもう腹の虫の音を聞くのは飽きてきた紫音である。

（う、うつつ……。ここまで来ると、毎日金をケチって作ってた貧相な食事ですら懐かしい……）

一瞬宿に戻ってリィナに文字の翻訳を頼む、という考えが脳裏をよぎったが、それはすぐに否定した。

確かにこの状況では一度恥を忍んで尋ねるのが最良かと思うが、実際に紫音と同じ状況に陥ってしまったえばそうは考えないだろう。

仮にここで紫音が、リイナに対して文字が読めないことを告白したでしょう。

するとどうなるか。彼女はもちろんそんな紫音を怪しんで、なぜ読めないのか、なぜこんな常識ですら分らないのかと今まで同様問いただしてくるはず。紫音はそれに対し、『故郷が田舎だったから』と返すしか道はないのだ。

それが一体どういう意味になるのか。

リイナからみて、紫音の故郷とは『ジャッポネ』ということになってるのは分かるだろう。仮に紫音が今まで同様の回答をしてしまったら、それはつまり『ジャッポネの人々は文字すら読めない田舎物』というレッテルがリイナの中で貼られるわけだ。

今まで散々ジャッポネを生贄に嘘を吐いてきたというのに、これ以上、しかも一般常識に関することで嘘をつくのはさすがの紫音もどうかと思うわけで。

それに今後、この嘘がリイナにばれてしまった時、色々と面倒なことに成りかねない。話を余計こじらせて、物事が悪く進むとリイナとの友情関係に大きなヒビを作ってしまうことだってありうる。

だからこそ、これ以上余計な嘘を吐くわけにはいかない。

自分のためにも、今後のためにも、先のことをしっかりと考えた結果、紫音の中で生まれた答えがそれだった。

が、しかし。

「ちくしょー！ お姉ちゃんの作ったカレーが食いたいぞおおおおおおー！」

……そろそろ、色んな意味で限界に達している少年であった。

突如道のど真ん中で意味不明な絶叫をした旅人に村人の怪奇の視線が突き刺さるが、今の紫音にはそんなもの関係なかった。あまりの空腹状態に軽く脳内もやられてきたんだと思う。

少年は妄想する。

姉である美弦紀彼方と食卓に座り、2人つきりで楽しく食事をする光景を。

ついでにベットの上でキャツキャウフフする光景を。

「ふ、うふ、うふふふふふ……」

主に後者の妄想で危険な笑みが浮かんでくる思春期真っ盛りの紫色だった。

お姉ちゃんマジ天使！ お姉ちゃんマジ天使！！ もうリナちゃんなんか比較できないくらいマジ天使！！

と、そろそろ彼の意識が大人のエリアへ踏みかけた途端、外部から違和感を感じた。

クイクイ、と上着の隅っこが誰かに引っ張られている感覚。気のせいではないと思うが、物凄く覚えのある感覚だ。

つつい振り向く。そこにいたのは、レース模様の描かれたローブのような服を身に纏った茶髪碧眼の女の子。

（えっと……）

彼女は紫音の上着の袖口をきゅっと摘み、クリクリした大きな瞳でこちらを見上げていた。まるで何かを訴えかけているような、吸い込まれそうなほど真っ直ぐな瞳。

（幼女ですね、分かります）

……どこまでも論点のズレる少年である。

（まあ、そんな冗談は置いといて……。クレアちゃん、だっけ？）

そう、彼女は村長宅で始めて会った時、紫音に対して意味深な言葉に向けてきた村長グレンさんの娘、クレア・ジャゲッド・ギボンヌ。可愛らしい顔と透き通るような美声が特徴の幼じ、もとい、女の子だ。

この袖を掴まれる光景、以前のデジャビュな気がしてならないが、まあ今はどうでもいい。それにしても彼女、まだ小さな子供なのにこんなところで何をしているのだろうか。意外と暇人さんなのだろうか。

「のぶながさん……」

ふと、その小さな口から美しい声が漏れる。

ちなみに彼女、紫音のふざけた自己紹介の甲斐あって紫音のことを信長さん読んでくる天然属性も混じってるらしい。ふひひ。

（ちなみに言っておくが、俺はロリコンじゃない。本当だかね。どちらかというとシスコンだかね。本当だよ）

目の前の男の内心がここ数分で犯罪者色に染まり始めていることなど露知らず、クレアちゃんは紫音に向かって一言。

「のぶながさんは……ここで何してるの……？」

いきなり答えにくい質問だった。さすがのお兄ちゃんもグサツと来たよ。

「……」

「……？」

「……あれだよ、あれ」

「あれ……？」

「ええつと……、そう、散歩。散歩だよ散歩。信長さんは完全超人だから毎日気苦労が耐えなくてね、こうやってたまには体の疲れを癒さなきゃならないんだヨ」

頭の上にクエッションマークが出てきそうな表情を浮かべるクレアちゃん。彼女が幼い子供で幸いした。もし相手がリイナだったら、『で、本当は？』とか返されそうでリアルに怖い。

「そんなクレアちゃんは何をしてたの？」

できるだけ素早く話を切り替えるべく、同じ質問を目の前の幼じ、もとい、女の子へ切り返してやった。

こちらの瞳を純粹無垢な目で真っ直ぐと見つめてくる少女からの回答は、以外にも早かった。

「のぶながさんと同じ……おさんぽ……」

「そ、そう……」

それにしても、見れば見るほど可愛らしい女の子である。

ちよつとだけ顔が丸顔な気もするが、それは年齢的に仕方のないこと。肩まで伸びる茶髪は繊細で綺麗だし、目は大きい。肌だって

リイナに負けないぐらい白いし、何より声だ。

まず、一般女性ではなかなか出せない声だろう。親の遺伝かは何なのかは分からないが、あまりにも美声すぎる。毎度毎度小声で喋る彼女の音量を補正するかのように、その声質はどこまでも透き通るように美しかった。

将来、相当な美人になることは間違いないだろう。

まあ俺のお姉ちゃんには敵いませんけどねっ！！

「……」

と、彼女のことをじっと見つめていると、ふと紫音はある事を思いついてしまった。

（ふむ……これは……）

まだ幼いクレアちゃん相手ならば大丈夫かもしれない。

それで完全に決断した紫音は、早速行動した。上着のポケットに手をつ込み、取り出す。その手に握られているのはリイナからメモを貰ったピゴット村の地図だ。

「クレアちゃん、ちょっと聞きたいことあるんだけど良いかな？」

「……？」

首を傾げる少女。これをOKのサインと受け取った紫音は、折りたたんであつた藁半紙を広げ、その裏面——リイナのメモが記載されてる面を彼女へと向けた。

「ここに書いてある文字……一から読み上げてくれないかな？」

言い切つて、我ながらナイスな提案だと確信した。

まだ目の前の少女は幼い。紫音の言うことなど、真には受けるだろうがいちいち深くまで考えるほど脳は発達してはいないはずだ。ならば彼女の手を借りれば、リイナや道行く大人たちに尋ねる必要だつてないのだ。

なんだか子供を騙しているようであるせない気持ちにならなくもないが、ここは我慢である。これも自分とこれからのため、仕方のないことだと割り切ることにしておく。

尋ねられたクレアちゃんは期待通り紫音の言葉に従ってくれ、美

しい美声で一から順に読み上げてくれた。まったくもって素直である。ちなみに紫音は仕事の都合上記憶力はかなり大事なもので、今この場面でも一度読んでくれるだけで十分に理解することができた。

正直リイナが言う携帯食料の名称が意味不明な露語なのだが、まあ記憶できたので問題ない。元の世界ではカロリーメルトぐらいしか馴染みのある携帯食料がなかったものでちょっと違和感を感じてしまっただけ。

「うし……」

大体内で記憶した紫音は一息。これで第一の関門は突破した。残るは今現在の空腹をどうするかだ。

しかしここでも素直に手を貸してくれそうなのは目の前の少女だ。ぼけーとした様子で紫音の顔を覗き込んでいる天然少女には申し訳ないが、もう少しだけ力を借りるとしよう。

「そういえばクレアちゃん、お腹とかすいてない？」

「……？ 少し……」

「そっか、よかった。ならクレアちゃんのお勧めの食堂とかこの辺にないかな？ さっきのお礼って言っちゃなんだけど、俺が奢って上げるから一緒にどこか食べに行かない？」

言い切った紫音の言葉がしばらく理解できなかったのか、クレアちゃんは数秒ほど茫然とした様子でこちらを見上げていたが、ふと本当に一瞬なのだが、その表情に変化が現れたのを紫音は見逃さなかった。

笑み。

彼女の口元が、小さく、動いた気がする。

（へえ……そんな表情もできるんじゃない、この子）

表情の変化に乏しい子だとは思っていたが、それでも垣間見える感情にはそれなりの価値があるのだろう。紫音的にはいつもあの表情でいればもつと可愛いのに、と思ってしまう。

コクン、とクレアちゃんの首が縦に動いたのを確認して、思わず

紫音は安心した。これでようやく飯にありつける。長らく辛抱していたがこの拷問からついに開放されるのだ。

少女はクイクイツと紫音の袖を一度引っ張ると、すぐに離して独りで歩き出した。たぶん着いて来い、という合図だろう。

そう受け取った紫音は、慌てて彼女の背中を追いかけた。

クレアちゃんに連れられて入った店は、見た感じ古ぼけた一軒やにしか見えなかった。

しかしドアの前にはしっかりと謎の文字が羅列した看板が立て掛けられており、一応店としても機能してるらしい。店の中にはすでに数名の客が見えて、ほとんど女性だろうか、さりげない雑談をしていた。たぶんアレだろう、元の世界でいう近所のお母さん達との世間話みたいなものだと思う。

それらを傍目に適当な席に座った2人は、今現在メニューを見て注文を決めているところだった。と言っても紫音は文字が読めないで、またまたクレアちゃんの純粋な心を利用し……でなく、力を貸してもらってメニューを読み上げてもらっているところである。「シャムセムの温サラダ……280ういず……ピグダム風シュゼルハンバーグ……498ういず……」

にしても訳が分からない。わざわざクレアちゃんに読み上げてもらって何だが、一品一品の名称がまったく聞き覚えのない謎名称す

ぎて泣けてくる。シヤムセムって一体なんぞ。

まあ、『サラダ』とか『ハンバーグ』という名称は元の世界と共通っぽいので適当に頼めば意外と食えるものが出てきたりするかもしれないが、かかっているソースなどが想像を絶するものだという可能性も十分にありうる訳でありまして。はてさてどうしたものか。

「ピグダム風エスカルゴ…… 398ういず…… チョリソー……」

「あー…… クレアちゃん」

「198ウイズ…… ン……？」

「なんていうか、えっと…… そう、おススメ。クレアちゃんのおススメとかない？ なんならここの店で食べたことのある人の一押しとかの方が良いしさ」

「……？ わかった……」

頷くクレアちゃんは、素直にメニューの文字を眺め始める。まったく、どこまでも純粹な子である。そろそろこうやって口車に乗せるのが悲しくなってきた。

しばらくして、彼女は羅列する文字の一つを指差した。相変わらず読めないぜ。

「これは？」

「…… バインド…… ハンバーグステーキ…… 498ういず……」

「結構おいしいの？」

紫音の問いに、クレアちゃんは迷うことなく頷き返してきた。その時、またも一瞬だけ笑みが浮かんだ気がする。なんとも微笑ましい。よほど好きなんだろうか。

「ふむ…… じゃあ、これにするよ。クレアちゃんのおススメなら尚更だね」

「…… いいの？」

「おーけーおーけー。ほら、さっさと注文しようよ」

これ以上悩んでも仕方ないしね。腹減ったし。

それからすぐに金髪の爆乳メイドな店員さんと呼ぶと、さっさと注文を決めた。紫音もクレアちゃんも同じものである。

ちなみにメイドさんからするとかなり異色なペアだったのか、注文を聞きにきたとき一瞬だが目を見開いていた。まあ、突如やってきた旅人の一人と村長の娘さんが2人きりで食事をしにきたら確かに異様な光景ではあるが。

…… 何度も言うが俺はロリコンじゃない。本当だぞ。

「……」

「……」

それにしても、この子と一緒にいるとどうしても沈黙が多くなってしまう。

そりゃあ感情の薄い子だとはすでに分かっているが、紫音にとつてはそういうタイプの人が一番接しにくいのだ。なんたって彼はとてもとてもお喋りである。悪く言ってしまうえばクラスに一人はいるうざい奴だ。そんな少年にとって、自分の会話にまったくリアクションを取ってくれないタイプというのは接しにくいにもほどがあるのだ。

が、

「…… のぶなが、さん……」

予想外にもこの時は違った。

クレアちゃんの小さな唇が動き、話を切り出してくれた。

「 のぶながさんは…… どうしてこの村に来たの……？」

「ん？ ああ、それは――」

反射的に答えかけて、慌てて口をつづむ。まさか王国騎士団からの逃亡のため、休息がてらに寄つたなんて言えるはずがない。んなこと間違つても口走つたときには、まずリイナにどつかれて殴られて村を追い出されてしまう。まだ手配書が回ってないとはいえ、紫音とリイナは立派な手配犯なのだから。

すぐに脳内で別の言い訳を構築した紫音は、

「―― まあ、休憩がてらに食料補給にね。港町から隣の大陸に行きたいんだけど、途中で食料が切れちゃってさ」

要所要所のことには省いて、怪しまれない程度に喋っておいた。ま

あ、實際嘘を吐いているわけではないのでいいだろう。

しかし、クレアちゃんにとって本題はそこではなかったらしい。あまり紫音の回答に深く考えることはなく、さっさと別の話題について切り出してきた。

「じゃあ……ピゴット村の、おとぎ話は……知らない……？」

「おとぎ話？」

あまりにも別方向の話題過ぎて不意を突かれたが、彼女の年齢を考えると仕方ないことか。子供つてのはポンポン話の話題を変えることに定評があるかんね。

紫音はそんな思考を顔に出さないように気をつけ、口を開いた。

「この村のおとぎ話ね……、リイナちゃんからは何も聞いてないし、俺は知らないなあ。俺、ことと似たようなド田舎に住んでたから世間の情報に疎いんだよね」

疎いというかまったく無知ですけどねっ！

むしろ世界規模で住んでいたところ違いますけどねっ！！

「そっか……」

多少残念そうなトーンで声を漏らすクレアちゃん。紫音としてはなんだか申し訳ないが、本当に知らないのだからどうしようもない。しかしせっかく彼女から話を振ってくれたのだ、この気を逃すのは野暮というものだ。

「そのおとぎ話って、どんな話なの？」

身を少しだけ乗り出して尋ねてみる。

「知りたい……の？」

「まあね。さっきも言ったけど、俺ってば色々と無知だから。こういう事はなんでも覚えたいんだよ」

「……」

しばらく呆然とした様子で沈黙していたクレアちゃんだったが、やがて「ん、分かった……」と呟くとどこかたそがれるような目線で紫音の目を真っ直ぐに見つめてきた。

不覚にも、ドキッとした。

その視線に含まれる『何か』が、明らかにいつさっきまでのクレアちゃんにはなかったものだったから。年齢とは見合わない、子供とは思えない、別の『何か』がその一瞬で彼女の視線の中に含まれていたのだ。

そう、まるで。

初めて彼女と会った時、“森の神様”について彼女が語ったときと同じように。

「むかし……ピゴット村では、年にいちどのある儀式があったの……」

「……儀式？」

クレアちゃんは小さく頷き、

「それは……いけにえの儀式……年にいちど、村に住む若い女性を……いけにえに、ささげる儀式……」

思わず吹き出しそうになった。

てつきり儀式だなんて言うからアルスウエルの面踊りみたいなもんだと思つたら、なかなか物騒なものだったらしい。まあ、たかがおとぎ話ではあるのだが、おとぎ話にしてはなかなかネガティブな話っぽい。

「儀式のはじまりは……あるとき、村の悪い人が森の木を何本も切り倒したからだって言われてる……。それで“森の神様”がお怒りになって、年にいちど若い女性をささげないと……村に災いがあるの……」

「災いって……例えばどんな？」

「……大勢の魔物が、村人を襲いにきたりする」

それはまた……色々としこい話だ。

おとぎ話にしては『設定』が色々細かい気がするが、時にはこういう話もあるのだろう、と割り切っておく。それよりも今のクレアちゃんの台詞の中に、どうしても気になってしまう単語があった。（“森の神様”、ね……）

それはクレアちゃんが紫音に対して開口一番吐いてきた謎の台詞。

——“森の神様”を、殺してくれる？——

「……それで、続きは？」

「……うん」クレアちゃんは一息吐き、「森の神様は……毎年毎年村人からささげられるいけにえの女性を食べて、怒りをおさめていた……。それは、すごく悲しいことだったけど……それで村の平和はまもられていたから、村人は満足していた……」

「ふむ……」

ここまで聞いた限り、なかなか面白い話だった。

ちよつと逆鱗に触れたからって女性を毎年喰らうという森の神様もそうだが、その現状で満足している村人の根性なども色々と気に食わない。もし紫音がそのおとぎ話の中の登場人物なら、せめて森の神様への反逆ぐらいは起こすだろう。

「でもあるとき、そんなピゴツト村に変化が現れたの……」

「変化？」

「……今年の儀式がちかづいた時、突然村にある旅人が現れたの……。その旅人は、大きい剣を背中に背負っていて……すごく強い、旅人さんだった……」

クレアちゃんは口を休めることなく、

「旅人さんは、村人に歓迎された……でも、歓迎されたからこそ、旅人さんは時期がちかづいてきている『儀式』のことについて……知ってしまった……」

なるほど、と思う。

人間というのは仲良くなればなるほどお互いのことを知りたくなってしまうものだ。最近のことで良い例を挙げるなら、紫音とリィナのように。

この物語の中での旅人は、村の人々と仲良くなってしまったせいで、余計な情報についても耳に入ってしまったのだろう。

「で、その旅人さんはどうしたの？」

「……旅人さんはすごく良い人だったから、そんな村のおきてが許せなかった……。だから旅人さんは……村の人を説得して、たった

一人で森の神様と戦いにいったの……」

「……結果は？」

「……旅人さんは傷だらけになって帰ってきた。でも……その手には、森の神様の頭が握られていたんだって……」

つまり、そういうことか。

勝ったんだろう、その勇敢な旅人は。

辛い戦いを経て、森の神様とやらの首を剣でぶった切ることによって。

「旅人さんは、村人たちにすごく感謝されて……いつの日か、勇者と呼ばれるようになった……。旅人さんが村からふたたび旅立つとき……村人たちは決めたんだって……」

彼女は一度その瞼を閉じると、

「いつか彼の持つ勇気を、自分達も持てますように……」

「……」

なんというか、最初は色々と残酷な話だったくせに、終盤はご都合主義というか……。

ただ、彼女のような小さな子供には好かれる話なのだろう。それに最後の台詞。あの部分だけは、紫音が聞いても色々と考えさせられる台詞だと思う。

ま、所詮は作り話なんだろうけど。物語の雰囲気的に、たぶんライトユーザーを狙った話なのだろう。

「……こんな、話」

閉じていた瞼を持ち上げる。その時に見えていた彼女の瞳には、すでに『何か』は感じられなかった。いつも通りのぼけーとした雰囲気しか読み取れない。

「どう……だった……？」

どうと聞かれてもね。

まあ、話を聞きだしたのは紫音の方だし、ここは何か感想的なものを言うべきだろうか。

「んー……まあ、あれだね。よくありそうな話だったね」

「……」

なぜか残念そうな表情なるクレアちゃん。やばいと思ったね。

「あ、あー！ でもあれだよ、最近に変に話をこじらせすぎて訳分からんってパターンが多いし！ たまにはこういうお話もいいんじゃないかな？ それにほら、最後の方は凄く良い話だったし」

すぐさまフローを加えると、今の一瞬が嘘みたいに表情を戻すクレアちゃん。まったく、子供の相手ってのは疲れるものだ。

（それにしても……アレだなあ……）

今のおとぎ話を聞く限り、どうしても紫音は今ある自分の現状と比べざるおえなかった。

いや、むしろそう思ってしまうのが当たり前ってぐらい今の状況と紫音やリィナの立場は酷似していた。

さすがに今あるピゴット村を“森の神様”なんて胡散臭いやつが縛っているとは思えないが、普段誰もこない村に突然旅人がやってくる辺りが特に被ってしまふ。まあ、別に紫音はデカイ剣を持っている訳でもなければ、そんな女一人を丸呑みにしてしまうような化け物相手に勝てる自身も皆無なので、紫音がこの村の『勇者』になれるとは思えないが。

だが、もしかすると。

初めてクレアちゃんに会った時、彼女は森の神様を殺してくれるかと、疑問を投げかけてきた。

彼女が年齢に見合った精神年齢で物語と現実をこっちゃにしているのなら話は分かる。いや、それが正当な判断だろう。しかしその判断をゆらつかせるものがたった一つあった。

それは、“森の神様”について語るクレアちゃんの瞳。

あのような真っ直ぐとした『何か』がある瞳は、そう易々とできるものではないのだ。それこそ、その人にとって何にも譲れないほどの貫き通したい信念でもない限り、絶対に。

まさかと思う。

だが、もし仮に、そのまさかだったら——？

「のぶながさん……料理、きた……」
「え……」

つい考え事にふけっていた紫音の意識が、当のクレアちゃんの声によって現実に取り戻された。

正面を見ると、いつの間にかテーブルの上には料理が運ばれていた。確かバインドハンバーグステーキとかいうやたらキメてる名称のハンバーグだ。熱々に熱された黒い鉄板の中心にドンっと配置され、ジュウジュウと香ばしい音を響かせている。肉の脇にカットされたポテトとかコーンが乗っている辺りがいい感じに見た目を取り繕っていた。

久々に見るまともな食事を前にして、紫音のテンションが一気に上昇した。

今なら神様の幻想だってぶち殺せそうな気がする。

「……」

ナイフとフォークを手に取りつつ、何となく紫音は視線だけでクレアちゃんを見つめた。

彼女は少しだけ頬を綻ばせ、すでにハンバーグにありついているところだった。その時の表情はどこか嬉しそうで、年相応の雰囲気彼女からにじみ出ていた。

それを見ていると、なんだか自分の考えていたことが馬鹿みたいだ。

そうさ、彼女みたいな可愛い女の子が……有り得る訳がない。思わず考えてしまった『最悪のパターン』を無理矢理頭から振り払うように、紫音も彼女に習ってカットした肉を口へと運んだ。

「んぐ……、そういうばさ、このハンバーグってなんの肉使ってるの？」

「……分からないの……？」

不思議そうな様子でこちらを見てくるクレアちゃん。仕方ないじゃないか、別の世界で生きていたんだから。こちらと代表的な肉なんて牛と豚と鳥しか知らないのだよ。

「これは……狼の、魔物のお肉……。バインドウルフ、だったと思う……」

「……今、なんと？」

「……？ バインド、ウルフ……」

それを聞いた瞬間、紫音の手が思わずピタリと停止した。

バインドウルフって、確か……この村に入る前、リィナちゃんが惨殺した……、

「わん、わん……？」

……な、なるほど、だからバインドハンバーグなのね。

ええ、完食するのに1時間は掛かったね。

第16話：それでも俺は悪くねえ

「のぶながさん……ばいばい」

「うん。またね」

紫音やリイナが泊まっている宿の入り口手前。

あの後、クレアちゃんの手助けの甲斐あって頼まれていた買出しも済ませた紫音は、片手に大きめの紙袋を抱えながらクレアちゃんに別れを告げた。

そろそろ時間も時間ということが分かっているのか、夕日が昇ってくるのを確認するや否や、彼女はすぐに家へ帰ると言い出した。親である村長さんの育てが良いのだろう。一度こちらに向かって手を振ると、小動物を思わせる小走りで村長宅の方へと走り出した。

「帰りに気をつけるんだぞー」

背中に向かって一応念を押しておく。クレアちゃんのようなしつかり者ならば（少し天然入ってるけど）大丈夫だろうが、あの年齢の子供には小さい頃からちゃんと言い聞かせておくべきなんだろう。

「……さて、そろそろ入りますか」

途中色々問題に突っかったが、何とか腹の減りを収めることはできたし、リイナに頼まれていた買い物も済ませた。めでたしめでたし、さすが俺様完全超人。これも全てクレアちゃんのおかげだと思う。今後彼女には改めて御礼をしたい気分だった。

とにかく、今はこの荷物を俺らが親方様、リイナちゃんに届けるのが先だろう。

抱える紙袋を抱えなおしつつ、数時間ぶりに紫音は宿の中に入った。……大体予想はできていたが、まったくの無人空間である。つまりお客ゼロ。さすがだぜ田舎クオリティ。

——と思われたが、ふと気付く。花瓶や売り上げ計算でもしているであろう薄っぺらいファイルが置いてあるカウンター。そこにポツリと、たった一つだけ人影を確認することができた。

この宿の店主さんである。

数時間前にリイナと会話したときの印象を察するに、かなり高圧的な女性だ。身長は女性にしては高いし、まるで自分の性格を象徴するかのようなポニーテールの赤い髪。もし仮にあの髪が地毛でなく、ただ単に赤く染めただけなのならば喧嘩最強女番町に見えなくもない。

「……」

そんな彼女は今、ペンを握って黙々と何かにペン先を走らせている真っ最中だった。紫音のいる距離からでも分かるほどの集中ぶりである。なんたってこちらの存在に気付かないほどのだから、思わず『なに書いてんの?』と口に出してしまいそうになるが、すんでのところで言い留まる。よほど集中して作業をしているっぽいし、それを邪魔するのもなんだか気が引ける。……そもそも、リイナとの揉め事があったせいで彼女は紫音たちにあまり良い印象を抱いていないはずだ。真っ向から質問したところで返事が返ってくるかさえ怪しいものだ。

とりあえずこの場は知らないフリでもしておこう。カウンターで作業をし続ける女性を視界に入れないようにして、紫音はすぐさま二階へと向かった。

「リイナちゃん！ 愛しの紫音君がただいま帰ったZEE!!」

紫音のアホな性格を知らない人が聞いたら確実に誤解で生むであろう発言を叫びながら、バンッ！！と勢いよくドアを叩き開く。さあリイナちゃん、俺の胸に飛び込んでおいで！ あっ、でも体の関係は駄目駄目だぞ？ 俺にはお姉ちゃんっていう将来を誓い合っ

た女性がいるからサ、とかいう謎妄想を一瞬で脳内で組み立てられる辺り、色々と可哀想な少年であった。

「——って、あれ？」

……おかしい、いつものノリならここで拳の一発でもツツコミが飛んでくるのに。

しかしそこで気付く。改めて部屋の中を見渡すが、そこにあるのは二人分のベットとちゃぶ台みたいな小さな机。それに簡単な引き出しや物入れ。あとは紫音とリイナの私物ぐらい。

リイナ本人の姿が見当たらなかった。

「……？ お留守？」

どうやらそうらしい。この部屋に隠れる場所なんざ皆無だし、そもそも隠れる意味もないし。

まさか紫音が居ない間に、リイナはリイナで外出してしまったのだろうか。

はっ！？ それともまさか、村に住む飢えた男どもがリイナちゃんの美貌に酔いしれ、複数人で彼女を連れ去ったとか！？　そしてもう誰も住んでいない取り壊し予定の家の中であんな事やこんな事を……ッ！！

（っていう冗談は置いといて。どこ行っちゃったんだろ）

しっかり者の彼女にしては珍しく、書置きなんかも見当たらない。まさか本当にむさい男集団に連れ去られてレイプを受けているわけじゃあるまいし、てゆーかそれなら俺も混せてほし……もとい、のんびりせずに助けに行かなきゃなんないし。まあ、とんでも晶術を行使できるリイナならばその心配もないのだが。

（……つまりトイレか何かかね）

適当に結論付けておいて、リイナについては考えるのをやめた。とりあえず抱えていた買い物袋を机の上に降ろすと、ひとまず用事もすんだ事で一息つく紫音である。

軽く息を吐いて、とりあえず無駄に重いブレザーの上着を脱ごうとボタンを外しに掛かる。そのまま袖を通しつつ——、そこでふ

とした事に紫音は気付いた。

(……む、そういえば)

思い出したら思い出したらでつい手が伸びてしまう紫音。片手で上着のポケットを順に探っていくと、右胸の内ポケットでようやくそれを掴むことができた。

「……ありやいや、やつぱり折れ曲がつちゃってるかあ」

紫音がそこから取り出したのは一枚の写真だった。色は軽くはげていて、こちらの世界に来てからかなり暴れまわったせいで折れ曲がっている、決して出来がいいとは言えない写真。

紫音がこちらの世界に落ちてくる際、身に着けていたおかげで未だ所持している数少ないアイテムの一つだ。

折り曲がっている部分を丁寧に戻しつつ、紫音は写真に写るモノを何となく見つめた。

「……………」

その一画面に写るのは、一つの『家族』。

真正正銘、美弦紀家の家族写真だった。

端から順に、伯父、母、父、紫音、そして姉である美弦紀彼方。かなた

この写真は……そう。一年前、美弦紀彼方が紫音の前から姿を消したその時から、紫音がずっとお守りとして身に着けているもの。元の世界の所持品なんてキシリトールのガムくらいしかないものだとずっと思いついていたので、まったく気付いていなかった。というよりも色々ありすぎてここまで思考が追いついていなかったと言ってもいい。

この写真を眺めて、自然と目が行ってしまうのはもちろん姉の姿だった。自分自身が認められるほど、心のそこから大切だと思える数少ない女性。とても大好きな女の子。愛していると言っても過言ではない。たぶん姉の存在は、紫音が始めて『そういう感情』を抱いた相手なのだと、今過去を振り返っても頷くことができる。

ただ、その隣にいる過去の——それこそまだ10年ほどしか生きていない頃の自分は、なんだか感情のない瞳をしていた。……仕

方ないことだとは思う。今でも覚えているが、この写真を撮ったのは紫音が美弦紀家に招かれて間もない頃。あの頃の自分は、まあ、色々あったせいで生きる意味すら失っていたのだ。しかも美弦紀流の体を殺すような修行も同時進行だったので、身も心もボロボロだったのだと思う。

「……」

自分自身の人形のような表情と、その隣でカメラアングルに向かい薄く微笑む姉。

二人の顔を交互に見ていると、思わず、紫音の脳内には出来るだけ押さえ込んでいた過去の記憶が蘇ってしまう。時々夢に見て悲鳴と共に目覚めてしまうほどの、強烈で、残酷で、絶望に染まりつくした数々の記憶が。

「……………っ、やめだやめ」

無理矢理に過去を反芻する思考を遮断する。このまま続けては絶賛鬱モードに100%突入してしまうことは何となく分かっていた。そんなの美弦紀紫音のキャラじゃない。過去の出来事にだって、今はもう踏ん切りがついたのだから。

（……………あー、一気にテンションが暴落してしまった。必要もない時は余計なことには触れない方が身のためだね）

軽く溜息を吐きつつ、写真を上着の胸ポケットに戻して、その上着とその辺にぶん投げておく。完全超人の紫音様は寛大だから、今はこの程度の八つ当たりで済ましといてやるぜこの野郎。

……………。

……………それにしても、暇だ。

……………それにしても、暇だ。

……………大事なことから二回言いました。

ただでさえテンションが落ちまくっているというのに、気分転換すらできないとは何たるか。この場にリイナでもいればいつも彼女が愛読してる文庫本の内容を問い詰めたり、さりげなくボディータッチしてぶん殴られたり、ならば言葉だけでセクハラしてまたまた

殴られたり、色々と暇つぶしの手段はあるのだが……生憎そのリイナが留守なのだ。困ったものである。

「んー……」

とにかく何か考える。

このままでは暇すぎて死ぬ。あれだ、孤独死とかしちゃう一部の動物と同じだ。暇すぎて暇死するぞこのままじゃ。

……うーむ……。

……。

「——、よし。風呂入ってこよう」

なぜそう思ったのかは簡単だ。

まず一つに、アルスウェルを出てからまったく体を洗っていないことに気がついたから。さすがにこれ以上体の汚れだの汗だのを放置しておくのはマズイだろう。

そして二つ目に、大体ギャルゲとかエロゲで主人公が馴染みのない場所で風呂とかに入っていると必ずイベントなどが発生するのだ。ほら、例えば女の子の裸を目撃しちゃうとかさ。俗に言うラッキースケベ。……いや、別に俺はそんな展開になりたいとは思ってはいないぞ。本当だぞ！　ただ、あれだよ、本当にリアルでもそのようなステキ……じゃなくて、不運な事が起きるのかどうか、この俺が代表になって確かめようとしているんじゃないか！　文句あつか！　……まあ、今この宿にいる女性なんて宿主の赤髪女しかないの
で、ほぼ冗談なのだが。

とにかく、一度体を洗い流して綺麗さっぱりしたい。丁度気分も暴落していたのだ、意外と良い気分転換になるかもしれない。

さつさと次の目的を決めた紫音は、自分用のタオルをリイナと共同の鞆から取り出すと、嬉々として風呂場——この世界で言うなら水浴び浴場へと足を運んだ。

浴場が建物の一体どの位置にあるのか、アルスウェルの宿とほぼ同じ構造の建物だったおかげですぐに見つけることができた。

階段を下りて、そのまま反対の位置にあるカウンターの脇道。そこを進んでいくとそれっぽい入り口を見つけることは簡単だった。どうやら男女に分けられて二つの入り口があるのだが、いかんせん今この宿にいる者で浴場を利用する者など紫音しかない。ちなみに宿主の女性は未だカウンターの席で黙々と作業を続けていた。まあとにかく、どちらを使おうが紫音の勝手というわけ。なので深く考える事はせず、適当に入り口を潜っておいた。

脱衣室でちゃっちゃと衣服を脱ぎ捨て、腰にタオルを巻いておく。そのまま浴場へと続くスライド式のドアに手をかけた。

——が、ここに来て思わず紫音の手が止まった。

それは、アルスウェルで同じように水浴び浴場へ入り、何も考えずに極楽極楽していたら不意に起こった、恐ろしい出来事を思い出してしまったからだ。

「……」

見覚えのない男が胸まではだけたツナギを着込み、背筋を舐めてくるようなむず痒い視線でこちらを見つめ。

さらには意味不明な言動を撒き散らした挙句、物凄いスピードでそりゃあもう手馴れた動きで紫音の貞操を奪おうとしたあの阿。もどき。奴の姿が不覚にも脳裏をよぎったせいで、つい紫音の手が止まってしまった。

（い、いや、まさか……ね？ ああ、あのゲイ野郎はアルスウェルの宿で

働いているんだ、まさかここにまでいる訳……ない、よ、ね……？）
ビビりすぎじゃないかと思うかもしれないが、この反応は人間として当たり前だと思う。なんたって以前は、あと一瞬でも紫音の反応が遅れていれば確実に掘られていたのだ。一人の人間にとつて人生たつた一度しかない童貞野郎の称号を、女性ならともかく年上のガチムチ男に奪われそうになったのだ。誰だってトラウマになはず。

（……というか、待て。落ち着くんだジョー）

今の自分はただ単にフラグ建築してるだけじゃないか？

作り話ではよくあるパターンだ。こうやって恐れれば恐れるほどの展開で必ずそうなってしまう。その『ルート』へと進んでしまふフラグを自ら立ててしまっているのだ。

つまり、今の紫音は自分で悩んで自分の罠に引っかかっているだけ。このままではマズインじゃないのか……？

（ぬ、ぬうう……こうなったら自棄だ！）

紫音は心を決めると、一旦手を引く。

そして大きく息を吸うと――、

「オラア今度はこつちから来てやつたぜこの変態野郎！！ 別にお前なんか怖くないぞ！ もちろんお前に童貞をささげる気はさらさら無い！ 今ここで前回の決着をつけてやる！ 物理的にお前の大事な部分を捻って千切ってもいでやるから覚悟しろおおおおおおおおお！！」

ズッパァン！！ というとんでもない音を響かせながら扉を開く。恐れては駄目だ、立ち向かえ美弦紀紫音。ここは正々堂々、あの男がいたらの話だが、徹底的にぶっ飛ばすしか選択の余地は無いぜ！ 素晴らしいどや顔で颯爽登場する紫音。

……が、しかし。彼の目の前に広がる光景を目視した瞬間、紫音の時間が確実に止まった。

別に例の阿。もどきが全裸待機していたとか、そういう事ではない。紫音自身の立ち向かう姿勢が見事フラグをへし折ったのか、彼

の恐れていた事態は回避することが出来た。

だが。

だがしかし。

「……、え？」

どや顔で停止する紫音の先——そこにいる人物が、思わずといった感じに声を上げる。

軽やかな曲線美、透き通るように白く綺麗な肌、細い手足、繊細な薄茶色をしたロングヘア、大きく見開かれたライトブルーの可愛らしい瞳。そして何より、小ぶりの胸の天辺にあるピンク色の蕾。ここまで言えばわざわざ確認しなくても理解していただけと思う。

正真正銘リイナちゃんが、あわれもない姿でそこにいた。

「
……
」

> i 1 7 5 8 2 — 1 8 7 <

複雑な思いを込めて沈黙する二人。

幸いにもデیفエンスに定評のある湯気が彼女の大事な部分をばかして誤魔化し、紫音の立ち位置からではハッキリと見えることはない。だが逆に言えば、ここから一步でも動けば視線の角度がずれ

て確実に見えてしまう。

そもそも大事な部分と言っても、乳房に関しては現在進行形で見つめ放題である。紫音が言っているのはそれよりもっと下——股辺りのうんたらかんたらだ。

この際だからはっきり言おう。

やばい。

激しくやばい。

ついさっき偶然にも女の子の裸を拝める奴はラッキースケベとか言っただが、今ならそれを撤回できる。ギャルゲの主人公の気持ちが薄々ながら理解できてしまった。

そこに見えるはずがないのに、紫音の目には選択肢が映し出された。しかも制限時間付き。

たった一つを選択肢が命運を分ける。

一寸でも間違った選択をすれば、紫音の命はここで確実に根絶やしにされる……！

「あ……あの、リイナ……さん？」

「……」

「こ、これには深いわけがありましたですね……。別にわたくしは、その、下心があったとかそういう訳ではなく……ただ純粹に、ね？」

男湯と女湯を、ね？ 間違えただけでありまして……ね？」

ダラダラダラとんでもない量の冷や汗が吹き出してくる。

溢れんばかりの殺気がリイナからじわりじわりと伝わってくる辺り、現実味がありすぎて普通に死ねる。

やがて、目の前の少女は一言。

「——入り口で、男と女に分けられているのに？」

すみません！ 一人だと思って適当に入っちゃいました！ といつか文字読めません……！

それとその低音ボイスやめてください！

「あ、あああ、あの、ね……？ え、えーっと、そそ、その……」

「……言いたいことはそれだけ……？」

「ひいつ!? ま、待つて! 待つてください! こんな僕達でも話せば分かり合えると思うんです! だからほんと! 武器を取り出すのだけはマジやめて!! リアルに女湯で全裸刺殺エンドなんて洒落にならないですリイナさん!! だから——」

「一体誰の大事な部分が捻って千切つてもがれるか教えてあげるわよ死ねエエええええええええええええええええええええええ!!」
「ひいいいいいつ!?」

瞬間、どうみても紫音の脳天目掛けてぶっ飛んでくる一振りの短剣。ぎりぎりのところで首を振ってかわすが、飛んでいった短剣は奥の壁に深々と突き刺さる。当たつてら確実に死んでたぞおい!

だが、よく考えてみたらリイナの使う短剣は二本一組。つまり、
「避けんな! 馬鹿っ!!」

「つまり死ねつて事!？」

もはやリイナは大事なところを隠すことを完全に忘れ、残る一本の短剣を駆使し物凄い勢いで切りかかってくる。客観的に見ればハアハアできる光景かもしれないが、当事者からしてみれば冷や汗物でしかないのだ。

慌てて体を翻すと、浴場の中を全力で逃げ回る。もちろんそれを凶器を振り回しながら追いかけてくるリイナ。まずい。死ぬ。本当に死ぬ。一歩間違えれば本気でデッドエンドなんすけど!

「ま、待つて! 落ち着いてリイナちゃん! だからこれには色々
と深いわけがあつて——!!」

「うつさい! へ、平然と人の裸を見ておいて……っ、馬鹿! 変態! エッチ!」

「だ、大丈夫だつて! 見たつて言つてもその素っ気無いちんちくりんな胸くらいしか……あっ」

「~~~~っ!? 人のコンプレックスをよくもおおお!!」

ミスったよ火に油注いじやつたよ!

そんなこんなやつていいるうちに、いつの間にか壁へと追い詰められている紫音。

（や、やべえ……！？）

どれくらいやばいかというと、今まさに人間魚雷となつて敵艦隊に突っ込もうとしている特攻隊並みにやばい。つまりどういう事かという、俺オワタ（＾o＾）ノ

立ち止まり、思わず振り返る紫音。そこには予想を遥かに越える鬼の形相を浮かべ、一振りの短剣を握り締めている素っ裸の貧乳悪魔。アレだ、確実に殺られる5秒前だ！

……と、思っていたが、そこでふと思ひ出す。

（……素っ裸？）

最初から気付いていたことだが、リイナはさつきからずっと一糸纏わぬ裸体である。ぬれた髪の毛は白い肌に張り付き、その肌も軽くピンク色に火照っている。

そこまで考え、思わず紫音は野生の血に駆られその視線をリイナの大事なところ——つまり秘部へと移してしまい、

「……なぶっ！？」

女性経験皆無の紫音にとって、それを拝むのはまだ早かった。

あまりの感動に鼻血をぶちかましたぜ！

が、紫音のそんなリアクションでようやく正氣に戻ったのか、リイナの動きが何かに気付いたかのように停止する。まるでこの世の終わりでも見たかのような表情だ。

「あ……あ……」

少しずつ、怒りの形相だった表情に赤みが差していき、羞恥へと姿を変えていく。それもそうだ。なんたって同年代の男の子に自分の裸をこんな間近で目撃されたのだから正氣を保ってられないのも当然である。

……つかリイナさん、それ気付くの遅いっす。

カランカラン、と虚しく音を立てて地面に転がる短剣。それすらも気付かないほどリイナの氣が動転し始めているのか、彼女は今までに見たこともないぐらい顔を赤く染め、わなわなと震えていた。

「……」

って、いかん！ 今何を考えた美弦紀紫音！

それよりも、リイナには悪いがこれはチャンスだ。彼女の気持ちに整理が付かないうちに逃げるしかない！

「ご、ごめん！」

その一言だけ何とか言い切ると、紫音は慌てて彼女の傍らをすり抜けつつ逃げ出した。なんだか女の子の恥じらいを利用したみたいで物凄く後味悪いのだが、今はそれを気にしている場合ではないのだ。すんません親方様。

自分でも驚くほどの物凄いスピードで服を身につけると、そそくさと脱衣所を後にした。

「……っ、はあ、なんとか、生きて帰る事ができた……」

命からがら逃走することに成功した紫音は、思わず膝に手を突いて大きく息を吐いた。

正直、今回ばかりはガチで俺の人生終了するんじゃないかと戦々恐々としてしまった。たぶん今回ののは、リイナちゃんの恥ずかしがり屋な性格の一面が奇跡的に紫音の命を救ったと言ってもいい。

（つーか、最後のシーンだけまるで俺が悪者みたいな構図だったんだけど……、気のせいだよな）

いや、実際に悪いけどね。

でも言い訳をさせてくれ。俺はそもそもこの世界の文字が読めな

いし、男と女の表記が分からなかったんだ。だからこれは不可抗力だ。ええ、絶対にワザとじゃないんだ。俺は悪くねえっ！俺は悪くねえっ！

「……あとで土下座してでも謝らないとな」

その際に問答無用でグサッと一撃食らうことだけは避けたい美弦紀紫音だった。

はああ、と先のことを考えてつい深い溜息が零れてしまう。こうなってしまったのも確実に紫音の自業自得ではあるのだが、それでも気落ちせざるおえない。まったく、そもそも気分転換も兼ねて風呂に入ろうとしたのに、何が嬉しくてこんな目に合わなきゃならんのか。そりゃあ、まあ、成り行きで目撃することになってしまった光景は幸か不幸かと聞かれると……、

（つて、何思いだしてんの俺！駄目だ駄目！忘れる！）

「……うえ、えっへっへっへ」

……考えている事がどこまでもモロバレな少年であった。
と、

「——おい」

不意に横合いから挟まれる、声。

ハッとなり声のした方向へ振り向くと、

「あ、どうも」

そこにいたのは赤髪ポニテの女性。——そう、この宿の宿主さんであった。

彼女はカウンターの席に座ったまま、その鋭い視線で見下すようにこちらを見つめている。その高圧的な目、ハードMの自分自身がちょっと目覚めちゃいそうでなかなか刺激的なんですけど。

「……お前、ンなとこで何やってんの？」

まるで『邪魔なんだよさっさと消えるボケ』とでも物語るような視線。あらやだ怖い、もっと罵ってください。

……とかいうDM思考はなんとか自制しつつ、

「いや、まあ、色々ありまして……。ほら、あるじゃない？ いつ

も仲の良い友達と些細なことで喧嘩しちゃうことって」

「お前、女の浴場に突っ込んでったんだろ」

「なんで知ってんの!？」

反射的にツツコミを入れてしまい、思わず後悔する。これじゃ男単身で女風呂に突撃したことを自分で認めてしまっているみたいだ。やべえ見知らぬ街の全く他人にいきなり変態レッテルを貼られるとかマジやべえ! とすぐにでも言い訳に走ろうとした紫音だったが、

「……ここからじゃ浴場への入り口が丸見えだからな。お前が表札も確認せずに入って行っただのは嫌でも知ってるっつの」

あれ、あまり悪い印象を抱かれていないぞ。

もしかすると下心なく普通に間違えて入って行っただと思ってくれているのかもしれない。別に間違いでもないのですそれは物凄くありがたいのだが。

「へえー」

「……なんだよ」

「いやさ、あんた意外と柔らかい性格してるんだなって」

「……」

普段から仏教面のくせに、紫音の台詞を聞いた途端ますます不機嫌な表情になる彼女。まるで『本当ならお前なんかに話しかけたくない』といでも言っているかのような態度である。まったく、表情さえどうにかすればハードMの俺としては1日ぐらいぶっ続けで奉仕してあげたのに。性的な……もとい、健全な意味でね。

ちなみに自称ハードMの紫音として最も好ましいのは、薄ら笑顔でじりじりと絞めてくるタイプの本格的なDS女性だ。つまりお姉ちゃん。お姉ちゃんマジ天使。俺、お姉ちゃんに罵られるなら地獄に落ちて文句ないよ。

「……お前、見た目によらず独り言が激しいんだな」

「おっと失礼」

毎度思うが、独り言を呟いている最中の自分は一体どんな顔をし

ているのだろう。

気の強そうな目の前の女性でさえ若干引き気味になっているのでよほどの事なのだろうか。

「——それにしても、俺達のことあんだけ毛嫌いしてたのに、そっちから話しかけてくるなんて何か用事でもあるの？」

グダグダするのも面倒なのでネツクになるところを直球に訊ねてみた。

こちらとしてはすぐにでも部屋に戻り、土下座で待機してリイナちゃんに平謝りしたい気分なのだ。言い方はちよつと悪いが、余計な話はすぐにでも終わらせたい。

「いや、とくにはない……」

「なら——」

「……けど、お前に一つ聞きたい事があつてよ」

用事あるじゃん、と喉まで出かかったが何とか踏みとどまる。この女性の事だ、少しでも癪に障れば蔑んだ目線で罵られるに違いない。それはそれで構わないのだが、今はさっさと話を進めるべきなのだろう。

彼女は一度紫音から視線を外すとたそがれるようにあさつての方向を見つめ、

「お前、ここに入ってくる前に入口の前で誰かと話してただろ。誰なんだ？」

「……？」

意外な質問だった。

てつきり紫音としては、あの生意気女の苦手なものを教えろとか、生意気女の弱み握らせろとか言つて締め上げられるもんだとばかり思っていたが意外にそうでもないらしい。かなりまともな質問である。

紫音は一瞬だけ考えると、

「誰つて……、クレアちゃんのこと？」

一応素直に答えておいた。こういう場合、元の世界ではストーリーカ

「だの何だのという問題が持ち上がりかねないので教える訳にはいかないのだが、なんとたつてここは異世界である。しかもその超田舎町。見た感じ村人たちはみんな仲良こよしみたいな雰囲気が見取れる。万屋の勘は、クレアちゃんの名前を上げたとしてもなんら問題はないと語っていた。」

「お前、村長の娘さんと仲良いのか？」

「仲良いつていうか……、向こうから関わってくる感じ？ 懐かれつつていうか」

「ふーん……」

もちろんのことだが、クレアちゃんに懐かれた事に後悔はない。むしろ今では感謝しているほどだ。彼女がいなかったら今頃紫音は飢えて死んでいるところだったのだから。いやマジで。

「……なるほど、ね」

「？ それがどうかしたの？」

何かを悟ったかのような表情になった女性に理由を問うが、彼女は『いや、別に』と素っ気なく返してくるだけだった。まるで何かを隠していますとも言わんばかりの態度だが、ふむ、これは……。

「——聞きたい事はそれだけだ。もういいよ」

あっち行け、と言わんばかりにこちらに向かって片手をひらひら振ってくる女性。

しかし思春期真っ盛りの紫音としては、そういう事をされると逆に行きたくない衝動に駆られてしまう訳で……、

「じゃ、換わりに俺からも一つ聞いて良い？」

「……チツ、なんだよ」

ここはあれだ、さつきからずっとネツクになっている部分を聞かない。それはもう気になって気になって仕方なかったのだが、あえて突っ込まずにいたのだ。だけれどこうやってチャンスを手に入れてしまつてはもう我慢できない。

「あのさ——あんたの名前、教えてよ」

「……は？」

「いや、だからあんたの名前」
そう、これである。

さつきからこれが気になって気になって仕方なかったのだ。
目の前の女性は予想外の質問に素っ頓狂な声を上げていたが、コミュニケーション大好きな紫音としては相手の名前とは大事なもののそれに一体いつまでこの村に滞在するかは不明だが、この宿にいる最中は少なくとも絶対に関わりを持つ事になる相手だ。いつまでも『あんた』だの『宿主さん』だのは、なんだか居心地が悪い。

「……ンなこと聞いてどうするつもりだっつの」
「別に？ ただの興味本位だけど」

なんだかふてくされた様子で沈黙する女性。むう、さすがに慣れ慣れしすぎただろうか。

しかし、以外にも数秒後には彼女の口から答えが返ってきた。

「カロール」

「え？」

「カロール・コロヌ・デュルケーム。あたしの名前だ」

意外と素直に答えてくれてちよつと啞然とさせられる。

ふむ……カロール、カロールね……。

すぐさま万屋脳にその名前と顔を記憶させる紫音。やっていた仕事の仕事なのでもはやこの名前を忘れる事はないだろう。自慢じゃないが紫音は、万屋を経営していたおかげで記憶力には自信があるのだ。

「……ふむ、さんきゅー。カロールちゃんね」

「ちゃんはやめろ、気持ち悪い」

言われると思ったよ。

「じゃあカロールで。俺は美弦紀紫音。紫音でいいよ。変な名前だけよろしく」

一応礼儀って事で自分の名前も名乗った紫音は、聞きたい事も聞いたしさつさと身を翻した。
と、

「お前……変わった奴だな」

背中からそんな言葉が飛んできた。

変わった奴、か。確かにそう思うのも当たり前かもしれない。一年前、姉が姿を消してから紫音はたった一人で随分と変わった。というよりも変わらざるおえなかった。姉がいなくても、一人でも生きていけるように自分自身を見つめ直して。

「ははっ……直球に変な奴、って言えば良いのに」

苦笑しながらそう答え、それは自分でも思った。思ってしまった。分かっている。自分自身が、他人とは何かがずれていて『変』な人間であることぐらい。

「じゃ、またね」

後ろ手に手を振りつつ、紫音は宿泊部屋へ戻るべく歩き出した。

第16話：それでも俺は悪くねえ（後書き）

今回は酷かった……色んな意味で酷かった……。
挿絵適当でごめんね。細かく描くと規制に引っ掛かったっちゃうかもしれないし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9381/>

たった一つの冴えない仕事

2011年1月31日12時10分発行